国際ロータリー第2680・2670地区

16回 RYLAセミナー報告

Rotary
Youth
Leadership
Awards
Seminar

1994.3.31〜4.3

1993〜'94年　国際ロータリーのテーマ

BELIEVE IN WHAT YOU DO
DO WHAT YOU BELIEVE IN
行動に信念を―… 信念は行動に―…

目　　次

プログラムのねらいと内容……1
セミナースケジュール……2

開講式
　ごあいさつ　石井　澄……3
　田村俊久……4
　谷口修平……5
オリエンテーション……6
オープニングパーティー……7
キャビンタイム……8

２日目講義　渡辺　忠……9
レクレーションタイム……25
キャンプファイヤー……26

３日目講義　塩月賢太郎……27
フォーラム……41

４日目講義　梶浦暲一……55
閉講式
　ごあいさつ　森　滋郎……67
　田村俊久……69
　谷口修平……70

参加者感想文
　A　班……73
　B　班……83
　C　班……93
　D　班……103

参加者名簿……113
第16回ＲＹＬＡ委員会……117

プログラムのねらいと内容

ＲＹＬＡセミナープログラムのねらいは、受講生に５つの特色を味わって貰うことにあります。

1）　高レベルの講義と討論
2）　キャビンタイム（親睦の熟成）
3）　自由と規律
4）　余島の自然
5）　カウンセラーシステム

セミナースケジュール

	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
3月31日									開講式 オリエンテーション			パーティー オープニング	キャビンタイム				
4月1日	朝食		講義 渡辺忠氏		昼食	レクレーション ヨット・テニス ソフトボール アーチェリー他					夕食	キャンプファイヤー キャビンタイム					
4月2日	朝食		講義 塩月賢太郎氏		昼食	思索の時間	バズセッション				夕食	フォーラム キャビンタイム					
4月3日	朝食		講義 楯浦暲一氏(総括)		感想文 閉講式 記念植樹 昼食後離島												

開講式

国際ロータリー第2680地区
ガバナー　石　井　　澄

本年で第16回を迎えるライラセミナーは、国際ロータリー第2670地区、第2680地区合同で毎回多大の成果を納めながら、発展的に開催されています。

今回も、第2670地区、田村ガバナーを始め関係各委員並びにカウンセラーの方々と共に、我が第2680地区のロータリアン、カウンセラーの方々が力を合わせて、よりレベルの高いセミナーを開催すべく準備万端御努力頂いております事に心より厚く御礼申し上げます。

ＲＹＬＡ、即ちロータリー青少年指導者養成プログラムは、ロータリー活動の大切な部門である“青少年への奉仕”の一環として1949年米国で設立された、指導者キャンプが発端となり、現在のようなプログラムは、1959年にオーストラリアとニュージーランドで始まりました。地域社会、国家、そして世界の将来を担う、磨けば輝く青少年達に、すぐれたセミナーの数々から、仕事、人生、社会、国家、文化、地球環境、南北問題等について学び、討議し、他を通じて自己を見直す、素晴らしいチャンスと考えます。

指導者の条件の大切な一つに“よく聞く”事が求められていますが、自主性を身につけ、自分を考える最良の場でありましょう。

全く知らなかった同世代が、すぐれた演者、カウンセラー、ロータリアンと３泊４日の出会いの中で、学びそして話し合い、多くのことを身につけて、あなた方を待っている同僚や少年達に伝承して下さい。

私達ロータリアンにとっては、あなた方青少年の将来性や指導性について、あらためて想いをめぐらせる場でもあります。これからは、地域社会で、指導的青少年として、優れた資質に磨きをかけて活躍されることを期待します。

青い空と海の余島での実り多く、一生光輝く灯を体得することを祈り、ご挨拶と致します。

国際ロータリー第2670地区
ガバナー　田　村　俊　久

第16回ライラセミナー受講の皆様ようこそいらっしゃいました。若い皆様方にお会いするのを楽しみにお待ち致しておりました。

1959年（昭和34年）、オーストラリア、クィーンズランド自治100周年記念式典にあたり、エリザベス女王は、アレクサンドラ王女を名代として派遣されました。ブリスベンロータリークラブは、王女を歓迎するために王女と同世代の地元の青年達も式典に参加させる事になり、一週間の研修がもたれました。この若い人達の集団の研修の成果が予想を超え、素晴らしいものであり、ロータリアンはこの催しを毎年計画し、実施する事に決めました。これがライラの始まりです。

以来20年を経て、1979年（昭和54年）に国際ロータリー第2680地区（兵庫県）と第2670地区（四国全県）の二つの地区が、協同してこのライラセミナーを発足させ、以来毎年開催し、本年で16回目を迎えました。皆様方は地区の青少年指導者であられる方や、指導者になろうとする考えをお持ちの方々ばかりです。毎年、タイムリーで未来につながったテーマが決められ、学習し、討論を重ねております。寝食を共にする事で心が通じ合い切磋琢磨していくことが出来ます。

社会人としての基本、目を世界に向け、その理解と親睦を深め、「リーダーとは何か？」を考えていただきます。また万能リーダーばかりが求められているのではありません。その人の個性によって、常にリーダーシップを発揮できる人こそが本当のリーダーなのです。

皆さんの持っておられる責任感、倫理観、人生観を自発的にどのように行動に移してゆけるかを問い続けるのがライラセミナーの目的です。ライラで新しい友人を得られ、人の心をノックし、自らの心を開いて楽しい時を過ごして下さい。

開講式

第16回ＲＹＬＡセミナー
ディーン　谷　口　修　平

皆さん、ようこそいらっしゃいました。第16回ＲＹＬＡセミナーにご参加下さったことを心より歓迎いたします。

このセミナーは受講案内の中でも、国際ロータリーの二人の地区ガバナーが述べておられますように、自然環境に大変恵まれた此処余島で、３泊４日の出会いと共同生活の中から、受講生の皆さんがお互い同士での、又講師の方々やロータリアンの方々との語り合い、学び合い、心の触れ合いを通じて貴重な体験と意義ある成果を得て、明日を担う青少年達の指導者として、一層の成長と飛躍をなさる事を願って続けられて来たものです。

自然環境の素晴らしさには、もう既に皆さんも満足していらっしゃることでしょう。そこで意義ある成果を期待して二つのことを付言致します。

１）自由を大切にします。（自律と他律）
この間の生活では自由を大切に致します。自由は自律に裏づけられねばなりません。又、一見他律と思えるものも皆さんの心の中で反芻して自律にまで止揚して下さい。

２）テーマ（「アジアの一員として私達はどうあるべきか」）に関連して
初めての試みなのですが、受講生の中にアジア諸国からの留学生の方々にも加わってもらいます。又、短い時間しかとれないと思いますが、それぞれに甘口、辛口の対日観、対日本人観も遠慮なく発表してもらいます。又講師の先生方は現地のいろいろな階層のリーダー達をよく御存じであり、又、その人達の育成にも精根を傾けて来られた方々です。

現在の国際社会の中で私ども日本人一人一人に課せられた使命とは何なのか、将又日本という国の進むべき方向はどうなのか、洞察力に富む皆さんの熟慮をお願い致し、延いては青少年指導の一つの指針としていただくことを念じています。

6回 RYLAセミナー
94'3.31→4.3 YOSHIMA
ROTARY CLUB

第16回 RYLAセミナー
94'3.31→4.3 YOSHIMA
ROTARY CLUB

オープニングパーティー

2日目講義

アジアの一員としての私達はどうあるべきか？

オイスカ（OISCA）理事
渡辺　忠

昨日の開講式からこちらに参加させて頂きまして、夕べのパーティー、そしてそれが終わってからロータリーの方々が夜遅くまでお話しされていたのを拝聴しておりまして、来る前にいろいろ考えていたことをこういうふうにすれば皆さんのお役に立つかな、というようなことを考えましたので、順序が行き違いになるかもしれませんけれどもお話し申し上げたいと思います。

〈資料本『開発教育最前線』配布〉

それで、今ご紹介頂きました「オイスカ」という団体につきましては皆さんのお手許にあります『開発教育最前線』にありますので、後で時間があるときに読んで頂ければ有り難いです。簡単に申し上げますと、オイスカが誕生しましたのは、1961年の10月６日です。これを提唱した中野與之助という人がおります。皆さん若い方は戦争を知らない、私も知らない世代なんですけれども、戦争が終わってから日本が復興する段階において、これから新しい世界秩序、本当の平和を作るためには新しい運動が必要でないかというような事から1961年の前からなんですが、これからは政治とか軍事力だけでは駄目、宗教家がまず団結しなければいけないのではないかというようなことがあって、1950年代に世界宗教会議というのを日本で開催しました。世界の仏教、キリスト教、回教、儒教、ヒンズー教からいろんな宗教家の代表を日本に招いて話し合いをしたわけですね。ところが、皆さんもご存じと思いますが、宗教家というのは自分の教えが絶対正しいのだというところからスタートしていますよね。だからなかなか一致点が見いだせないということで、今度は宗教家だけでなく、政治家、学者、実業家、文化人、婦人代表、そういった人に集まって頂いて諮問したわけです。それが1961年５月のことです。そしてその諮問に基づいて８人の代表が選ばれました。アメリカから一人、フランスから一人、これは英語とフランス語を代表するということで、エジプト、パキスタン、インド、ビルマ、フィリピン、それから日本ですね。宗教もカトリックもあればプロテスタントもあればヒンズーもあれば仏教もあれば日本の神道もある、回教もある、そういう宗教とか言語とか文化圏を超越したことで新しい組織を作ろうということになったのがこのオイスカのそもそものはしりなんです。それで理想をただ掲げるだけでは本当の世界平和は出来ませんね。現実には南北の格差が

今でも残ってます。そういったことでまず行動しなければいけないということから、具体的な行動を行ったというのがこのオイスカのいきさつです。

たまたま私は縁があってその創立の時からオイスカ活動に関わっております。今日は16回目にして初めてだということを昨日お聞きしましたけれども、日本の皆さんだけではなくお隣りの韓国、中国、台湾、インドの留学生の方もおられるということですけれども、私はオイスカの中で、特にいってみれば外交というものを担当しておりまして、今までに250回位海外に出たでしょうか。韓国にも行きましたし、台湾にも何回かおじゃましましたし、中国は中国共産党本部から招待を受けましてね。直接は行けませんでしたけど国連から派遣される青年指導の育成者という肩書きで中国にいきました。外国人に初めて存在が明らかにされたという北京の郊外にこのライラもそうなんですけど、中国の次の世代を担う若い人達を10何億の人口の中からスーパーエリートを集め、訓練しているセンターがあるんです。中国の指導者だった毛沢東、当時の首席ですね。鄧小平先生、そういった最高の指導者もそこの卒業生だという所がありまして、いろんないきさつがあって訪問させていただき、アドバイスといったらおこがましいですがそういったところに行きました。

インドでは、ちょうど皆さんの年くらいの20代に８年間程、ボランティア活動を行いました。1967～70年前半に資料の中にありますようにインドに延べ313人ボランティアが派遣されました。私自身は専門家ではありませんので皆さんの調整活動を行ってきました。それからＮＧＯという民間団体についてはＰ231からの伊藤道雄さんのところを後で読んで頂ければ分かります。ＮＧＯとは何かということが書いてありますので読んで頂ければいいと思います。そういう活動の中で日本ではまだまだ組織が十分に育っておりません。夕べもロータリークラブの先生方のお話し合いの中でインドの誰かから話があったということですけれども、日本は戦後ようやく国際協力というものを展開したばかりですから、アメリカやヨーロッパに比べて、非常に遅れをとっております。オイスカが出来て今年で33年目ですけれども、日本で一番早く国際協力を行うＮＧＯが出来ましたのは、明日講師としておいで頂けます塩月賢太郎先生が長い間事務局長を務められましたキリスト教医療奉仕団です。このお話は明日の午前中ご期待頂けるかと思うんですけれども、２番目に出来たのが歴史からいって私が属しておりますオイスカではないかと思っております。それくらい日本の民間団体の歴史は浅いわけです。日本の国際協力の枠の中で、政府だけで出来るものではありません。国民の参加もなければいけないということです。ところが民間団体でそういう経験とキャリアをもった人材が非常に少ない、今でもまだ少ないわけですね。そういったこともありまして、自己紹介になりますけれども、私はオイスカの人間ですから政府に属している者ではありませんけれども、政府から頼まれて国際会議にも政府代表として何回か参加したこともあります。

また政府が行っている国際協力をＯＤＡといいます。これは若い方、ご存じだと思います。政府開発援助といいますけれども、従来はうまくいっているかどうかを政府関係者と

か公的機関の人たちが評価していたわけです。でもそれでは手前味噌になるということで5、6年前から政府に関係のない民間の立場の人から率直な評価をしてもらおうという流れになってきました。そのなかで民間団体からそういう人材が他に少ないということで私が選ばれまして、南米のブラジルとウルグアイでやっている開発援助の評価をやらせて頂いたり、国連関係の仕事をするとかいろいろとやっています。現在はオイスカは国連にも認められています。

現在私はオイスカの代表として、ニューヨークにあります国連本部、ジュネーブの国連欧州本部、ウィーンにあります社会開発問題の国連事務局、開発問題では世界銀行、アジア開発銀行、南米では米州開発銀行という3つの金融機関があります。そちらも代表しているわけです。又、アジア太平洋の中で、特に太平洋の島諸国だけで構成されている南太平洋委員会、これは政府間の機関ですが、そちらの方にも代表しております。オイスカは日本の中で老舗の民間団体ですけれども、まだまだ組織としては大きくありません。そこで私は一人で対外関係の国際機関とか政府機関とかに顔を出しております。それで外国を旅行することが比較的多くなります。

今回も、先月後半に南太平洋のパプアニューギニアに行ってきました。そして、東京に一日戻っただけで今度はワシントンに飛んで、ワシントンから南米のブラジルとパラグアイ、ウルグアイそして4、5日前に戻ってきたという、そういった飛び回る活動をしております。そこで今日はアジアについてのテーマですけど、折角南米にも行ってきたばかりですので、最初に南米地域がどういった所かについて簡単にご紹介したいと思います。

その前に、一番最初に言っておかなければならなかったのですが、これを是非皆さんに見せたいと思って持って来ました。

〈石「ベルリンの壁の一部」紹介〉

これは西ドイツと東ドイツを分けた壁です。私はあの事件のあった時、すぐドイツにいる友達に手紙を書きまして送ってくれと頼んだんです。これは本物ですよ。あの後日本でもデパートなどで売られたようですが、これはちゃんと番号とドイツ語で書かれた証明書が入っているんです。壁が崩れた直後限られた数だけ正真正銘の物が出たんです。それがこれです。この中に民族を分けたいろんな怨念が詰まっているんだろうと思うんです。飛行機で送ってもらったからこんなに小さいんです。

〈石「ピナツボ火山の火山石」紹介〉

もう一つはこれです。フィリピンのピナツボが火山になりましたね、3年位前に。ピナツボから出た火山灰を固めた物です。これは飾り物か何かでしょう、マウントピナツボ、フィリピンと書いてありますから。

こういうふうにちょっとした石ではありますけれども、片方は新しい歴史が始まったことを象徴する石、コンクリです。もう一つはピナツボの火山によって大変な、世界的な気象異変が現在でもまだ一部続いているということもあります。ですからこういった新しい

時代に若い皆さんが生きていかなければならないという象徴のために参考までにと思って持ってきました。

さてテーマにありますように『アジアの一員としての私達はどうあるべきか』ということですが、特に若い人たちはアジアだけでなく世界的な視野をもってこれから行動しなければいけないと思います。その一つの参考として、なぜ南米に関わらなければならないかということですが、それはこの本のＰ.121の海外移住の歴史と未来像のところを見て頂ければわかります。これはＪＩＣＡ国際協力事業団の人に話していただいたのをまとめたものです。南米には私たちの同胞が150万人位います。日本人ですがあえて日系人とよんでいます。一番多いのはブラジルで約120万人います。そして今は４世まで生まれています。１世の方がブラジルに移民されたのは85、6年前ですが、２世位まで日本語がわかり、しゃべれます。しかし３世、４世になると一部の人を除いて日本語をしゃべれません。そして考え方も日本に住んでいる日本人とかなりの食い違いがあります。しかし体に流れている血は100％日本人の血です。そういった人たちがお世話になっている国々ですから、日本としても政府はもちろんですが、国民としても出来るだけの恩返しをしなければならないということで、オイスカでは向こうからも頼まれまして、ようやく南米においてもなんらかの活動をしようではないかということがあって今回私が具体的な活動計画のために行ってきました。

2日目講義

ブラジルといえば皆さんが一番に頭に浮かぶのはアマゾンの大変な熱帯林だと思います。ですが、環境問題から私たちはアマゾンとかブラジルに対する大変大きな誤解を全体として受けていると思います。それは現場にいってみないと新聞、テレビの報道が本当に正しいとはわかりません。往々にして最近地球環境ということが問題にされてマスコミからアマゾンが燃えているとか、人工衛星からみてもアマゾンからどんどん煙が出ているんだということをおそらく新聞やテレビでご覧になったことがあると思います。一概に嘘だとは言えません。しかし一つだけ言えることは、世界の心臓だといわれるアマゾンは我々が考えるほどひ弱な所ではないということです。ブラジル全体でいえば確かに森林は減っています。ですが、アマゾンといわれる地域は日本の10倍以上はあるんです。今のところ2％位は破壊されています。それは事実ですが、まだまだいわゆる世間で言われるような危機的状況には至っておりません。そういった点では安心出来ると思います。そういうことをマスコミが書くとおもしろくないわけです。センセーショナルでなければいけないということですね。これはアマゾンに住んでる人に聞いても、アマゾン地域の研究をしている日本の専門家に聞いても、まだまだ安泰ということです。そういったことの理解からした方がいいと思います。

ただそれ以外の地域はいまかなり破壊されています。ですから植林をしなければなりません。しかし木を植える、植林という感覚、これが今回も行って本当に驚いたんですが、指導者も一般の国民も木を植えるという感覚がないんですね。先週の初めにはブラジルにいたわけですが、いろんな人に会いました。ブラジルにも植林をしたらどうですか、アマゾンだけではだめだから他の地域にも木を植えたらどうですかというと、「えっ、木を植えるんですか」と言われるわけです。熱帯に住む方は木は自然に育つものだと思っているんですね。こういったところから、意識から変えなければならないんです。ですから今回このセミナーに参加されているような若い皆さんがこれから取り上げなければならない大きなテーマだと思います。

ブラジルに行って感じるのは保護です。いま残っている天然林、自然林を保護しようということはやります。しかし保護するだけでは将来おぼつかないわけです。もちろん保護することも大事です。片方で人口はどんどん増えるわけです。そして木の数を増やさなければ地球全体の環境は悪化する一方なんです。しかしどうしても植林に対する感覚が非常に薄いです。これは南米ばかりではありません。熱帯アジアでもそうです。こういったことをとにかく急いで対応しなければなりません。これは21世紀をになう人たちにとっての大変難しいことですが対応して行かなければならないことだと感じてきました。

〈雑誌『アマゾニア』紹介〉

そういったわけで、私が今回皆さんに紹介したい本があります。頼まれてピーアールするわけではないですが……『アマゾニア』というアマゾンの雑誌が最近刊行されています。これはブラジル人が発行しているアマゾンをとらえた本です。今までは外国人がいってと

らえていました。おそらく初めてではないかと思いますが、これはブラジル人の目でアマゾンを見ている本です。これはポルトガル語と英語で書かれています。まだこれで３号目です。若い皆さんはこれから英語なども覚えていくでしょうから、関心のある人はこういったものを読んで、その国に住む人が環境をどう捉えているか、世界的焦点となっているアマゾンをどう見ているかということに対する理解を持つことが大切だと思います。

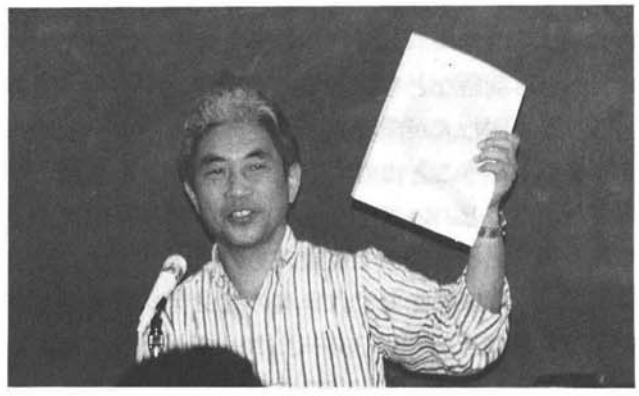
なぜ私がこの本を紹介するかといいますと、この本の編集長は日系３世のタニア野村というお嬢さんなんです。30ちょっと過ぎで６歳の男の子がいます。日本語は片言ですがアメリカの大学を出て英語は非常に堪能です。日本のフジテレビで報道関係の研修も受けています。それから将来の南米の若手のリーダー、ホープということで日本の外務省からも招待されて、日本に来たこともあります。非常に理知的なお嬢さんです。来年はたまたま日本とブラジルが修好条約を結んで100年になります。こういう記念ですのでもし彼女が日本に来るようなことがあればそういう人たちと対話をする、同じ日本人として、しかし感覚は違いますが、そういうことが国際感覚を磨くには役に立つかなと考えます。

それともう一つ、受講生の中でパラグアイのことを話していた方がいましたが、パラグアイには今、日系人が約８千人います。しかし森林が少ししか残っていません。国土面積にたいして森林面積が世界で一番低いのはパラグアイです。５％しか残っていません。今回も行って見てきました。残念ながらこれでさえもまだ植林するという感覚が育っていません。そこで日本から働きかけて植林をしようではないかと向こうの若い人たちを通して呼び掛けていく可能性としては残っているのでないかと感じてきました。ここで青年協力隊で林業をやっている人に会いました。東京農大を出て山の中で苗木を作っていました。苗木を作って住民に木を植えましょうと呼び掛けても、なかなか植えないと言うことです。一人二人の力では何ともならないなということを感じます。しかし、そういったことをやっていかなければならないのがこれからの問題かなと思いました。

南米においてもそういったいろいろな問題がありますけど、今、何と言いましても地球環境と言うことです。これは大事なことです。昨日はこの余島をずっとまわってみましたら、こういう自然の中にあっても虫くいで木がどんどん倒れています。しかしホッとしたのは、その辺に植林していました。やっぱり日本人は植林という感覚があるんだなということを小さいスケールですが見て、安心しました。こういうことをこれからやっていかなければならないということを感じます。

それでは南米の話はこれくらいにしまして、これから将来を嘱望される皆さんが新しい時代を担うリーダーとしてどういうことをやったらいいかという一つのヒントをもたらすために、私がアジア太平洋青年フォーラムに関わったときの活動を紹介しながらヒントを導き出したいと思っています。今日はエイプリルフールですが、事実にそった話ですので、聞いて頂きたいと思います。

先程の自己紹介の中でもインドに８年程いたということを申し上げましたが、オイスカ



の活動の中でも南北の格差を是正するために非常に地道な方法ですが、日本として、アジアの一員としてお役にたてる方法としては、日本人が身に付けることができた技術でしょう。そういったもので発展途上国の人たちにお返しすることだと思います。援助ということは私たちは民間ですからそういった表現は致しません。というのは日本が現在ここにあるまでの発展に至ったのも、何もない中で天然資源、原料をアジアとか太平洋とかアフリカ辺りから受け入れることによって初めて日本はここまできたわけです。そういった礎を築かれたのはここにもいらっしゃいますご年配の方々のご努力によって、私たちは日本民族として生きていく技術を身に付けたわけです。そして国際協力の中でよく言われることは、食べ物とかお金をあげてしまうとその国の人は食べ物を食べてしまう、お金を使ってしまったら何も残らないわけです。よく言われます魚を釣る方法、自分で魚を釣る方法を身に付けさえすれば自分だけでなく、家族もコミュニティという社会の人も自立出来るんだと言う、それが国際協力の基本原則なんですね。そういったことで、アジア、太平洋の国々に対して日本からボランティアが出て行きました。その一方でそういった国々から次の世代をになう皆さんのような、皆さんは日本にあって次の世代を担わないといけないわけですが、それぞれの国にあって次の世代を担わなければならない人を研修生として日本に招待して参りました。その数が現在までには４千数百名、そういった人たちが、少なくともオイスカのルートを通じてそれぞれの国で育っています。そういった過程で私どもが考えついたのが、このライラセミナーと同じ発想です。共通点が十分にあると思いますが、次の時代を担う人たちを国境を越えて一堂に集めて話し合いをやってみようと言うことです。それが1976年のことです。タイのバンコックで日本からも若い人たちが行きました。そしてアジアはパキスタンからインド、ネパール、バングラデュという南西アジアから、そして東南アジアの国々、および太平洋のパプアニューギニア、フィジーからの青年代表に初めて集まってもらったわけです。そうしますとやっぱり実際に行動してみて初めて実態が分かりますね。おそらく皆さん若い人の中にもまだ外国に旅行する機会のない人は、まあ、だいたい一回位は行った人が多いでしょうが、そういった方には適応できるかと思

いますけど、例えばフィリピンの青年リーダーが外国を見たことがない、外国の青年と話したことがないというと自分たちは貧しい、そして自分たちが発展しないのは日本がいろんなものを略奪するからだ、政府は……という犠牲的な精神しか持たないんです。同じようにインドネシアの青年も自分たちは虐げられていると、そうしてその反動として反発するんです。反政府になる、反体制になる、すべてに反発する。それがあの時代の各国の青年リーダーの大体の姿でしたね。リーダーがそういう姿勢をとるから自主性のない若い人たちは何かにつけ反発する。ところが、自分たちが行動するということはなかなかなかったわけです。しかし、初めてバンコックに十分な人数ではないにしろいろんな国から青年代表を集めて同じテーブルで皆さんがキャビンディスカッションを行った形で話し合うと、なんだフィリピンでも同じなのか、インドネシア、パキスタンでも同じなのか、と一つにはみんな安心するんです。自分たちだけがそういう立場ではなかったんだ、それと同時にそれじゃあ皆で力を合わせれば何か新しいことが出来るかもしれないと、そういう発想ですね。その基盤を確立することが出来たと思います。そして私共がやりますアジア太平洋青年フォーラム、正式にはアジア太平洋地域開発青年フォーラム、日本語の地域開発は英語ではコミュニティということですね。コミュニティとコミュニケーションとは連動していると夕べもロータリアンの先生方もおっしゃっていましたが、直接の形でコミュニケーションをやっている、意思の疎通をはかっている、そうすることによって、水平での理解が深まるということです。

ただ話だけでは空論に終わってしまいます。そこで話をしながら、今度は実際に各国の青年代表を一番貧しい村に連れて行って、現地の村人たちと一緒に朝から晩まで農村作業をやったわけです。ある者は水路を造る。ある者は堆肥を入れる所を造る。ある者は稲刈りをやる。一緒に炎天下で汗を流すことによって自分たちの生活を支えてくれる農民は大変なんだなということを理解するわけです。そしてそういった作業の後再びキャビンミーティングの形で話し合いをするわけです。そうすると最初の出会いと最後の出会いでは話が全然違ってきます。いわゆる現実的な話になるわけです。最初の時は理想論、空論です。こうあればいい、ああすればいいじゃないかと。ところが実際に自分たちが汗を流すと現実はなかなかそうはいかない、本当に国造りをやるのは難しいんだな、ということを理解するわけです。そこで一回だけでは不十分だから今度またやろうじゃないか、ということで、私自身が立場上、手配から運営を1976年から86年の10年にわたって担当させて頂きました。そのフォーラムは日本ではやりませんでした。タイでやったあと、台湾、マレーシア、インドネシア、フィリピンでやりました。

そういう動きの中から……これからが大切なポイントですから皆さんぜひこういう発想で行動して下さい。その話し合いで参加者の中から意見が出たのは、そうだ国連に働きかけて青年ということを世界の人にアピールしようじゃないか、青年がこれからの新しい時代を築けるんだというアピールしようじゃないか、ということになりました。1978年イン

ドネシアのボロブドールという世界的な仏教の遺跡がある所でボロブドール宣言というのをやりまして、その中に国連の事務総長に対して国連が国際青年の年、英語ではＩＹＹ（International Youth Year）それを世界で初めてアピールしたわけです。あの当時途上国ではＦＡＸがなかったので、それをテレックスで送ったわけです。各国の代表が連名でそれを署名しました。そして参加者がその費用を皆で出し合いました。参加ということです。人にやってもらうわけでなく、自分たちで決めて、自分たちでテレックスの費用を出し合ったわけです。もちろん人数は300人位いましたから僅かなお金でした。そういうことをやることによって国連の事務総長に送りました。そしたらなんと国連から、あなたたちの提案を考えようという返事が届いたわけです。それなら皆で代表を派遣しようではないかということになりまして、アジア太平洋の青年代表団を組織して、たまたま私が関わっていましたのでニューヨークの国連本部へ引率して行きました。そして、国連の代表とか、各国政府代表に国際青年年ということをアピールしたわけです。ところが、簡単ではありません。新しい時代を築くということは、私の体験から申し上げますが、簡単なことではないんです。

まず、アジア青年と一緒に日本の国連代表部に行ったら、赤松良子公使、今の文部大臣が代表部におられたわけです。私たちはこういうことで挨拶、キャンペーンに来ましたと申し上げたら、どんな反応があったと思いますか。ひどく怒られたんです。「あなたたち、何をやっているんですか。国連という組織は政府がやってもなかなか動く組織ではありません。それをあなたたちは民間ではないですか。それを青年の声くらいで国連が動かせる、そんな生易しいものではありません。」と言われたんです。「そして、それを日本の人たちが動かしている。もしこれがうまくいかなかったら日本の恥になるんですよ。」とこっぴどくしかられました。私は赤松公使を批判する気持ちはありません。それは立場として本音だったと思います。

ですが、もう後へは下がれません。皆、仲間からお金を出してもらってニューヨークまで来たわけですから。やってみようじゃないかということでキャンペーンをやったんです。そういういきさつがありまして、結局次の年の1979年に国連総会において93カ国が共同提案国になって、1985年に国際青年の年を実行するということが国連総会で決まったわけです。来年50周年を迎える国連の今までの歴史の中で93カ国が共同提案になった議案は他にありません。歴史的な議案となったわけです。そういう実際の体験があります。今までは国連は歴史的にアメリカ、ヨーロッパ主体、今でもそうですね。しかし、アジア太平洋の青年たちが外交権も何もないけれど本当に思いを一つにして行動すれば不可能といわれた国連までも動かすことが出来たという、歴史的な事実として残っています。

ですからみなさんにこれからの将来の夢としてですが、一人一人では何も出来ないかも知れません。しかし、例えばこのライラセミナーにしたって、今年で16回目です。今までの数を合わせれば大変な数です。そういった人たちが何らかの形で結び合って、年配の方

々からご指導やアドバイスを頂きながら行動すれば不可能なことを可能にする、新しい時代を築くためにすることは決して不可能ではないと思います。しかもこのロータリークラブというのは世界的なネットワークをもっていますから皆さんと同じような世代は世界中にいっぱいいるわけです。ですからそういったネットワークをこれから築いていって行動して行けば何か新しいことが出来る、そういったことを私自身の体験から一つの提案として申し上げてみたいと思います。

そしてそれが決まったのが今申し上げたように1979年の国連総会ですが、新しい10年が始まる1980年１月にスリランカのコロンボに再びアジア太平洋の青年が集まりました。意気揚々と、これで自分たちの一つの夢が実現出来たと。それじゃあ今度は皆が一致して出来る行動計画はなにか、国境を越え、イデオロギーを越え、人種の違いを越えて行動出来る計画は何かと皆で協議したわけです。そこで決まったのが、アジア太平洋緑化宣言という緑の宣言です。1980年代においては世界に率先して、植林をしようじゃないかということになったわけです。今、現時点は環境問題ということで世界は騒いでいますが、あの頃はまだそこまでいっていませんでした。それがアジア太平洋の青年たちが自分たちの発想の中で世界を緑にする運動というのを展開していきました。これも流れの中から出てきたことです。それが共通テーマ『ラブグリーン』です。

〈ステッカー：ラブグリーン〉

これは特許庁に登録しています。たかがラブグリーンではないかといわれるかも知れませんが、最近は環境問題が盛んですので、いち早く登録したわけです。今では国連も採用して、オイスカから国連にステッカーを提供しています。アジア太平洋の青年たちが『ラブグリーン』という共通テーマで植林を行っております。すでに行動計画は順調に進んでいますね。

ところが、植林というのは単純なことではありません。植えるということは誰にでも出来ます。でも木というのは植えてからが大変なんです。管理しないといけないんですね。例えばこういう実例があります。東北タイでのことですが、ラオスとカンボジアの国境辺りは非常に貧しいところでみんな木がきられてしまって何にもない、砂漠になる直前でした。そこに日本からの人々、アジアの青年代表が行って、1980年７月に地元の2,000人が集まり、大々的な植林をやりました。もう鳥も一匹もいないくらい環境が破壊していたんです。ところが、１年後に行きました。そうしたら植えた木の80％が全滅でした。残ったのも、あんな暖かい国で僅かしか育っていませんでした。そこで再び、日本から行き、地元の人々も集まり、木を植えたんです。それを３年間繰り返しました。そうしたら、５年後には何にもなかった所がこんもりした森になりました。鳥がやってきました。虫が寄ってきました。それを見て初めて住民は自分たちで植え出します。あれから14、５年経っていますけれども、もう今では私たちが関知しなくても、毎年雨季がくると自分たちで木を植えています。最初は失敗です。２年目、３年目も失敗です。そうしてようやくという経験をしております。そういったことですから正しいことをやる、環境の問題をやるからすぐうまくいくということはあり得ないと思います。けれどもそういうことを覚悟の上で継続してやっていく、何事も継続してやらなければならない、行動ということです。

このことをぜひ環境だけに拘らず、皆さんやろうとしなければいらないことは沢山あるはずです。今私は一つの例、経験として申し上げているだけですから、後は皆さんの知恵と行動力にかかっています。ですからこういう重要なセミナーに選ばれ、参加出来たという喜びと名誉を無駄にしないようにするためには何か行動計画を考えるような流れになってくれればと思います。

また今日環境計画の中で、山に木を植えるというのが日本人の感覚ですが、必ずしも山にだけ木を植えなければいけないということはないんです。平坦部、海岸線も守らなければいけません。海ですね。環境破壊というのは海岸線からもやってくるんです。海の所に木が生えていない。特に熱帯はそうです。木が生えていないと魚が育たないし寄ってこないわけです。そういった事で私たちが手掛けている一つのプロジェクトに『マングローブ』の植林があります。皆さん『マングローブ』を見たこと、聞いたことがありますか？　多分ないと思います。では、インドネシアでやっている『マングローブ』の植林を見て下さい。〈ビデオ観賞『マングローブの植林』〉

今アジアの中で海岸線が大変破壊されています。一番大きな原因はエビを食べる日本人にあります。エビというのはマングローブの下で育つんです。日本人がエビが好きでどんどん輸入するようになってフィリピンでもインドネシア、マレーシアでもマングローブを伐採して、エビの養殖場を作ったんです。２年位はそのままでもエビは育ちます。ところが、その後はエビは育たなくなるんです。マングローブがあることによって、プランクトンやいろんな有機物が沈殿されます。だからエビや魚が育つわけです。こういうマングローブを植えることは日本人が沢山食べたエビの代償になるかと思います。植えなければいけないところはまだまだあります。少し植えたくらいではとっても追いつきません。山の木が消えていくのと同じように海岸線からマングローブの木が消えていくのは大変深刻な問題です。こういったことに対する日本人全体の意識というのはまだまだありません。次の世代を担う若い皆さんにこういう側面もあることをぜひ知ってもらいたいと思います。

また毎年一般から参加者を募集していますが、最近大学生が結構多いです。これはマングローブばかりではないですが、夏休みに30日植林ボランティアということで、参加費の半額を補助して募集しますと、毎年大学生が250～300人位応募してきます。実際に私たちが派遣出来るのは40人位です。それに参加出来た人はフィリピンやインドネシアの山の中の電気も水道もない所で現地の人と一緒に木を植えて帰ってくるんです。それが人生の中で若い大学生たちに大変大きな思い出になり、それが口こみで広がって毎年断るのに困るくらい応募があります。私たちにとりましても、それほどまでに若い人たちが何かしなければいけないんだという意識が高まっているということを感じています。

それからもう一つ、マングローブは大変重要な役割を果たしています。バングラデシュという国はベンガル湾の内域に挟まってサイクロンがくる所なんです。毎年何万人という人がサイクロンの犠牲者になって死にます。新聞にもよく出ています。なぜかと言いますと、やはりエビなんです。この辺も昔はマングローブが沢山生えていました。外貨を稼ぐために養殖場にきりかえ放っておいたために、突風が集中し大変な被害が出てきました。これは地形的にも避けられません。そこでそこにマングローブを植えることによって、被害を最小限に押さえることが出来るということで、ここでは毎年75万本ずつを植えています。

ただビデオにありましたようにインドネシアではちゃんと木にくくり付け、数が少ないからいいですが、たくさん植える場合は、マングローブというのは海岸線に植えますから引き潮のときに植えるわけです。それが満ち潮になりますと流されてしまいます。また引き潮に行って補植するという、これは海水との戦いです。マングローブが根付くまでには大変な努力がいるということです。何を植えるにしても決して簡単には出来ません。しかし育ち始めれば再び魚もエビもすべて戻り、しかも天災からも人間を守ってくれるということで具体的に行動することがこれから非常に大事ではないかと思います。

それから時代の流れがすごいと思うのは、今年で12回目をインドでやりましたアジア太

平洋青年フォーラムの仲間の中から副大統領、首相、副首相となった仲間が育ってくるんです。皆さんが参加しているセミナーも同じです。卒業して来年からすぐどうというのではありませんが、思い出を残して行動していくうちにやがて地域、コミュニティのリーダーになっていくだろうと思います。その輪を、例えば皆さんの場合ロータリーインターナショナルネットワークを通して同じ世代に連動させていくとこれは大きな力になるだろうと思います。

自分のことをいうわけではありませんが、例えば私の場合でも1976年から20年近くこういったことをやってきた成果として、国家的な指導者になった人でもアポイントをとらずに会ってくれるというような人間関係を築くことが出来るわけです。そういったものが将来の幅を広げて行く上で非常に重要な役割を果たします。

皆さんは今若いからそんなことを言っても出来るわけないじゃないかと思う方が大多数だと思います。しかし、自分が持っている可能性は他人が作り上げてくれるものではないと思います。自分自身がまずそういう意識を持ってその中から自分を磨いて行く、常に努力をしていく、そういうことによって新しい時代を築く大きな力になると考えます。

そういった活動を進めるにおいて今世界的に“持続可能な”という言葉が出てきています。英語では sustainability、そして sustainable、発展、開発、前進そういったものがこれからの時代を築くキーワードとなっています。

ひとつ皆さんにこう考えたらどうかということを提案します。命の連鎖（life chain）という言葉です。夕べ星を見ましたか？　空を見るということがこれから非常に大事になってくるんです。哲学を申し上げようというのではなく、新しい時代を築くためにはまず私たちの命の源はどこかということを考えますと、これは宇宙の始まった150億光年前にその瞬間から生まれた物質が今でも私たちの肉体に存在しています。時空をこえて私たちの

命は連鎖しています。これは未来にも続けていかなければなりません。これが命の連鎖ではないかと思います。普段はこういうことを考えることはないかも知れませんが、今環境問題にしても地球的なテーマになっています。このままいけば地球、人類はどうなるのか。こういう話を聞いたことがありますか。

蓮の花が毎年２倍ずつ増えていって100年後に池の中に充満して全滅したという話です。では、池の蓮の花の面積が半分になったのは何年後でしょう。これは倍々ですので99年です。98年過ぎても４分の１しか池の表面に蓮はないわけです。誰も蓮が全滅するとは思いません。１年前の99年でもまだまだ半分水があるから大丈夫だろうと誰も危ないとは思わないわけです。そうしたら100年後に蓮は全滅しました。今、私たち人類が直面していることも同じようなことではないかと言う警告の例えなんです。今ここで地球が危ないと言っても、おそらく誰もそんなことは思っていないだろうと思います。しかし、そういう瞬間が刻々と迫っていることは事実です。

46億年前に太陽系の一つとして生まれた地球、そして銀河系には太陽と同じような恒星が２千億位あると言われています。また150億光年の広がりをもつ宇宙には２～３千億ともいわれる銀河、私たちの住む銀河系よりも大きな銀河は無数にあるわけですね。夜空に見る星の一つ一つには私たちの銀河系よりも大きい星が無数にあるわけです。私たちの体は60兆位の細胞で構成されています。それと同じ位の銀河がこの大宇宙にはあるという事実ですね。私たち人間と宇宙とは同じようなものを持っているのではないかと思います。また人間を構成しているＤＮＡと呼ばれる遺伝子は生物が発生して以来、同じ物がずっと生きているんですが、その中で役割を持つ遺伝子はほんの数％しかないといわれています。同じように大宇宙を見た時に何十兆といわれる銀河系がありながらも、質量は数％しかないとのことです。残りは何なのか、最近問題になっている暗黒物質ですが、それが存在するからこそ星が光輝くことが出来るということです。そういったことと対比して、私たちは人間の尊厳さを感じることが出来ます。

同じようにこれだけの宇宙で生命が存在する惑星は地球だけだということです。太陽と地球との距離があと５％近い、また５％遠かったら人類も生物も存在しなかったということです。それではどうして地球にだけ水があり、生物が存在しえるのか。これは偶然でなく、必然的と考えてしかるべきです。これだけの大宇宙の中で生物が存在するのは小さな地球だけ、しかも生物の中で最後の存在として生み落とされた人類です。そういった人類が自分たちの都合でこの地球を破壊していいのか。このままでは近い未来に人類が存在しなくなるかもしれません。地球は壊れないと思います。しかし地球が滅亡して人類が存在するということは有り得ません。そういったことを考えますと、自分たちが与えられた生命、そして命の連鎖ということを次の世代に継続しなければならない役割を担っていると思います。

新しい時代を担う皆さんはこれからやらなくてはいけないことが限りなくあるだろうと

思います。何をすればいいかということは皆さんの英知を信用しなければなりません。自分は関係ないと思っているようではいつまで経っても駄目です。折角この世に生まれてきたのだから、社会のために働かないで一生を終わるのはあまりに勿体ないと思います。生まれてくるのでも何億個という精子同士の生存競争の中で一つの卵子に出会って、選ばれてきたわけです。精子の中にある遺伝子はそれぞれの役割が違いますから、背後にはお父さんお母さんの意思だけで誰が生まれると決定されるものではありませんから。選ばれた中に自分があるということです。宇宙の中でもそうなら、人間が生まれてくるのも意義を持って生まれてくると思います。だったら、一生のうち人のため社会のために何かやって見ようというのが人間の生きる道だと思います。これはオイスカで教えられてきていますが、ロータリーでも同じ、人間としての普遍的な生き方だと思います。

そういったことを考えながら今度は日本人がアジアの中で何をすべきかを考えた時に、まず一つは宗教だと思います。日本から一歩外に出ると人々は例外なく宗教によって生活を規制されているということです。外国人との付き合いの中で自分は神を信じないというとそれで相手は信用をしなくなります。アジアは世界の宗教の宝庫です。例えばインドにはヒンズー教、インドネシアのバリ島にもありますが、全体ではインドだけの宗教です。回教それから仏教、これはスリランカ、タイ、日本、韓国。仏教があるのは世界の中でもアジアだけだと思います。中国には儒教、道教そして神道というのは日本独特の宗教です。世界的なカトリック、プロテスタント、チベット奥地にはラマ教というのがあります。ダライ・ラマという方をご存じですか。ノーベル平和賞をもらった方です。

つまり外国に出ると必ず宗教が国民の生活を規定しています。私たち日本人は宗教に対する理解を持たなければなりません。そして、宗教には関与しないということです。アジアに限らず、ヨーロッパ、南米、アフリカでも付き合いの中では宗教論争だけは避けた方が無難です。お互いの宗教を尊重するということが大事です。しかし私たちは、日本人の価値観を強要しようと無意識にはたらき、残念ながら特にアジアに対して強いです。白人に対してはそうでないのにアジアの一員でありながら経済的な遅れだけで後進国という意識を持つことは避けなければなりません。私たちは近隣諸国のアジアの人たちから謙虚になって学ばなければならないことが沢山あります。例えば留学生として日本にくると日本からだけ学ばせればいいという態度です。留学生から自分たちが何かを学ぼうという姿勢を持つ人は少ないと思います。しかしそれでは本当の意味での付き合いは出来ないし、日本が本当に信頼される民族にはなれないと思います。地理的には日本はアジアにあります。アジアの民族であるならアジアの人と心から分かち合える、やってあげるという姿勢でなく平等の意識を持つことです。英語でいいますと、

action－in－partnership

partnership－in－action

同等の立場で行動するという心構えが大切だと思います。現実には難しく、日本人がフィ

リピンやタイへ旅行するとステテコで歩いたり、靴を履かなかったりいろんな問題がありますね。そういったことでは日本がいくら経済協力をしても本当の意味でアジアの人と友達にはなれません。事実、今まではなれませんでした。

今日本が国連で常任理事国になろうとしても、アジアの人たちがそれを支援しようとしないのは潜在的に日本人に対する不信感があるからです。戦争があったことも事実です。しかしあれから半世紀は経っています。歴史を否定するわけではありませんが、全く新しい感覚で本当の意味で21世紀において世界から信頼される民族になるための基盤を築くのはこれから皆さんが行動する以外に有り得ないと思っています。そういう時代に選ばれて生をうけたということ自体、一人一人に課せられた重要な役割だと思います。必要なのは価値観の共有です。あえて申し上げておきますが、日本人にとって本当に仲良く、信頼し合っていけるのはアジアの人たちなんです。

私たちの先輩は国としての基盤を築くために精一杯でした。皆さんの年代になると意識も行動もグローバル精神、全地球的な感覚を持って行動することが大切です。外国へ行くことがすべてではないですが機会がある時は観光を超えて、訪問する国の人たちの物の見方、生活、考え方、食生活を知るように一つ提案ですが、出来ることなら日本食を持ち込まない方がいいですね。その土地の人たちが食べている物を食べて下さい。その地の食べ物を食べることによってその民族の考え方が分かります。徹底してその国の人たちの生活に合わせる姿勢を持ってもらいたいですね。外国へ行った時には心をカラッポにして受け入れてみる。合わないものはおいてくればいいと思います。おいてきながら理解するという海外との交流、そうすることによって徐々にグローバルな感覚が生まれてくると思います。

またボランティア精神を十分に発揮する人生をおくることもすばらしいと思います。日常生活で出来る範囲でボランティア活動に参加してみる。何でも積み重ねですね。それで新しい人生が生まれ、ネットワークが広がり連帯としての活力が生まれてくると思います。ここでボランティアということで、フィリピンでの私たちの仲間の実例を見て頂きたいと思います。

〈ビデオ『ネグロスもう一つのチャレンジ』〉

国際協力の原点は一人ずつでも自立することです。それは社会にも影響を及ぼします。これから皆さんがやらなければならないのはコミュニティ、水平的なネットワークだと思います。縦は先程申し上げた命の連鎖ですね。こういったことを心において行動して頂きたいと思います。こういうすばらしいセミナーに選ばれて参加したということを常に念頭におかれてこれからの日常生活、そして将来の人生設計の中にも役立てていかれることを期待しております。ありがとうございました。

※〈　〉内は渡辺先生の持参資料

レクレーションタイム

キャンプファイヤー

3日目講義

アジアの一員として今日の世界に生きる

明治学院大学国際学部教授
塩月　賢太郎

お集まりの皆さんの中には随分いろんな経験をお持ちの方がいらっしゃいますが、私も自分の限られた経験をもとに与えられたテーマに則して今どんな事を考えているのか、お話をしてみたいと思います。

ご承知のように来年1995年は第２次世界大戦が終わって50年、あれからもう半世紀が過ぎようとしております。日本では1945年、敗戦の時から、日本が再び国際的な舞台に立って役割を持つようになった1960年位までの間、当時のアジアの状況がどういうものであったかという事については殆ど知る事ができませんでした。アジア各地にいた日本人は殆ど帰国し、新聞記者の派遣や企業の進出もなかったその間、私達はアジアがどういう状態であったかという事を考えたり、体験することもなく、自分たちのその日暮しと、日本の復興におわれているうち、いつの間にか日本は経済的な意味でだんだんと大国になって来て、なかなか経済発展のうまくいかないアジアの国々に対してどう協力したらいいのかという問題に一度に直面したわけであります。

１）敗戦直後のアジア体験

私は不思議な縁で1948年、敗戦直後からアジアにいろんな形でかかわる事になり、上海やインドに行く機会がありました。その時私がアジアの事をどういう風に感じたのかという事を初めに少し話をさせていただきたいと思います。

私は終戦から２年目の1947年秋、大阪大学の工学部を卒業いたしましたが、これから日本の再建の為には、エンジニアとしての道に進むよりも、青少年活動の為に関わりたいと思い、ＹＭＣＡに入りました。

それから１年後まだ24歳の時でしたが、1948年暮れに今のスリランカでアジア全地区のキリスト教の青年運動に関係をしている指導者の研修に参加するという幸運な機会を与えられました。当時日本人は完全にオフリミット、立ち入り禁止になっていた羽田空港から上海に飛びました。その頃中国大陸では蒋介石軍と毛沢東軍との間に内戦が続いており、上海は共産軍によって正に陥落寸前の状態でした。私達はその混乱の状況の中にビザもな

にもなしで上海に入って次の便を待つこと２週間、いろんな人達と会いました。

蒋介石軍がどんどんと香港或いは台湾へ飛行機で脱出するなかで、私達は同じ会議に行く事になっていた上海のＹＭＣＡの関係の人達と話をしました。クリスチャンである彼らに、「この共産革命にあなた方はどの様に対応するのですか？　香港や台湾に避難するのですか、或いはここにとどまるのですか？」そんな話をしました。「私達はここへ踏みとどまって革命を必要としている中国の為に働きます。中国人は必ず共産主義を変えますよ。」私はそんな事が出来るのかなと思いながらも、生命の危険も顧みない彼らの決心が堅いことに非常に感激をし、そして彼らと一緒に会議の開かれるスリランカに向かい、カルカッタに飛びました。

カルカッタは丁度インドが独立直後の本当に興奮と混乱のるつぼでありました。インドとパキスタンが別れた為に大勢のヒンズー教徒がどんどんとパキスタンの各地から帰って来て、道路という道路は避難民で溢れていました。ところが不思議な事に私はその悲惨な状況を見ても、ものすごいショックを受けるということはなかったのです。というのは当時東京もまだそういう状態だったからでしょうか。むしろそんな困難のなかにも青年達が「長い抑圧から解放されたインドは自由ですばらしい近代国家に生まれ変わりますよ」と言っていました。私はそれに非常に共鳴を感じると同時に日本も大変だったけれども、これから彼らと一緒に新しいアジアのために一緒にやろうと胸が高鳴りました。

国際会議では出席していた韓国、フィリピンその他いろんな国の青年達から、会議の中でも、個人的にも、植民地時代や戦争中日本がどんなにひどい事をしたかという事を沢山実例をあげて聞かされました。私達はまるで法廷に出された被告人のような感じさえしました。しかし、素直な話し合いが終わった後、私達がどんなに親しくなったことか。そして共に1945年以後アジアでは何か新しい事が始まりかけているということを非常に強く感じました。それと同時に戦争でのいろんな出来事がどんなに深く人々の心の中に残っているかということを嫌というほど感じさせられました。私自身は理工系学生のため軍隊にはいかず戦争に積極的に協力したつもりはなかったのですが、やはり日本という国の存在がアジアの人達にどんなに大きな影響を与えたかということを自分の責任として感じました。

こんなことがありました。帰りにセイロンからイギリスの大きな船に乗ってシンガポールに行った時、船の夕食はみんな正装をして出るのですが、和服を着た日本婦人をみて気分が悪いと食事をボイコットする人さえありました。シンガポールに入港した時、私達が買った新聞には日本の戦犯の囚人が監獄から脱出し、今憲兵隊が捜索中であると報じられていました。シンガポールのＹＭＣＡを訪問した時、「君達知っているか？　ここは日本の憲兵隊の本部があったのだ。どんなひどい事があったのか君達には想像出来ないだろう」と言われました。香港に入ろうとする時には、日本人の生命は保障できないから入国の許可がおろせないと言われましたが、やっと自分達の責任で入国を許されました。小さい路

地に入らぬよう、広い道の真ん中を歩くようにというアドバイスで香港の町を歩きました。

私にとっては大変厳しい忘れがたいアジア初体験でした。私がこの事を申し上げているのは、このような体験をしたのは僅かな日本人だけで、たまたま私がその一人であったという事で、それは誰であっても同じ体験をされただろうと思うからです。しかし不思議な事にそういう私がアジアのキリスト教学生団体の為の仕事をするという事になるのがそれから10年足らず後の事でした。私はその時の強烈な経験からしても、日本人として戦後のアジアで働くという事はいかに厳しいかという事を身をもって感じていましたから、はたして自分に出来るかなと思いました。けれども、これは一つの使命だという事で1957年（昭和32年）本部がスイスにあります、世界キリスト教学生連盟という団体のスタッフとして赴任致しました。そして私はその後13年間にわたって、はじめの４年間はスイスに駐在し、その後は日本に帰国して、日本を基地にパキスタンからインド、オーストラリア、ニュージーランドそして韓国等各地を回り各国の大学を訪問し、セミナーや研修会、国際会議を組織するなどずいぶんいろんな経験を致しました。

当時日本人は外国からの招待と外貨の裏付けがないと外国には出られない、従ってどこに行っても日本人の殆どいない時代でした。バンコックの町にマツダの三輪車が走り出したのが、1960年位でしょうか。日本のものがこんな所まで来ているのだなと一人心を熱くした事もありました。今から思えば夢のような時代でした。しかし今日日本とアジアとの関係を考えるに当って、そうした過去の事実関係の上に立って見ていく必要があると思います。

その後も私は青少年活動を自分の仕事としながら、アジアの青少年達と一緒になって新しいアジアを築いていく事に協力していきたい、アジアの近代化はどうしたら成功するのだろうか、或いはアジアの国々の相互交流はどのようにしたら可能なのかと、どの国に行っても話し合って来ました。その後日本ＹＭＣＡに戻った私は日本キリスト教海外医療協力会という、岩村昇先生を始め大勢のお医者さんや看護婦さん達をバングラディシュとか、タイ、インドネシアに送っている団体の事務局の責任者として、その人達を現地に訪問をし、どういう形で医療協力をしたらいいのかを実際に見ながら考えてまいりましたが、これも1948年以来親しくなったアジア各国の友人達の協力があったからこそ、少しでも貢献出来たと思っています。

２）日本と国連

さて日本では国連中心主義という事が言われてきております。しかし私達日本人が敗戦の混乱の為に当時の世界、特にアジアではどういう状況であったのか、特に1945年にどういう状況の中で国連が出来たのか、どういう願いがあって国連が設立されたのかという事を殆ど知らずに、ただ国力が強くなってきたから国連中心にやろうと言うのは間違いでは

ないかと私は思うのです。半世紀たった今、国連の出来た意義や当時考えられた新しい世界秩序がどういうものであったか、そしてその後それがどう展開してきたのかという事も、もう一度考えてみる必要があると思うのです。

1948年、世界人権宣言が国連総会で採択されました。その中に国連というものが世界に何をはたすべきかという事がその精神としてはっきりと出ております。宣言の冒頭には「全ての人は生れながら自由であり、その権利において平等である」という事を人類の歴史の中で初めてうたったのであります。今までにもフランス人はとか、アメリカ人はとかいうものはありましたが、世界の全ての人というのはこれが最初です。その事によって全ての民族は民族自決の原則にたって自らが主権国家を作り、そしてそれを基盤にして、国連というものが作られ、国連が国と国との間の協力関係をおし進めることによって二度と世界に戦争が起きないように、又戦争の原因になるところの偏見、或いは貧富の格差を無くしていく為にお互いが協力をすることをサポートする。それが国連の持っている役割だという事です。

私達は国連というと何か抽象的でとてもきれいなもののように思うのですが、国連という名前、United Nations の中にはもともと日本とドイツとイタリアは入っていなかったのです。つまり日本とドイツとイタリアと戦った国の連合国を United Nations と呼んでいたのです。ですからあの湾岸戦争の時、フセイン大統領が世の中にこんな悪い人がいるのかと思う程、これでもかこれでもかとアメリカのニュースメディアを通して報道されましたけれども、恐らく太平洋戦争中の連合国側から見た日本のイメージも、朝鮮半島を支配し、中国に侵入して、そして太平洋各地で戦争を始めた憎い国であった事と思います。

そういう状況も併せて考えてみますと、1945年以降の日本の再建と国際復帰は私達の想像をこえた本当に大変な仕事であったのだと思います。そういう事をあまり考えないで、専ら国内の平和と復興という形でやって来たところに、今日の日本の国際地位の基盤のもろさというものを強く感じます。

1960年、今から35年前に初めて韓国に行った時のことです。大勢の韓国の友人達から「お前は日本人だろう、日本がどういう事をしたかという事を分かって来たのか、どういう反省をしてここへ来たのだ」と厳しい糾弾を受けました。私はその時「あなた方の言う事は分かる。しかし私は韓国に来て、皆さん方とじっくり話をして、初めて日本があなた方に対してどういう事をしたかという事が実感として分かってきた。だから分かって十分反省してから来いと言われるよりも、お互いに分かりあえるために率直に話し合おう。そのためにぜひ韓国に来て自分たちの話を聞いてくれといってほしい。」と話しました。皆は黙って聞いてくれました。そして彼らは私の親友になっていきました。私はその時、出来れば日本と韓国の高等学校の先生達が一緒になって歴史の教科書の編纂という事が出来ないだろうかと言った事もありました。

3日目講義

30数年前、私はアジアの事について書いたり、提言をしましたけれども、残念な事に当時の日本の社会の中では殆ど関心をひく事は出来ませんでした。安保、安保と日本は日米間の安保条約で国論が分かれていた頃の事です。その頃、私はまだスイスに駐在しておりましたので、組織の代表として、チェコで開かれた国際学連という日本の全学連合等が入っていた左翼系学生の組織との会議に出席致しました。そしてその会議で、中国とソ連とが西側との関係をめぐって意見が対立し、関係が悪化したという衝撃的なことを聞いたのです。日本ではその中ソ条約に対抗する為に日米安保条約を結ぼうとしている時、私は日本に帰ってその中国とソ連との間にイデオロギー的な対決がされたということを話しても、残念ながら全然問題にしてもらえませんでした。私はその頃日本には世界の情報が全く伝わっていないということを強く感じたわけです。

さて1945年に国連憲章に調印したアジアの国は、中国、近く独立を約束されていたインドとフィリピンだけだったのです。新しく出発したアジアの国々は非常に長い間の植民地から立ち上がるのには大変な困難がありましたが、先進国をモデルにして、新しい国造りをしようという、いぶきや熱意を強く感じました。その時、先進国として考えられた国はイギリス等を中心とする西欧型の高度の福祉国家であり、もう一つはソ連を中心とする社会主義国家でした。この二つは残念な事にその直後に全面的な対決をすることになって来たのですが、しかし、この二つには幾つかの共通点がありました。それは第一に、大規模な工業化をおし進めることによって、経済開発を促進し、そしてそこから得られる富を国民の間にできるだけ公平に分配する、そういう意味で、高度の福祉国家を目指すという、同じような方向にむかっていたという事です。唯経済に関していえば、西側は自由経済であり、東は国家の全てを統制するところの社会主義経済でありました。従って第二に国家というものが国民に対して非常に大きな責任を持つのだ、その為には政府が強くなければいけないという共通した考え方を持っていました。そういう状況の中でインドが独立をし、フィリピンが独立をするなど、アジアは大きく変動しました。

このように戦後の世界秩序は簡単にいえば夫々の民族が自分達の国を持ち、そしてその国の政府が自分達の国民の生活向上に対して、責任を持つ。そのことが実現するためにお互いに協力しようということだと言えます。そういう意味で、国連が役割を持つようになってきました。しかし、開発途上国といわれる新しく独立した国にとって、最も不幸であった事は、社会主義を目指す陣営とアメリカを中心とする、自由経済体制の陣営との東西冷戦体制でした。ソ連とアメリカとは自ら戦うことは一度もなかったのですが、どれだけ多くの国々が、その身代わりに戦争に引き込まれていったかはご存じの通りです。アジアでも朝鮮戦争、ベトナム戦争など国と国との対立だけではなく、夫々の国の中での色々の対立を生んでしまいました。私自身、長い間アジアで仕事をしていても、なかなか中国にはいけませんでした。

アジアの地図を見ると、中国大陸というのはアジアの真ん中であるにもかかわらず、そこを避けるようにいつも動いているわけです。私達アジア会議にも中国代表は不在でした。それがいかに不自然であるかという事を実感として強く感じていました。それは鉄のカーテンとか、或いは竹のカーテンとかいろんな風に言われて分断されるだけではなく、新しく独立した国がその国の経済や社会の開発の為に全力をあげなければならない時に、軍事的な対立や、イデオロギー的な対立等がそこに持ち込まれて、解放されたばかりのアジア諸国の健全な開発にとってどれだけ大きなマイナスとなったか、そしてそういう事に日本もなにがしか関係して来たということも、忘れてはならないと思います。それだけではなく、アジアの人々の心の中に強い不信感をお互いに植え付けてきたのです。

そういう意味では、ベルリンの壁が取り除かれ、ソ連が崩壊して、冷戦構造が根本から変わることによって、アジアはある意味でのイデオロギーの呪縛から解放され、私がかつて1948年に体験した新しいアジアの連帯を作り出そうとする契機、また1955年にネール、周恩来、スカルノらのアジアの指導者達がバンドンで開いた非同盟国会議の時代の思いに回帰する可能性が開かれたとも言えるでしょうか。アジア諸国は、西欧やソ連イデオロギーをとおしてお互いを見るのではなく、自分達の考えや経験に即してお互いを理解し、協力して行く道を求めて行く事が期待されています。お互いに学び合う多くのものを持っています。そういう風に考えてきますと、例えば最近韓国の大統領が中国を訪問した事、これは10年前には想像できなかったことです。韓国と中国の間にやっと本来あるべき隣人としての交流がはじまってきている。幸いにして現在殆どのアジア諸国と交流のある日本は、経済協力もとおしてアジア諸国間の交流促進に寄与すべきではないでしょうか。日本の国連強化に対する貢献の一つは、過去の不幸な関係を清算して、一番身近なところにある国々の人々と手を携えて当面する世界の問題をともに考えながら、新しい秩序をつくっていくことではないかと思います。

3）冷戦体制の終りとビジョンの喪失

反面私達は、あの強大だったソ連という組織がどうして崩壊するようになったのかについてもっと真剣に考えてみる必要があるのではないでしょうか。事実戦後の世界の中でソ連に対する関心は大変なものでした。将来の社会のモデルとして、社会主義の実験場として期待され、多くの青年達や学者、労働組合員を引き付けてきました。搾取や階級のない社会は恒久平和につながると、教育、医療、住宅など福祉政策の充実とともに、特に第三世界の人々に大きな夢を与えました。そのうえ1960年代には当時のフルチョフ首相は、1980年までにソ連はＧＮＰでアメリカに追い付くと豪語していたし、宇宙科学技術ではアメリカを凌ぐ勢いを見せたこともありました。どうしてあのソ連が内部から崩壊したのでしょう。あの広大で資源も豊かな国が、外国の経済協力を必要とするようになるなど想像もできませんでした。

しかし、考えてみれば、もう一つの超大国であるアメリカの経済も段々難しくなってきています。しかも、数年前のロス暴動に見られるような多くの社会問題が表面化しています。私が初めて留学した1950年頃のアメリカの社会は自信にみち溢れた素晴らしい国でした。そのアメリカが当時と比べものにならないほどの大きな経済力を持ちながら、何故今日赤字財政に苦しみ、多くの失業者、ホームレスをかかえる不安の多い社会になってきたのか。これも大変難しい問題です。

二つの超大国のヘゲモニーで世界が動く冷戦体制が崩れたという事は、それは新しい時代がくるという意味で大変に喜ばしいことですが、これからの世界がどうなるかについての不安も少なくありません。というのはよく考えてみれば、アメリカとソ連が世界のリーダーシップを握ってきたという事は、両国がただ、軍事力がずば抜けて強かったとか、経済力、技術が圧倒的に優れていたというだけではなく、それぞれに、未来に向かって壮大な社会的ビジョンを持っていたからではないかと思います。それはイデオロギーとも言えるでしょう。多くの人々を世界中から新世界に駆り立てたアメリカのビジョン、幾多の青年達を革命にコミットさせた社会主義、そこには大勢の人々の心に訴えるなにか大事なものがあったと思います。米ソ二超大国のリーダーシップの終焉はこれらビジョンの終りとなるのでしょうか。巨大な技術と飽くなき物質文明の追及だけが残るとなれば、世界はどうなるのでしょうか。私達は新しいビジョン、幻想ではない、将来への夢をどこに求めればよいのでしょうか。一つの地球から一つの世界になろうとしているこのかけがえのない地球の上で、人類共通のどんな夢を私たちは持つことができるでしょうか。

さて、今日のアジアに目を転じて見ますと、アジア、特に東アジア、東南アジアが世界的に注目されています。それは、西側先進諸国や旧東欧圏諸国が経済的に極めて困難な構造調整に苦しんでいる時に、一人経済の高度成長を続けているからです。かつての貧しく停滞する地域というイメージを一新して、高度成長期の日本にも見られなかったような、

急激な変化が社会の全面を覆い、人々の生活様式のみではなく、考え方にまで及んでいます。21世紀はアジア・太平洋の時代だという言い方まで聞かれるようになってきました。

これまで、そのアジアの中で唯一つの先進的経済、技術大国と自他共に認めて来た日本の役割は、そして将来はどうなるのでしょうか。皆さんはどの様にお考えですか。そのためにも、これらの地域で今何が起こっているのかについて私達は、まず十分に理解しなければならないと思います。なぜならそれは日本自体の今までの歩みと大きな関係があるからです。そしてその関係は益々深いものになって行くことは疑いありません。

少し具体的な例についてお話ししてみたいと思います。私は毎年学生と一緒に、タイに実習にまいりますが、タイという国の変化の早さには本当に驚かされます。しかしそれは同時に沢山の矛盾を含んでいるということです。バンコックには日本にはないような豪華なマンションが次々に建っているかと思えば、すぐその隣にスラムがあったりする。タイの豊かな農村地帯では急激に変わって来る生活レベルに対応することが出来なくなって来ている人々が少なくありません。今までは恐らく生れ育った村から10キロ以上遠くへは行ったことのなかったような山岳地帯の質素な農民の人達さえ、テレビを通して、今世界で何が起こっているかということをキャッチ出来るようになってきた。しかし皆んなが都会的な豊かな生活をするにはどうすればよいのか、お米をもっと多く作ればいいのかというと、米を作り過ぎると値段が下がります。高く売れる野菜を作ればよいのか、そんな事ではとても近代的な生活をするのに必要な収入を得ることは出来ません。10年前まで電気もなかった所に今では電話も通じるようになった所もあります。そういう時代なのです。日本はＯＤＡや企業進出によって近代化に貢献しているのだという事も言えるし、様々な日本の製品が入って来ることによって、人々の生活が大変なことになっているということも言えます。皆さんはこの事をどういう風に判断されるのでしょうか。

１年間一生懸命たんぼで働いて年収が日本円で10万くらいの農民に対して、その土地を売れば300万円で売れるという事になればやはり土地を売ってしまいます。そうでなければ

別の方法で収入をはからなければなりませんが、家族の誰かがバンコックに出稼ぎに行って、労務者として働いても１カ月5000円とか、10,000円位のものです。とても仕送りの出来る金額ではありません。この急激な変化、しかも物質文明の便利さを求めて誰も彼もが走り出すということになると、農村社会は大変な事になります。バンコックのスラムはますます大きくなり、こういう状況をつくり出す世界の経済システムの矛盾というものをつくづく考えさせられます。

アジアが世界的な状況の中で今まで開発が抑制されていたのが、今いっせいに経済開発がなされ、全体が世界のニーズによって動き始めて来ると、どういう事が起こって来るのかということを私達は考えていかなければならないと思います。最近アメリカのニューズウィーク誌などにしきりに中国の事が取り上げられております。経済という面だけを考えていきますと、つい最近まで日本一国のＧＮＰはアジア諸国のＧＮＰ全部を合わせたものよりも大きかった。しかし、これからの中国はどうなるでしょう。あるアメリカと中国の学者の共同研究によりますと、西暦2010年位までに、中国圏経済の規模は日本のＧＮＰを超してしまいます。それだけではなくて、2020年のアメリカのＧＮＰに匹敵する位になると発表した学者もおります。これは中国の発展の為には素晴らしい事だとは言いながら、一方アジアの中に日本を超えるＧＮＰを持つ大国が現れ、そしてその周りにある国々を含めるとアジアの国の持つ世界経済の中のシェアーはとても大きなものになってまいります。

現在ヨーロッパでは失業率が高く、低経済成長に大変苦労しております。アメリカの人達も西欧中心的な或いはアメリカ中心的な経済体制の中に大きな変動が起こり始めるという事をもう感知しております。今のうちになんとか強力にしておかなければという気持ちを強く持っています。そういう事を考えてみますと、アジアというのは非常にダイナミックな未来を持っていると思います。しかし、それは同時に沢山の問題を抱えているとも言えます。

再びタイ国について言えば、ベンツとかボルボとかの高級車を２台も３台も持っている小数の上流の人達がいる反面、依然として月１万円もないような収入を強いられている大勢の人達がいます。そういう急激な開発の結果として、格差が拡がり利益を得るものと失うものの両面があるという事です。

またタイと言えば、日本に労働者として、或いは不法労働者という名前で沢山の人が来ています。かつて湾岸戦争前には10万も20万もの人達が農村から中東に行って出稼ぎに行っていました。それはタイの人々の生活水準が上昇するに従って、それに見合うような生活をする為には出稼ぎに行く以外にそれだけの収入を得ることが出来ない人々が少なくないということなのです。ところが最近になってタイ自身がどんどん繁栄して来ると、その周りにある、ラオス、カンボジア、或いはベトナムというタイよりもっと貧しい国の人達が働きの場を求めてタイにやって来ます。タイの経済繁栄は周りにも大変影響があるということです。アジア地区の中に大規模な労働移動が始まっているのです。

私の記憶の中にある昔のバンコックは東洋のベニスと言われ、運河がたくさんある、のどかな美しい町でした。その運河のほとんどは埋められてしまいましたし、今残っている運河の水は真っ黒で悪臭をはなっています。しかし依然として大勢の人達がその運河沿いに生活しています。その水はついこの間まで大勢の人達が洗面をしたり、水浴びをしたり、お米をといだりしていた大事な生活のための水だったのです。それが今埋められてしまった。そういう風にバンコックの周辺には沢山の企業が進出をして、近代工業都市になったという事の代償は人々の生活に大きな影響を与えました。

どこの国も何かを生産し、そして生産を軌道に乗せていきたいという事には熱意があり、そしてそれにお金をかけるのですが、そうして作り出したものやその過程が国民の生活にどういう影響を及ぼしているかという環境問題や、或いは富の分配の格差の問題、人権の問題にまでは手がまわらないし、お金がない。即ちお金をかけてもそこから何かが生まれないものについてはお金をかける余裕がない、或いはそういう事を真剣にやろうという研究者や技術者が足りないという問題があります。バンコックやその他の都市でも日本ではかつて見られなかった程の大きな公害問題も起き始めております。

今、世界には環境問題、人権問題、貧困の問題、平和の問題、この四つに大別出来る大問題がありますが、そのどれもそれぞれの国の単位では解決出来なくなって来ています。

政府が工業化政策を一生懸命にやった為に公害が発生し、多くの住民が犠牲になっているというのは、国民の生活を守って、それを豊かにしていくという政府本来の役割から言えばむしろ反対ではないか、と問われるようなケースが沢山起こっています。アジア各国の発展は大変素晴らしいことではありますが、それがあまりにも急激である為に、しばしば夫々の国の中に、或いは国と国との関係の中に新しく解決しなければならない問題として出てくるものが少なくありません。

私が6年間学生と共に泊めてもらっている村では、毎年毎年急激な変化には驚くばかりです。田畑の他に何もなかったその農村には今はデラックスな観光ホテルが建って、村人は次々に農業をやめてしまった。それはある面から見れば貧しい農村が豊かになっていくチャンスが生まれて来た、それを援助している事は大変役にたっているという事も出来るかもしれません。しかし、そこにいた人達はどうなかったのか、疑問に思うことが多くあります。私は村長さんに「ここの人達の今一番困っている事はなんですか」と聞いたとき「仕事がないことです」土地をみんな売ってしまったので、お金はあるけれども仕事がないのです。農民だった人が土地を売ってしまったのですからすることがないのです。そういう事が発展の中で問題になって来ているのです。

4）共生と日本の貢献

我々がなんとかして新しい解決の方法を見いだしていかなければならないと思う問題が次々に発生してきます。その為に日本はどういう貢献が出来るのか、考えていきたいと思います。今まで日本は自国の復興と発展の経験に基づいて、先ず経済の基盤を整備することに協力する。例えば道路の建設とか、ダムの建設とか、港湾を整備するとか、そういう経済協力の面、或いは工場が進出して技術のノウハウを提供していくといった形で協力をし、その国の経済発展に寄与してきたということは事実です。私達アジア人の間にも環境の違いや経験の違いはありますが、これから21世紀の開発と同時に私達が本当に望ましい環境を守り築いていく事は、お互いの間の大きな協力になるのではないかと思います。

私が学生と一緒に必ず行く所の一つはバンコックのごみの処理場です。彼らはあまりの広さとそういう所で生活をしている人達やそこで働いている小さな子供達の姿を見て、みんな絶句してしまいます。しかしそこに行くとバンコック市民の生活の変化が手にとるように見えてきます。7、8年前まではプラスチックというようなものは殆どありませんでした。今は大変な量です。また日本と同じように家電製品が多く使われるようになって、それが捨てられる。日本では電池の分別廃棄を行っていますが、そういう知識が普及しないうちに生活だけがどんどん変わって来た。すると必然的に前と同じように捨てるということになって、バンコックのゴミの処理場ではごみの中からしみ出て来たいろんな化学物質が混じりあい、洪水期には運河の中に流入したり、地下水の中に入り、バンコックの市

民の健康に大きな影響を与えている。その重要さをバンコックの市役所は感じているけれども、そこに回すお金がない。或いはそういうことの為に研究しようという技術者にはなかなかなり手がない。私はそういう所にこそ、例えば日本の地方自治体などで成功している人達がノウハウを提供し環境を守っていく事に協力することは、タイやバンコックの人達の健康の為であると同時に世界の環境を一緒に守っていこうという努力は地味ではありますが本当は一番大切なことだと思います。今のままで開発が過熱化しつづけると、アジアの環境は早晩破局的になりかねません。

次は福祉対策だと思います。私は専門家ではありませんが、日本では1945年戦争に敗けて灰墟の中から新しい国を作ろうとした時に、当時のＧＨＱの勧めもあって、まだ貧しい経済の中にも年金制度や、健康保険、失業保険などの対策を考えてきました。今日日本は資本主義の国家で自由競争の社会であるにもかかわらず、或る意味で全ての人達の一番基本的な生活が守られています。そういう意味では、社会保障が比較的うまくいっている国といえましょう。韓国、香港、など経済発展に一生懸命になって来ている国々をはじめ、タイのようにそれを追っている国々には恐らく社会福祉対策というのはこれからの大きな課題になって来ると思われます。

私はタイの国の中でどうして現在のような貧富の差が開いてくるのか考えていますが、タイには相続税というものが事実上ないということを知りました。日本でもし相続税がなかったらどうなるでしょう。豊かな人はどんどん豊かになり、貧しい人はいつまでたっても豊かにはならないでしょう。何故タイの社会の中でその事を言う人がないのか、或る意味で不思議なのですが、タイのかなりの人達が今も本当に貧しいのは事実です。だからといってタイから一躍スウェーデンに行ってスウェーデンの福祉対策を勉強するというよりも、むしろ敗戦までそのような制度を殆ど持たなかった日本がどのようにして、国の中にコンセンサスを作っていったかを一緒に考えていくことの方が意味が大きいと私は思います。

保険医療の面を見るなら、日本の国の国民１人当りの医療費は、1992年度でドルの計算でいえば約1.700ドル位、ＧＤＰの約6.5％であります。ところがアジアの中で今経済レベルが一番低いと言われている国の一つ、バングラディシュの例によりますと、１人当り約４ドル位、ＧＤＰの約1.8％にあたります。バングラディシュと日本の１人当たりの国民所得は １：200 位ですから、国と国との格差の最も大きい比率は医療費です。一般的にみて貧しい地区の人たちが病気になりやすいわけです。だから本当は貧しい所にこそ多くの医療費が必要なのに、貧しい所には医療費が少なくて、比較的バランスのとれた栄養をとって、環境の良い所に住んでいる人の方が医療費が多いという事をどう考えたらいいのでしょうか。

かつて植民地があった所が独立して主権国家となった時、国民の福祉、生活向上、安全

はすべて基本的にその国の政府の責任であると言われてきました。しかし、こういう状況では、現在のような仕組みの中で、バングラディシュの人達の健康の問題は専ら当の政府の責任だという事が出来るでしょうか。これは非常に難しい問題だと思います。勿論政府はがんばらなくてはいけないのですが、現在のような世界的な貧富の格差を増幅させる経済の構造の中で、バングラディシュ１億の人々の健康、治療をその政府の責任とだけきめつけることは出来ません。

ではバングラディシュに、神戸や大阪にあるような先端技術の大病院を作る事に協力する事が我々の協力になるのかと言ったら、そうではないと思います。何故ならバングラディシュの大部分の人達のかかる病気はいろんな形の感染症とか伝染病が主なものです。そういう人達の健康を自分達が守ろうとするために出来たのが1978年にＷＨＯ（世界保健機構）とユニセフが始めた基本医療の充実という事です。そこで掲げた目標は「西暦2000年迄に全ての人に健康を」という事です。あの1978年という時代に、それは随分遠い目標であったと私は思います。しかしそれは着実に進んで来ているのです。そして1990年「子供の為の世界のサミット」が開かれ、当時のブッシュ大統領を始め、各国首脳の多くが集まって、西暦2000年までに全世界の子ども達の健康や教育について具体的な目標を達成することを約束しました。何故そういうことを世界の首脳達がはっきりと示したかということは、一つには1978年以降からのＷＨＯ、ユニセフの実績があったからです。実はこれにはロータリーも大いに関係があるのです。世界のロータリーをあげてポリオプラスという運動を起こしました。これは1978年にＷＨＯとユニセフが世界に示したあの大きな目標に、国際的な団体であるロータリーが積極的に応援をしようという強い決意の表明でした。ポリオやその他の病気に対してワクチンを与えるというと簡単な事のように思われますが、ワクチンを与える事が出来ない国が世界には多くあるのです。それは先ずワクチンを買うお金がないということでした。

1972年、全世界の内、第３世界が軍事費として使ったお金は70億ドルでした。それが1982年になると1,000億ドルになっております。貧しい国がそれだけのお金を軍事費に使ったということです。またワクチンというのは温度を一定にして保存しなければならないのですが、電気も引かれていない開発途上国の多くの村では、そればかりではなく、農村に住んでいる多くの人達にワクチン接種の説明をして協力を求めるのも容易なことではありません。子供達にワクチンを飲ませ、ポリオを撲滅するということだけではなく、開発途上国の人達自身が自分達の課題として協力をすることによって、ワクチンが着実に辺鄙な農村の一軒、一軒までちゃんと与えられていく、そういうシステムを作ること自体が大事なのです。しかし一度出来たこのようなシステムやネットワークは農村の自立的な開発に大きな役割を果すようになってきています。ワクチンを提供するという、その運動にロータリーは取り組みました。これは地域組織の弱い政府ではなかなか出来ないことです。ロータ

リーのような地域に根差した民間の団体が世界的規模の募金をし、インドを始めいろんな国のロータリーのお医者さん達がボランティアとして協力をされたことは大事なことだと思います。それによって農村の人達の意識が高められていけば強い力となるでしょう。この働きの為に大きな役割をしたのが各国にある色々な形でのＮＧＯです。開発途上国の人達と一緒になって働く、ボランティアの働きによって、世界の為に働く国連を活性化していくものと思います。

今日開発途上国の多くは先進国に対して莫大な借金を抱えています。それは貧しく、学校にもいけないような多くの子供達までが将来にわたって担っていかなければならないものなのです。そういう状況をなんとか解決して、少なくとも子供達が生まれながらにして背負っているハンディをなくそうではないか、そういう世界に変えていくというのが21世紀に向かっての歩みだと私は思います。1990年に開かれた「子供のための世界サミット」の背景には、冷戦体制が崩れ、世界が新しい秩序を摸索して行く中で、世界の人達が協力して、軍備を縮小し、明日の世界を担う子供達の最低限の福祉を実現しようという、各国のＮＧＯや市民達の共通のビジョンと熱い思いが、世界の指導者達を行動へと動かしたのです。それがロータリーの、そしていろんな青少年団体に係わっておられる皆さんの大きなビジョンになることを私は期待します。

最後に聖書の中の言葉「まぼろしなき民は滅びる」ビジョンのない民族というのはたとえ物質的に豊かになっても栄えることはないということばを贈り、発題とさせていただきます。

フォーラム

リーダー
R．I．第2680地区パストガバナー
深　川　純　一

テーマ　世界市民としてのリーダーの心構え

只今からフォーラムを始めたいと思います。

フォーラムのやり方は先程申し上げておきました。皆さん方がバズセッションで意見を出されたそれをＡ班から順にＢ班Ｃ班Ｄ班と発表していただきます。

これは決議機関ではございませんので別に結論は出しません。皆さんができるだけいろんな意見を出して頂く。できるだけ変わったいろんな意見を皆さんが地域に持って帰って頂く。

それがこのフォーラムの主旨です。

Ａ班

みなさん、こんばんは。

今から今日のテーマの『世界市民としてのリーダーの心構え』というのをＡ班でまとめたものを発表したいと思います。

まず最初に『世界市民としてのリーダーの心構え』この題ですが、抽象的すぎてバズセッションの場では皆の意見がまとまりにくいため、困難を感じました。皆んないろんな個性の持ち主で、いろんな意見を出し合って協力していくというのは難しいということを実感しました。

それではまず最初に『世界市民としてのリーダーの心構え』ここからまずやっていきたいと思います。

１．『世界市民とは』

１）異質な生き方から学ぶ。

2）共に生きる

今、地球上にはいろいろな国の人がいます。この中で約180家族、この中にもいろんな人の考え方があります。この日本だけでもいろんな人の考え方があります。この中で世界市民としていろいろな人の考え方を、異質な考え方、変わった考え方、個性有る考え方をまず学んでいく。そして次に僕達世界市民としては、共存共栄していかなければならないと思います。世界平和のためには世界市民は一緒になって共存共栄しなければならないということをまずこの「世界市民」の意義付けとしました。

A班

世界市民としての
リーダーの心構え

1. 世界市民とは？
   1) 異質な生き方から学ぶ
   2) 共に生きる
2. リーダー育成の必要性
   1) 集団としての人類の生存
   2) 次世代への継承
3. リーダーのタイプ
   1) 専制型
   2) 民主型
   3) 放任型
   ┐ T.P.Oによる相互の補完
4. リーダーの一般的条件
   1) 決断力
   2) 思考の柔軟性
   3) 幅広いヴィジョンと先見性
   4) 経験による知識
   5) 相手の立場一人道性
5. 21世紀のリーダーの心構え
   Leadership-in-Partnership

2．『リーダー育成の必要性』

1）集団としての人類の生存

なぜリーダーというものが起こるのかという事を考えました。人間や動物、集団で行動する場合には必ずリーダーというものが必要になります。例えば、いくら小さな２人の集団であったとしても、リーダーというものは生まれます。３人の集団でも生まれます。善と非というふうに分かれたとしても、リーダーというものは現れてきます。例えば日本にも内閣総理大臣というリーダーがいますが、国全体、世界全体としてもリーダーというものは絶対に必要なものです。集団としての人類の生存の場合リーダーは必ず必要になります。

2）次世代への継承

リーダーになる人は、次の世代の人にもリーダーの考え方を受け継がせていくように継承していかなければならないと思います。１人の有能なリーダーがいたとしましょう。そ

の人が次の世代の子供達に何も伝えずに死んでしまったりすると、次のリーダーは生まれてきません。リーダーというのは次代をになう子供達に、例えば僕たちがこの講習を終わった後に子供達に教えていく場合にでも、リーダーを育成していかなければならないんです。ロータリーの方がリーダー育成というのをやっていますが、必要性があるから今こうして会を開いて僕たちに教えてくれているんです。

3．『リーダーのタイプ』

1）専制型

2）民主型

3）放任型

この3つがあります。専制型は独り善がり、自己中心的、俺について来い型です。民主型は皆んなで相談し合って物事を考えていこうというものです。次に放任型は自由にやって下さい、そして自己や主張をどんどん伸ばしていって下さいというものです。このよう

に３つにわかれます。そしてそれぞれ長所短所とがあります。専制型のように何でもリーダーの指示があるとメンバーの自己の確立というのが見えてきません。民主型の場合は例えば嵐の時にどうやって切り抜けようかと皆で相談し合ってというと死につながるという場合があります。そういう時は専制型になる事が必要です。放任型は相手が小さな何も出来ない子供の場合はあてはまりません。皆さんのような大学生以上になるといいかと思います。

そこで、リーダーになるためには時と場所と場合（ＴＰＯ）によってこれらのリーダーのタイプを使い分けていく事が必要です。

では、次にいきたいと思います。

４．『リーダーの一般的条件』

これが重要なポイントです。

１）決断力

リーダーにはこれが絶対的に必要です。これによってリーダーは尊敬を集めます。今の日本の総理大臣や政治家にはこれが不足していますね。

２）思考の柔軟性

考え方の柔軟性です。ＴＰＯによって臨機応変に使い分ける必要があります。

３）幅広いビションと先見性

頭が良くないといけませんし、先が見えて、視野が広くなければいけません。

４）経験による知識

集団の中でもリーダーになる人というのは人より経験をもっています。リーダーになる人は集団の中でも年齢の高い人が多いです。人生の上り坂、下り坂の道がある時に経験で得た知識による対応によって、上っていくことが出来ると思います。

５）相手の立場、人道性

リーダーは、メンバーの事を考えなければいけません。自分に対する相手の立場を考えて下さい。そのためにはまず自分自身を理解することが必要です。また人道性というのは、相手の立場になって考えて下さいという事です。私は子供と話す事が多いのですが、大人の視線から子供を見るのではなくて、自分も子供の視線にかえる事が大切だと思います。

最後に一番大切な所です。

５．『21世紀のリーダーの心構え』

これからの21世紀を担っていく私達は、若者のリーダーとしてどういう心構えで世界市民としてのリーダーの心構えというのを持っていかなければならないかというと、リーダーという観点からものを考えるのではなく、同等な、対等な立場に立って相手の事を考えるという事が21世紀のリーダーの心構えなのではないかと思います。

B班

『世界市民としてのリーダーの心構え』ということですが、リーダーとはどういうものかということについてまず発表したいと思います。

「こういうリーダーがいたらいいなあ！」

魅力（人気）の秘訣は、強い、やさしい、知識・技能が豊富、寛大な心（うちとけやすい）、安心（賛同）ができる、気配りができる、圧力で押さえず気持ちで通じあえる、というようなものだと思います。そして一番大事なのは、バカであるという事です。バカを演じることによって仲間の意思疎通が計りやすいという事です。（バカの意味は、間のぬけているというか、関西でいうボケのことです。本当にぬけているわけでなく、バカを演じているという事です）

「世間にはばたけリーダー！」

その時の心構えとは、失敗も次の経験にいかしてより果敢な行動につなげる。そして広い視野を持ち、皆と折り合える柔軟な心が大切です。やはり心が世界的に見ても大切な事だと思います。また様々な問題意識を持つ。いろんな問題をいつも考えておいて、自分の事だけでなく、仲間の事を考えて行動を起こさなければなりません。問題を解決する時には感情的にならずに冷静な判断力を持つ。まとめますと、世界市民として自分を磨き、

益々魅力的な人間になるよう意識するということです。魅力というのはもって生まれたものもあれば、努力して培ったものなど色々ありますが、豊富な経験をいかして魅力的な人間になることを意識すればリーダーとなっていけるのではないかと思います。以上、前ふりです。

次にテーマから２つの単語について考えてみました。

「世界市民」とはなにか、ひとつには世界に住んでいる人間、全人類だという意見も出ましたが、もっと市民という単語にこだわってみました。市民とは理性を持ってひとつの社会にあり互いに関わり合う存在といえます。ということは世界市民とは生命体としての人ではなく、お互いに支え合う理性ある人間のことではないでしょうか。

「リーダー」とはなにか、やはり集団を引っ張る機関車のようなイメージがありますが、開講式で先生がのべられたように一人の人間の在り方ではないでしょうか。自らを自分で律することの出来る人、主体性を持つ人こそリーダーであると考えました。リーダーとは意識の持ち方であり、誰もがリーダーであるといえると思います。

ではそのような世界市民としてのリーダーの心構えとは何でしょう。リーダーは全体を考える事が大切と考えます。そして互いを理解するためには相手を闇雲に否定せず相手をより理解するために相手を思いやる心、相手の立場に立てれる事が必要です。おしつけではなくて相手に自分の事をわかってもらうよう努力することが出来る事がリーダーに必要な心構えだと思います。

「世界市民となるために できること」

・外国人からの日本の質問に答えられない場合があるのでまず自国を知る
自国を知ることにより誇りがもて
その上で他国の文化習慣等を学び尊重する
・他国の人々に対し特別な意識をもたずに自然に接する

—実践の重要性—

リーダーというのはいろいろな形がありますが一般的に思われている人の先頭に立つリーダーではなく各人が問題意識を持って何か行動をおこしていく各人のその行動がリーダーです

—問題の認識—

Q_1: 世界市民とは?
A_1: 関わりある人間の集まり
Q_2: リーダーとは?
A_2: 主体のある人間

どう関わっていくか

・相手を思いやる心
・相手に自分を分かってもらえる努力

〜〜心構え〜〜

・全体のことを考えられるか
・相手のことを批判せずに丸ごと受け入れる
・目線を相手に合わせる
↓
相手の立場を理解する
↓
相手のニーズを見極める

こういうリーダーがいたらいいなあ……

魅力(人気)
・強い
・やさしい
・知識・技能が豊富
・寛大な心(打ち溶けやすい)
・安心(賛同)できる
・気配りができる
・圧力で押さえず気持ちで通じ合える
・バカである

世界にはばたけ!リーダー!!!

心構えとは?!
・失敗も次の経験に生かす
・広い視野を持ち、みんなと折り合える柔軟な心をもつ
・様々な問題意識をもつ
・冷静な判断力をもつ

世界市民として、自分を磨き、増加魅力的な人間になるよう意識する。

つづいて世界市民となるために出来る事です。

●外国人からの日本の質問に答えられない場合があるのでまず自国を知る。

例えば宮沢元首相が親鸞について聞かれた時、何も答えられなくて恥を書いたことを聞いた事があります。また、他国の首相の中で宮沢元首相だけが孤立していた象徴的な写真が新聞に載ったこともあります。日本人の話題にならない事でも外国の方には興味をもたれる場合があるので、まず自国を知ることは大切だと思います。

●自国を知ることにより誇りがもて、その上で他国の文化習慣などを学び、尊重する。

日本のお寺などを知ることにより他国の遺跡などに関連して興味がわいてくると思います。自分の事だけでなく国の事を知ることが国際的に見れば必要になってくると思います。

●他国の人々に対し特別意識をもたずに自然に接する。

先ほどのバカになるという事にもつながっていきますが、言葉が通じない上に態度が堅いと理解されずに終わってしまいます。強引な結論ですが、バカになって他国の人にも特別な意識を持たずに心と心で触れ合って頂きたいと思います。

続きまして実践の重要性に移ります。

リーダーのあり方は様々ですが、私達の考えるリーダーの一つとして行動を実践していくことの大切さを知り、各人がそれぞれ問題意識を持ちアクションを起こしていく力、そのパワーすべてがリーダーであると思います。現状の中で私達は私達の知る限りの事柄を地域の中で、学校の中で伝え広めていくことが出来ます。たくさんの芽を育み小さな力、ワンパワーを共に育て、共に行動していかなければならないでしょう。

認識の重要性について

私達のグループは韓国からの留学生を交えバズセッションを行いました。その時にかれがぼそっと、日本の学生さんはアジアの留学生と欧米からの留学生と接する際にどうも態度が違うと言いました。私達はこの言葉にハッとさせられ、また認識が違うと否定する事も出来ませんでした。このことは日本人の欧米志向とアジアに対する認識の浅さを端的に現しているのではないでしょうか。自分たちが起点となって問題の認識を高めていく気持ちはリーダーの心構えにつながっていくと思います。

C班

簡潔にまとめました。題して「でっかい夢」です。

世界市民といいますのは、世界が一つになり抗争がない世界、これも夢です。私達がリーダーになるのも現状では夢です。夢つまり理想を追いかけていける人がリーダーではないでしょうか。その条件として体に例えて５つ書いてみました。

★でっかい耳

でっかい耳でよく聞こえるというだけでなく、人間いろんな人に会っていろんな意見を聞きます。どういうふうに受け止めてどういうふうに発問していくか。でっかい耳で沢山の事を聞いて、特にリーダーはその聞いた事をまとめる力がないといけないと思いますし、それを相手に返していくことが必要だと思います。

★でっかい目

広い視野とするどい視点を持ち、物ごとを見つめるのに常に問題意識をもってみるというおおきな目を持つと言う事です。ほかの方では気付かないような事でも、ここはおかしいんじゃないかというような、例えば昨日の渡辺先生の蓮のお話のように、100年後の蓮の状態をいち早く察知できる目がリーダーの条件だと思います。

★でっかい口

声も大きくないといけないのではないかと思います。小さくボソボソと話されても頼りなさそうと思われがちです。また自分の意見を率直に言える事。まず自分の意見がはっきりしていないと構成員はついていけないと思います。でっかい口で自分の意見をどんどんと、この状態のように皆で話し合っていけることがリーダーの条件の３つ目です。

★でっかい足

行動力という事です。広い視野を持ち、情報を仕入れても行動に移さなければ何の意味もないと思います。日本人は控え目イコール美学だと思っていますが、積極的に世界にはばたいて行動出来る足を持つことが必要ではないでしょうか。

★でっかい心

愛という事です。愛にはいろいろありますが、人間対人間ですので心がないとコミュニケーション出来ないと思います。その心をリーダーがうまく組み合わせて組織を作っていきます。ボランティア精神も心でもって人間は行動していくものだと思います。

このセミナーで外国人の方とも接する事ができて、少し国際人になったかなと感じています。世界市民になるためにはいろんな国の文化を学ぶ事が必要だと思いますので、出来れば一度海外へ行ってみたいと思います。

D班

「世界市民とは」というテーマについて考えてみました。まず私自身は神戸の須磨に住んでいます。そして住んでいる地域、日本という国、そして大きい意味でいうと世界に住んでいるという事です。結局 A MEMBER OF WORLD、地球人という事です。地球人の一人として考えていかなければならないということは、他人との付き合い方、関係だと思います。

図にあります自分と対象、対象というのは自分以外すべての人の事です。間にあるのは壁であり垣根であり枠です。例えますと国、性別が違う、考え方、宗教が違うという事です。これは、お互いのプラスにもマイナスにもなります。グループの留学生の方に話を聞きますと、分からない事をやさしく教えてくれた時は大変嬉しく思うけれども、逆に日本人が「えっ、それなに」というふうになると心の傷になるという事でした。私達の心の持ち様でプラスにもマイナスにもなると思います。ここで定義づけられるのは、相互の理解を通じて自己の認識を通じて対象となるもの、又、人への思いやりをはせる事が出来るやさしい心が大切ということになります。

皆さんはリーダーというものについてどう考えているでしょうか。皆を引き連れて行くというイメージが有ると思いますが、特定の決まった人がなるものではないと思います。困った人を助けようと思っている意識を持っている人、能力に個人差が有るので出来る範囲の事をする、実際助ける事が出来なくても、助けてあげようと考える人をリーダーというと思います。

また班では違った意見も出ました。社会でいわれている日本人というのは世界市民のリーダーには成り得ません。つまり人の事より、自分の生活を安定させようという気持ちがあります。ですから、条件としては、フレキシビリティー(柔軟性)、ネットワーク、行動力に優れていて、地球的視野を持ち、自分の生活、地位を削ってまでもというリスクを背負う精神力が大切ではないかという結論に達したわけです。

二人の人がいます。この二人は文化、習慣、生活、性別、世代、意識という持って生まれた根っこの部分が違うわけです。これは決して地面から上の人間に備わっているものとして見える物ではないのですが、その人の生活や行動を規定する大きな要素になると思います。ただ、これをお互いが見えない部分を認めない、相手の人格を否定してしまうような事が有れば分かり合えることはないと思います。ですから、世界市民というのは、相手がどういう生活をしてきたのか、相手の背景を理解した上でお互いを理解しよう、心通わせようとする努力をする人が世界市民となるのではないかと思います。

果物の木で例えますと、同じ所に並んでリンゴとミカンの木が生えています。同じ条件でありながらリンゴの木にはリンゴ、ミカンの木にはミカンしかなりません。ですが、これらの木はお互いに「俺のほうがうまい」と主張し合う事はありません。一生懸命実をつけるだけです。そしてミカンにはミカン、リンゴにはリンゴのおいしさがあり、お互いを

リーダー
leader
(代表者)
↕
一人一人
(個人)

- 意識を持つ人
- 何をすべきか
  (事に面して)
  PKO
- 自分のできることをする

リーダー → 集団

リーダー
集団

集団
リーダー

現時点として
日本人は世界市民のリーダーとはなり得ない
↓
心構え
『リーダーとなるにはどうすればよいか』
- プレゼンビリティー・ネットワーク・行動力

条件
- 地球的視野
- リスクを負う精神力

情けは人の為ならず
1. 情けは X
2. 情け → 自分

D班 バズセッション「まとめ」

☆世界市民とは…

"A member of the world"

世界
国
地域
個人
宗教 etc.
文化

地球人

とりはらう!!
壁・垣根・枠

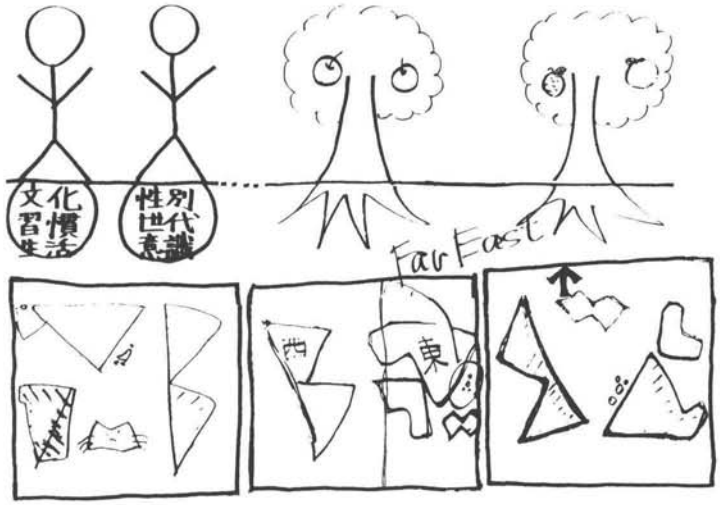
自分 → 対象
自分 ← 対象

…相互理解を通じて
自己を認識するとともに
対象となるもの・人への
思いをはせることができる

押しつぶしてしまうことは有りません。そういった事は人間にも必要だと思います。

余談ですが、図の一番左にある地図は一般に良く見る世界地図です。班の留学生の方に聞くと中国も同じだそうです。東西の対立がよくわからない人もヨーロッパ、欧米で使われている地図を見ると、経度０度を基準にして、西に南北アメリカ、東に中国、ソ連があって、こういう地図を見ているから東西の対立という言葉、そして日本辺りを極東と呼ぶのもこういう地図を見ているから出てくる発想だと思います。右はオーストラリアの世界地図です。こういう地図が存在してもおかしくないなと思います。それぞれ持って生まれた条件が違う中で、それぞれの人がどう生きて行くかが世界市民としての生き方じゃないかなと思います。現在は「情けは人のためならず」という解釈も二通りあるのが現状です。

最近、「アリとキリギリス」の話は、遊ぶだけ遊んでアリから食べ物をもらうキリギリスは、アリに食べ物を分けてもらえないという結末に変わっているそうです。そして「かさこじぞう」といういいお話も教科書から消えているのは寂しい気がします。



アジアの一員としての私たちはどうあるべきか？

R. I. 第2670地区パストガバナー
梶浦暲一

今日は又、本当によい天気にめぐまれ、桜もぽっぽっと開花いたしましたね。この余島で今井先生はじめ皆さんのお陰で一緒に３日間大変楽しく過ごす事ができ、自分にとっても幸せと思っております。

さて、目前に迫った21世紀は、我々人類にとってどの様な世界になるのでしょうか、まず考えてみようと思います。

この問いに対して、マサチューセッツ工科大学のメドウズ教授らが、一つの答えを示しています。最近1992年に『限界を超えて』というレポートを発行されていますね。この報告書には次のような21世紀の予測が述べられています。

『人間が必要不可欠な資源を消費し、汚染物質を産出する速度は、多くの場合すでに物理的な持続可能な速度をこえてしまった。物質およびエネルギー消費を大幅に削減しない限り、一人当たりの食糧生産量、およびエネルギー消費、工業生産量は何十年か後にはもはや制御が出来ないようなかたちで減少するであろう。』

このような恐ろしい警告を発しておられます。このメドウズ教授らによる警鐘は深刻な響きをもっています。

人類は、現在56億だそうですが、世紀末には85億を越えるといわれてますね。この人口爆発、食糧不足、資源浪費、エネルギー危機、そして環境汚染という地球規模の諸問題を解決することができなければ、21世紀中にも存亡の危機に瀕する可能性があるということを示唆しておられます。

しかしこの警告は、すでに20年前にメドウス教授のグループが『成長の限界』という報告を出されておりますが、この『成長の限界』には、『世界人口、工業化、汚染食糧生産、資源の消耗などの点で、現在のような成長が不変のまま続けられれば、今後100年の間に地球上での成長は限界に達するであろう。その結果、最も起こる見込みの強い結末は、人口と工業の突然の制御不可能な減退であろう。』というふうにいわれているんですね。

この『成長の限界』と『限界を超えて』という二つの報告書は、いずれも同じ予測を述べておりますが、ただ一つの違いは、1972年の『成長の限界』は今後100年の間に人類が危

機に瀕するというように述べられているのに対して、1992年の『限界を超えて』は、何十年か後、（書物によるとある人は30年後という人もいます）人類が危機に瀕する可能性が大きいというふうにのべている点ですね。

この様に、人類に対する危機が加速されておることを示しておりますね。この加速の原因は、２つの報告書の間に横たわっていた20年という歳月に、我々人類が地球規模の諸問題に対してあまり有効な対策を講じる事が出来なかったということなんですね。

今、この瞬間にも人口爆発は続いておりますし、先進諸国では飽食の時代です。皆さんも、オープニングパーティーでは大変ご馳走になりましたね。私は家では老人ですし、それほどご馳走を食べてはおりませんが……。まあとにかく飽食の時代を謳歌していますね。一方アフリカやアジアの発展途上国においては、危機的な食糧不足が生じ、大量の栄養失調、あるいは伝染病により、餓死者や病死者が増えていることは皆さんもいろんな報道でご存じだと思います。

われわれの周りには、資源の枯渇やエネルギー危機が、環境汚染と深く結び付きながら、地球環境問題として、今深刻な姿で現れております。科学燃料の使用に伴う大気中の二酸化炭素の増大によって起こってくる温室効果を発生させ、数十年の内には地球の気候を根本的に変えるような可能性がありますね。これが現実になった時に人類が受ける被害は想像を絶しています。

昨年の日本では、農産物が非常な凶作で、慌てて輸入したり米を買いに走ったりというような醜い姿を現しておりましたね。

今、我々人類が直面している人口爆発、食糧不足、資源枯渇、エネルギー危機、そして環境汚染という地球規模の諸問題を解決する事は、国家の利害を越えた世界共通の最優先課題として存在しているのはご存じの通りです。

しかし、これら地球規模の諸問題の解決は、極めて困難な課題です。そしてその困難さの本質は、これらの諸問題が科学技術の発達のみによっては解決できないという点にあります。

1992年６月に、ブラジルのリオデジャネイロで、今世紀最大且つ最重要な国際会議・地球サミットが開かれた事は皆さんご存じですね。持続可能な地球の未来に対して、いかに人類の叡智を結集して築き上げていくかと討議されたことは、皆さんの記憶にまだ新しいと思います。今年も９月に、エジプトのカイロで再び会議が開催されるということですね。

1960年代に人類を月に送り込むことを可能にした科学技術も、これらの解決においては無力さを露呈しています。『バイオテクノロジーによる食糧の増産』、『海底資源の採取技術』、『原子力発電によるエネルギーの無限供給』、『グローバル・エンジニアリングによる地球環境の改善』などの謳い文句がいわれておりますけれども、この様な問題の解決はそう簡単にはいかないと思います。例えば地球温暖化を防止するために、現在わが国においても『二酸化炭素の回収技術』の開発がおこなわれております。この技術によって、先進

国の火力発電所からの二酸化炭素の放出低減を行ったところで、その効果には限界があります。むしろこうした解決策は、新たにエネルギーのコストの大幅な上昇とか、あるいは大量に発生する回収二酸化炭素最終処理を生み出すことになります。環境問題の解決のための技術的努力が逆に新たな環境問題を生み出す可能性すらあります。

地球温暖化を防止するための、より効果的な対策は、例えば発展途上国における森林破壊を防止することであり、先進国における国民生活において省エネルギーを進めていくことというふうに考えられると思います。しかし、こうした対策を実行するためには新しい技術が開発されなければならないし、社会システムの改革、ライフスタイルの変革に正面から取り組むことが求められます。リーダーの皆さんがこういうことに、いかに心を向けて、支えていくかということも大変重要です。

このうち、発展途上国における森林破壊は、人口増大に伴う食糧増産のための耕作地の拡大が一つの原因ですが、この人口増大と食糧不足は、貧困の所に多く発生しておりますし、貧困が人口増大を招いております。このような悪循環を呈しておりますが、この社会システムが形成している悪循環、この問題を解決するためには、南北問題、経済格差を解消するためのグローバルな社会システムの変革が求められています。

又、先進国における省エネルギーや資源リサイクルを促進していくためには、単に環境規制を強化するだけでは不十分です。人々の自発的な環境保護意識を高め、持続可能な社会システムを支える新しいライフスタイルを創造していくことが不可欠の課題となっているのです。

このように、我々人類が直面する地球規模の諸問題を解決するために、いま真に求められているのは、科学技術万能の幻想にもとづいた新しい技術の開発ではなく、むしろグローバル・システムとしての社会システムの改革であり、グローバル・マインドにもとづくライフスタイルの変革なんですね。

この点においても将来のある皆さん、どうか心して頂きたいと思います。

そして実際の話になりますが、日本キリスト教海外医療協力会、先にお話し頂きました塩月先生が理事をしておられますね。そこのネパール派遣ワーカーとして第3回の任をおえられた方で昨年急逝された伊藤邦幸医師の遺著『同行二人……東ネパールにおける地域医療』にありますお話で、皆さんの参考になることをご紹介いたします。

バングラディシュの僻地で布教活動をしておられたイタリア出身のコルバ神父という方がおられるのですが、その方にお会いになったお話し合いの中で、自分の感心された事を言われております。

コルバさんは、25年かかってバングラディシュで農村に入って民生を高めるために努力されたんですが、コルバさんは初めの10年間はキャンプで生活しておられましたが、村の

人々と何か壁があるような感じがして、本当に幸せを感じられなかった。ところが、その後15年前に村に入って住むようになってからは、その垣根がとれて、周りの人々も、彼自身も、よそ者でないという意識ができて、村人の中の一部であると思うようになり、非常に幸せになったとおっしゃっています。

そして、多くのことを村人から学んだということです。人間が生きていくのに必要なものがどんなにわずかなものであるか、つまり人間はどんなに単純に簡素に生きられるかを学んだ。Simple Living ですね。

そこは天候にめぐまれて暖かで、３、４カ月雨季で後は乾季です。そんな所ですから着替えも２組あったらいいというんですね。一つがよごれたら、もう一つをきて２組あったら日常生活できるというんです。少し話は外れますが、私、18年前にアメリカのノースカロライナからキング・ロイ・マコール君というロータリー財団奨学生を１年間あずかりました。生活を共にしたんですが、彼が持ってきたボストンバッグにはほんの少しの身の回り品しかなく、靴はボロボロです。お手伝いさんが洗い替えの下着がボロボロだと、文句をいうので、私がダイエーに連れて行ってパンツとかシャツとか買い与えた位です。一遍は靴を裏玄関においておいたんです。そしたら犬がくわえていってなくなってしまいました。その人は大きな足をしているんですね。30センチぐらい。四国にもなく、大阪のミズノに問い合わせ、広島の支店まで探し、苦労致しました。しかし、それぐらいアメリカの人でも心有る人は非常に質素なんですね。

さて、話は戻りますが、村人が、いかに深く人生を受け入れているかを、コルバ神父は見られたそうです。その日の糧にも欠くという生活は本当に辛い事です。それにも関わらず、人々は自分の運命から逃げだしたりしようとせず、しっかりと自分の運命を受け入れていたそうです。又、村人はイスラム教徒でも、ヒンズー教徒でも、キリスト教徒でも、皆本当に信心深い人々であったそうです。そして度々サイクロンに襲われるが、人々は生き延びる逞しさや力を持っていました。

我々日本人は、ややもすれば宗教心に欠けますね。一昨日も渡辺先生が宗教心をもたなければいけませんといわれましたが……。

2000億年前にビッグバーンによって宇宙ができて、46億年前、地球ができ、36億年前に小さいアメーバみたいなものが出来、それがだんだん形となって人間となりました。それで最初にお話しいたしましたように、人間の体には神が50兆乃至60兆の細胞を与えてくれて、それぞれの器官を与えて、自分は意識しなくても心臓が動き、肺臓が働き、腎臓が働いて……、不思議な神の恵みなんですね。そういう事を知れば、うかうかと日常生活をするということもなくなると思います。そして、神から与えられた暖かい恩恵に浴して、感謝しながら生活をする人間に与えられた人間道徳。先ほど申しましたように地球道徳というのがありますね。あるいは宇宙道徳、これらをしっかり目を開けて見て、自分が如何にあるべきかという事を考えてもらわなければならないと思います。

それから黒板に書いてある、私が書いたんではないのですが……。きれいに書いてもらっております、『５つのＤ』というのがあります。これはタイのバンコックで伊藤さんが出会われた元タイ厚生大臣をしておられたセム医師が、日本政府からの派遣者たちの送別会の席上で『私たちが必要とするもの』についてスピーチされたものです。

私たちが必要とするものは５つのＤで簡単に表されると言うものです。

１）Ｄｅｓｉｒｅ（志、願望）

昨夜、皆さんも世界市民としての様々な志を項目をあげてお話してくださいましたね。

まず志をもつということ。

私は兵庫県の山奥で生まれましたが、その時に禅宗のお坊さんが、この子は30年しか生きられないと言うんですね。それを子供の時から母親に聞かされておりました。それで私の人生も30年かなと思っていました。私は1915年生れで、その頃は人生50年といわれていましたので、そう深くは考えていませんでした。というのは禅宗のお坊さんは妻帯できませんので、自分の跡取りに次男の私をもらうつもりがあったんではないかと思います。今そういう風におもうんですが。だから、そっちにいっておれば、私は今頃頭を剃っておったわけです。

山奥から山崎という町におりてきたんですが、そこでですね、姫路の西に流れている川で私は溺れたんです。幸に若い人が助けて下さいまして、背中をおして水をだしてくださったんです。そして息を吹き返したんです。一度死んでいたんです。30歳どころか３、４歳で死んでいたんです。丁度その頃、牧師の小林先生と奥様が昔の庄屋さんの日本家屋を借りてキリスト教の幼稚園を開設されましたので、入園しました。そこで『愛』ということを徹底的に教えられたわけです。ある時廊下を直角にまがった所で、友達と出会い頭にがーんとぶつかって大きなたんこぶをこしらえました。そしたら小林先生の奥さんがすぐに台所へ走って、お米を口の中でつぶしてそして貼ってくれたんです。何とそれが良く利きました。すーと痛みがとれて、そういう愛情を自ら示してくれました。そして５歳の1920年頃ですね、大阪へ行きました。12月のクリスマスのシーズンになったら小林先生の奥さんが手袋を編んで送ってくれたんです。その後、幸いにも先生ご一家が大阪の私の家の近くに移転して来られ、日曜学校を開かれたので、天王寺の日曜学校でも、先生の指導を受けました。そういうことで人の恩恵を非常に感じました。

又、15歳頃の中学時代、折角命を助けられたんで、医者になって、人のためにお役に立とうと思っていました。３年の時､阪大の先輩が（１学年300人位いますが）それを講堂に集めて、医者に将来なろうとする奴がいるだろう。しかし金儲けをしようと思って医者になろうとするなら、止めとけよ。とごっつい事をいわれたんです。私は医者を志していたので、ぱっとその言葉が心にはいったんです。今でもそれが抜けません。1950年、私は松山で開業したんですが、お金をいくら貰っていいのかさっぱり分からないので、気の毒な人はお金を一切貰わない、そんなことをしていました。そして点数制度の保険が出来たので助かったのです。しかし、医者が点数改正の時、謀反をおこしてストライキをやったんですね。その時に１点10円なのを、20円でとったのです。私は１点10円でやったのですが。

その日その日の糧があって、子供の教育ができればいいのではないか、あつかましくて20円もとれるかと思って、私は一切そういう事は致しませんでした。

ま、そういうことで、志を立てるという事は、『15にして立つ』という論語の言葉もありますように、しっかりした志をたてて頂きたい。そしてそれは持続する志であり、これなくしてはすべての事は始まりませんし、成就も致しません。

2）Dedication（献身）

私たちは何人も自分一人では生きていけず、両親の恵み、先生方、友達すべての人々の恩恵によっていかされておりますね。ですからその恩を感じなければなりません。また自分一個のために生きようとしてはなりません。奉仕の心を自分の心としていただきたい。若者は、早くから他人のために己を捧げる事を学ばなければなりません。すなわち奉仕の精神(Ideal of Service)を身につけなければなりません。

ロータリーでは

「お金というのはものの価値判断のメジャーにしか過ぎない。

自分さえ良かったらいいという考えで生涯を送ったら、自己破壊すなわち畜生道に陥って、開花のない生きがいのない人生を送ることになりますよ。」

と短い言葉ですが言っています。

他人のために手を差し延べ、与える事をしていれば、精神的に自分に活力がわいてくるんですね。私も外科医者として1万数千件は手術したと思うんですが、ところが街角でぱっと手術した人にであって、向こうから元気でやってますといわれたときに、お金をもらわなくてもどれだけ嬉しいか。その思いが体を巡ります。ですからストレスは絶対にありません。神に召された時、人間に生まれてよかった、このような気持ちをもってこの世をさることができますね。

Selfishness is the unenlightened self−destruction.
Service to others is the enlightened self−interest.
He profits most who serves best.

（1921年　エジンバラ国際大会）

3）Devotion（勤行（ごんぎょう））（祈り）

昨日、思索の時間をもたれましたね。渡辺先生や塩月先生のお話をきかれて、自分一人になって思索の時間をもたれたと思いますが、いつも自分を見詰めて、世のため人のためになるような心を養ってもらいたいという祈り、勤行、まあ思索ですね。真の自己をみつけるためには Devotion つまり自己を集中させることによって、自己の何であるか、又己の使命の何であるかを悟得するのであります。

4）Demystification（非神秘化、単純化）

難しい英語ですが、元は不文明なもの、もやもやしたものを、はっきりさせ

るという事で、単純化させることによって、今一つは余計なもの邪魔なもの、非合理なものを取り除くことによってはっきりさせることです。何が本物であるかを見分ける目を養う技術でもあります

5）Ｄｅｖｅｌｏｐｍｅｎｔ（進歩、向上発展）
人間の霊性における改善向上を示しています。自分の心を常に改革し、改新し練るということですね。

この５つのＤが皆さんの将来にお役に立てば有り難いと思います。
ここでＮＨＫで収録した、外国から留学してこられている人々が、日本のスピーチコンテストをやりましたね。これを見て頂きたいと思います。

《第34回外国人による日本語弁論大会より》

モンゴルのペンカムディ・トデンカイハンさん
（将来日本語の教師になりたいと、モンゴル国立大学で日本語の勉強をして来日されました。現在は北海道大学言語文化学部に在席しております。）

日本の事をモンゴル語で、ナラモスといいます。それは日の出る国という意味です。このナラモスとモンゴルは、直線距離にして3000キロ離れています。この距離を、私がナラモスとのいろいろの出会いの旅をしました。

出会い１　初めの出会いは侵略の日本。危険な日本、敵の国日本でした。
1939年と1945年に日本はモンゴルと戦争をしました。この戦いについて皆様はあまりご存じないでしょう。その戦争で日本が負け、何千人かが捕虜として収容され、その中には帰らぬ人となりモンゴルの地、その方々は、ウランバトルの山に葬られ40年たった今でも、モンゴル人の墓守りが掃除しています。その当時映画や教科書にでてくる日本人は、ちょび髭をはやし、丸いメガネをかけコセコセと歩いてる、モンゴル人にサムライと呼ばれた日本の軍人でした。

出会い２　小学校４年生の時です。広島で原爆病で悩んでる少女が、鶴を作りました。作れば作るほど命が延びると信じて作りました。もう原爆のないようにと作りました。こんな歌が流行りました。日本の女の子が、世界の平和のために願いを込めて、鶴を折っているのなら、

私たちも一緒になって鶴を折ろうと、小学生たちが千羽鶴の折り方を習い、鶴を作りました。その時、敵の国日本にも敵があったのだ。私たちにとって加害者だった日本も、被害者だったのだ。ということに驚きました。日本は敵だということしか思っていなかったイメージが崩れ始めました。

出会い３　家族と買い物に行ったとき、露店に売っていた口紅に引き付けられました。箱にキラキラ金色の星が印刷してある、うすいピンクの口紅でした。私には夢色そのものでした。それは肉５キロの値段と同じだったのですが、もうすぐ高校卒業するのだから買ってあげるよねと買ってくれました。おじさんは紅を手渡しながら、これはね韓国製だからとてもいいんだよと言いました。それは実は日本製だったのです。大学の最初の日本語のクラスで、ひらがなとカタカナを一度に教わり家に飛んで帰り、紅の底に印刷してある字を一字一字照らして、く・ち・べ・にと読めた時とっても嬉しかったです。

出会い４　北海道にきた時、何かがモンゴルと似ているように思いました。町を歩いていると、モンゴルの友人がそばにいるようです。日本に来る前は、教科書と新聞でしか知らない国に、親からも友達からも離れて一人で生活する事が心配だったのです。それなのに、なぜモンゴルにかえったように安らぎを覚えるのでしょうか。気候風土が似ているから？　モンゴル人にも日本人にもモンゴル斑があるから？といった単純なものではなさそうです。そこで、なぜこの安らぎが得られるのか、その謎を解明する私の旅が始まりました。日本語は、文法や擬声語、擬態語、動詞の変化そして文字の書き方までほとんど同じです。習慣も着物の合わせ方が左が上になり、日本の和服と同じです。先日江差へいったとき、土地の方々にソーラン節を聞かせて頂きました。それはモンゴルの長唄ととっても似ているのです。音域の広さ、自由に伸ばしたり縮めたりする方法も同じです。

この私の日本との出会いは、１つの文化の伝達の過程を物語っているのではないかと思いました。13世紀のモンゴル人による襲撃は歴史上にも有名ですが、その時、日本を襲って帰れなくなった多くのモンゴル人が、馬の扱いを教えたのではないでしょうか。日本の馬のたずなの持ち方はモンゴルと同じです。又、モンゴルの縦文

字のお墓は日本で発見されたと聞きました。このように文化の伝承者は文献にも歴史にも載らない人です。文化は一人一人が担って次へ伝えるものです。その事態をしっかり足をつけて歩いた人があります。太平洋戦争中、私の日本語の先生の先生は軍人として通訳の仕事に従事しました。たとえ敵であっても人道上、互いに信の伝わり合いが必要であったからです。その当時どこの国でもそうであったようにモンゴルでも敵の国の言葉を話すという事で、秘密警察に目をつけられたりしました。しかし先生たちは言語の研究の火を絶やしたらきっと後悔するとの思いで研究を続けてきました。このような人々こそ真の文化の伝承者であるといえるのではないでしょうか。私もその一人になりたいと思います。今まで私が体験した出会いは敵の国日本、被害者日本、物質的に憧れた日本、そして言語・文化・習慣が、モンゴルに近い日本でした。留学してからは、私の周りにいる日本人との出会いを重ねながら、自分自身の日本を見付け出してきました。これからもいろんな日本を、もっと好きになったり、日本の嫌な所も発見したりしながら、自分自身で見聞しながら文化の伝承者になっていきたいと思っています。

ご参考になったでしょうか。ロータリーでは、早い時期の1960年代から南北問題をなんとか解決しようとしてＷＣＳ（WORLD COMMUNITY SERVICE）という、国境を越えて皆がお互いに助け合うという運動が始まりまして、1968年頃から実際に活動を始めています。で、66－67年度の国際ロータリー会長のリチャード・エバンスという方がこの様に言っています。『もはや世界に遠隔地というものはない。各自の地域社会の事だけを考えてはいけません。世界のことはその町から始まるのです。世界のどこかの病める母親、飢えた子供がいる限り私たちの成すべき事は終わっていません。他に私たちの助けを必要としている人達がいる限り自分のことばかりを考えていてはいけない。皆の住宅の前の道はそのまま世界に通じているのです。』こういうふうに言われております。

我々は、戦後50年を経ずに、世界第二の経済大国となりました。このまま皆さんがどっぷりとぬるま湯につかっておってはいけません。世界市民として、いかにあるべきかという昨日のお話のように、心を磨き研鑽を重ねられ、一人では何もできませんが、一人で始めなければ何もできません。その一人になろうという志をたてて頂いて、生きるとは分かち合う事、貧しくとも心豊かになろうという気持ち、そして年々怠らず、友と交わり、神に従い自分を作っていってください。

ここに『奉仕の子』という安積得也先生（東京南ＲＣ）の詩集『一人のために』よりご紹介させていただきます。この詩のように日常生活を送ってくださり、何もストレスを感

じることなく、普段は日が照れば作業服をきて、元気良く働き、そして友達と仲良くしていけば、私も今79歳なんですが、お陰で気持ちだけは若い人に負けない位の精神は持っております。体のほうは長い事使っていますから、しょうがないところもありますけれど……。

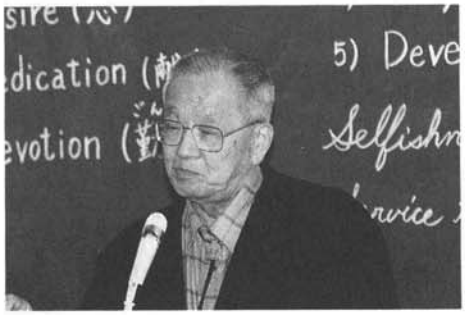
悔いのない人生を送っていただくと言う事が、世界市民としての皆さんに課せられた課題であろうと思います。

長い間ご静聴ありがとうございました。

奉仕の子

友よ大きい地球人になれよ
こせこせした
自分のことばかり考えているケチな人間になることは
大生命のおすがたではない
君の深い心
君の人知れぬはたらきで
社会のどんな狭い一角
世界のどんな小さい一隅にでもよいから
そこに元気よい幸福がみなぎり
そこから生命の光が立ち昇るように
よろこんで
緑の下ではたらこうよ
生きとし生けるものを可愛がり
仕事を可愛がり
祖国を可愛がり
世界を可愛がる
奉仕の子
奉仕の中を溌溂と飛ぶ人
友よ
大きい地球人になれよ

安積得也先生（東京南R.C.）の特集『一人のために』より三編を選びロータリー思想に適するよう一部詠みかえさせて頂きました。お許しください。



ごあいさつ

R. I. 第2680地区パストガバナー
森　　滋郎

森でございます。私は、梶浦先生と大学で同級でございます。彼の元気な姿をみましてうれしくおもいました。

私は精神病院の院長でございます。私の病院で東大卒業生を２人お世話しております。素晴らしい勉強能力のある人で何でも100点、100点、100点で東大を出たんですね。ところが、就職しないんですね。どうして就職しないのか。就職できないんです。どうして就職できないのか。人の中に入れないんです。勉強して試験は100点取るのだけれども、人の中にはいれないんです。とうとう、そういうことをしてるうちにだんだんと孤独になりまして、私の所の病院へ入院した。こういう人が、２人います。いくら頭がよくても人間ではないですね。

皆さん方が、例えばサハラ砂漠の真ん中で、欲しいもの何でも飛行機で落としてあげる。ミンクの毛皮、ダイヤモンド100キロ、なんでも飛行機で落としてくれるが、死ぬまで一人、そんな生活できる？　死ぬまで一人ぽっちよ、出来ないですよね。

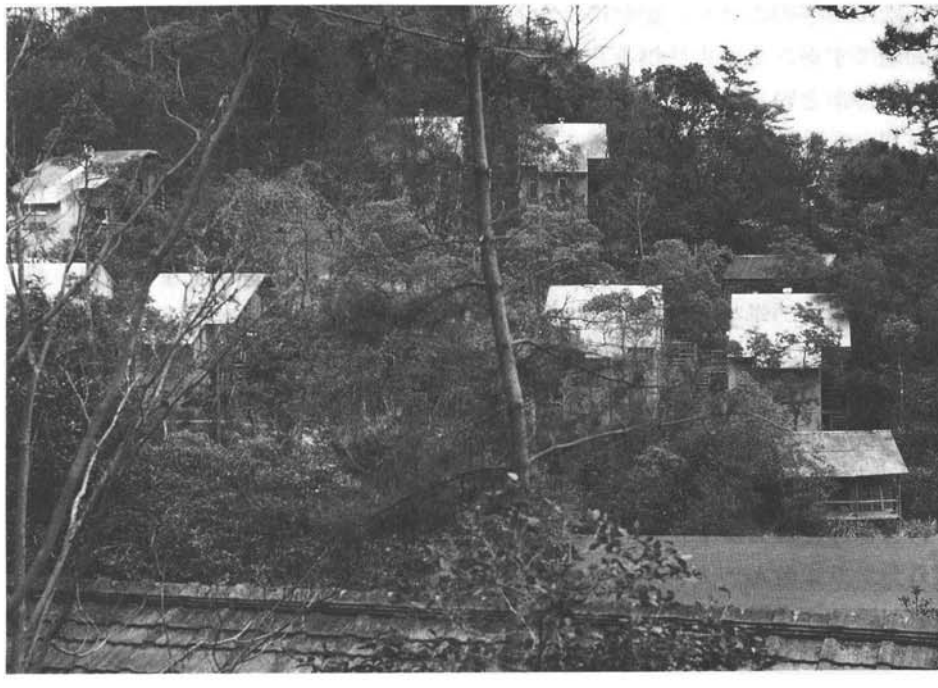
人と言う字は二つが重なりあって人になっていますね。お互いに二人以上にならないと人にならない。倒れ掛かるには、相手が避けるとこけるから、信頼がないと倒れかかれない。そこで二人以上で人という字ができるんですね。昨日リーダーシップという事を、いろんな面からよくあれだけ調べて、討論できましたね。皆さんがたが、咄嗟の事でしたが。

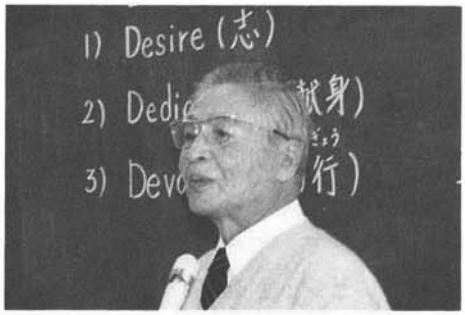
私じーっと聞いておりまして、ちょっと一つ抜けているなあと思いまして、それを今、申し上げましょう。

それは、お茶でいう気働きです。お茶というものはお客さんと主人の間でですね、主人はどうしてお客さんを喜ばそうか、お客さまはどうして主人のいわゆるいろんな心遣いを感謝しようか、これが人間同士はお茶。自然と人間との間もお茶の心で、自然と調和していく。こういうところに気働きと言う言葉があるんですね。ということはね、僕がこういうたら、あんたはどういう風に感じるか、という事を知ること。リーダーシップを取る人は、喋ったら相手がどのように感じるかということがわからないと、独走したリーダーシップなのですね。常に聞く人が、俺がこういうたらこうとってるな、俺がこういうたら不愉快だ、俺がこういうたら嬉しいな、ということが、ぱっぱっぱっと分かるという気働きのある人が、本当のリーダーシップが、取れる人ですね。これは親子でもそうです。お友

達でもそうです。そういう風な気働きというものが、皆さん方が常に喋る度に相手がどう取るか、そういうことといつも考えながら、喋るような事が大事です。これが一つ抜けておったんではないかなあと思って、私拝見しておりました。

しかし僅か３、４日の間、こんなすばらしい御勉強の余島の制度、素晴らしいですね。で、私今井先生に、４、５日、おしいなあ、せめて一月位考えたらどうと言いましたら、そしたら、皆睡眠不足で駄目になってしまうと言われまして、丁度この位がいいんだな、素晴らしい思い出になります。気働きということをプレゼントさせていただきました。





ごあいさつ

R. I. 第2670地区ガバナー
田　村　俊　久

先ほど、梶浦先生から５つのＤについてお話を伺いましたが、私なりに解釈させていただきますと、第１番目の『志』というのは、中国思想ではないかと思います。孔子とか孟子等の儒教思想では、やはり志を立てなさいと言っております。２番目の献身でございますが、日本語としてでは、あまりよく使われません。キリスト教的な精神ではないかと思います。第３番目の勤行（ゴンギョウ）でございますけれども、これは、あくまでも仏教思想で、読んで字のごとく、勤勉に行をしなさいと言う事でございます。４番目の簡素化という問題ですが、１つの目標をたてていくためには、沢山あるものから、どれが中心点になっていくかということをきめるのが、簡素化でございます。最後が向上発展。まず１番目の発想と５番目の目標点と考えられて、その間の２、３、４はその方法だと考えられます。従来から、キリスト教というものは、ユダヤ教に大乗仏教が付加されてきたものだということが、長い間宗教人の間で論議されてきました。だからキリスト教と仏教の倫理思想は大変よくにています。只今、梶浦先生が、モンゴルの話をされましたが、私の友人が東京外国語学校の学生の時に、蒙古語で仏教学の名著『菩提心論』という本を習ったと言う事をきいておりましたので、びっくりいたしました。いよいよライラセミナーも終りに近付きましたが、皆様大きな収穫をえられたでしょうか。若い皆様方には、健康で幅広い人間になって欲しいと思います。

我々にとって、知識、知性、心の広がり、心意気というものが、どんなに大切かということが、皆様にはお分かりだと思います。自分で、自分の心はどういうものかと問いましても案外分かりません。人と人との交わりにおいて初めて自分の心は分かります。

私自身、ここへきて一番嬉しかった事は、今井先生と梶浦先生とが、お話しされておりましたその側でお聞きしておりましたら、私よりはるかに年配であられるお二人の方が、大きなロマンを持っていらっしゃる。大正の末に生まれました私よりはるかに大きなロマンをもっておられ、次元の違ったボランティア精神を持たれて、ご活躍されておられることを知ることが出来まして、本当に驚きました。

講師の二人の先生方、地区役員各位、カウンセラーの方々、そしてご尽力いただきました小豆島ロータリークラブの皆様には、本当にお世話になりました。心からお礼申し上げます。

そして、皆様方の洋々たる前途をお祈りして、終らせていただきます。

ごあいさつ

ディーン
谷　口　修　平

第３日目夜のフォーラムは７時より10時まで、大変な盛り上がりを見ました。フォーラムの盛り上がり如何はライラの成果の一つのバロメーターとも考えられますので大変喜ばしく嬉しいことでした。

そのフォーラムの中で韓国の崔（チエ）さんの言葉として、「日本人が東洋人と、白人とに接する時、何か差があるのではないのか。」という指摘があり気掛りだということがありました。

この問題については、偶々私も十数年前にいろいろ考えたことがありますので御参考までにお話し致します。私の住む松山市の愛媛大学にも留学生が増えて参りまして、この人達に松山に来てよかった、愛媛大学に留学してよかったと実感してもらえる受入れ態勢を作りたいと考え、大学当局と相計って愛媛大学学生国際交流協力事業会というものを作りました。大学教職員と一般市民で構成し、その会費で継続して彼等の側面的支援（日本語講座の開設、下宿敷金の貸与、研修旅行援助等）を市民ぐるみでやろうという趣旨であります。この頃に、留学生受入先進校である九州大学で、早くからアジア系留学生問題に腐心なさった上尾龍介先生の『留学生たちの日本』という本を手にする機会がありました。

この中で福沢諭吉の入欧論（脱亜入欧論ともいう）という短い論文（明治19年頃？）を知りました。諭吉も最初は韓国、中国と相携えてヨーロッパ文明をとり入れ、近代国家に脱皮しようと考えたのでしたが、途中より彼等の蒙昧に愛想を尽かし、日本単独で入欧を果たすよう宣言したものであります。入欧論の部分はよいのですが、脱亜論ともいうべき後段で彼等の蒙昧を侮辱しています。彼が偉大な啓蒙思想家であり、後世に偉大な足跡を遺した方だけに、この侮蔑の考えがその後私達の考え方を支配して行ったのではなかったのか。若し崔君指摘の差があるならば、それはこの論文に胚胎するものではないのか。残念ながら私の感想であります。

しかしもう少し古い日本を顧りみますと、明・清の王朝交替期、明の遺臣朱舜水を招き、かの水戸光圀公が師事された故事、（朱舜水は儒の硯学であり、民の再興のため活躍した忠臣であると同時に現在東京都の庭園後楽園の作庭者としても著名）又、水戸入りするまでに九州柳川の藩主立花氏も、かの地で暫く礼遇されています。

又、徳川幕府は朝鮮通信使を好遇しましたが、幕藩体制の理念的支柱の朱子学を、中国

からではなく朝鮮の硯学李退渓に学んだことに由来するものと私は考えています。歴史を学ぶ中から古い日本人の心を知らなくてはならないと思うのです。

又、中国の林夢さんが、もう少し歴史を学んで、いい事、悪い事、いずれについてもよく学び、それを理解した上で付き合うことが大切とあるという趣旨の発言をされました。これに関連してもう少し話を進めます。偶々皆様にお渡しした“開発教育最前線”という本の中に、ベラウ共和国のこと（８頁～11頁）が載っています。この国の文部大臣をなさったミノル・ウエキ氏と10年前にお会いする機会がありました。それまでに２回テレビでお会いする機会がありましたので不思議にも旧知のようにお話が出来た（正しい日本語を大変上手に話され、天皇陛下に対する敬語の使い方等ＮＨＫの若いアナウンサーは学ばねばならぬ位）のでした。その後又二回、最後は昨年10月にもお会いしました。

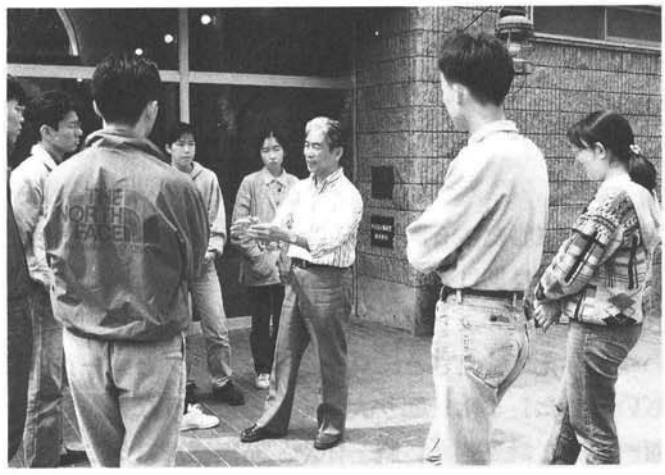
アメリカの信託統治35年間が終って、独立してハタと困ったのはどうして生活するかということでした。そこで思い起こしたのは更に以前の25年間、日本の委任統治時代のことでした。先ず教育をしてくれた。そして生業の術を教えてくれた。勤勉の尊さを教えてくれる教師であった。もう一度日本の指導を受け度いと申されるのでした。それからベラウ共和国の国旗がどういう経緯で制定されたかは、最前線を読んで下さい。

又、７年前にパプアニューギニアに行った時のことを思い出します。東半分は約20年前にオーストラリアから独立しました。因みに西半分は今もインドネシアの植民地でイリアンジャヤと言います。ここでオイスカの研修センターの開所式があり、その祝宴と我々日本人の歓迎会で15歳から30歳位までのいくつものコーラス隊が日本語の歌を十曲に余って大変上手に歌ってくれたのでした。70歳位の老人はたどたどしい日本語、60歳位の人は上手な日本語を話します。この人達とても40数年も使うことのなかった日本語を話すのですから驚きであったのですが、ましてや戦争中とは無縁の若者が何故日本語のコーラス隊を組織して歌い継いでいるのか。それも軍歌ばかりでなく讃美歌やシューベルトの子守唄等も。私は不思議でなりませんでした。

オイスカの研修センターをニューギニアに誘致した推進役の元文部大臣であったトバデクさんの解答は、日本の兵隊さんは共に額に汗して働くリーダーでした。車座になって一緒に御飯を食べてくれた。皮膚の色に関係なく握手してくれた。勤勉の尊さを教えてくれる教師だったのです。だから日本人が好きなのです。新興国の将来は、自国青年の双肩にある。この青年の教育をどの国のどのような機関に任せるか、最後に到達した結論が日本のオイスカであったのです、というものでした。

戦後の歴史教育の中ではこういうことが故意に抹殺されているのです。正しい歴史の勉強の中から自虐趣味を脱却し、よかったことへの自負心と悪かったことへの反省とを生涯学習の中で見詰め直して欲しいと思います。

本当に皆さん、３泊４日を一緒に過ごしていただき有難う御座いました。両地区の青少年委員会・ライラ委員会の皆様有難う御座いました。


THE
NORTH
FACE

A 班

A班カウンセラー　小　池　弘　三

５度めのＲＹＬＡが終りました。５回伸ばした髭をそり、５回感動して帰ります。人は一人で生きてはゆけない、人は助け合い支えあってゆくものだという事をいつも思います。また、教え教えられて成長するのだと思います。受講生の皆さん、本当にありがとう。そして、この機会をいつも与えてくださる、ロータリークラブとロータリアンの皆さん、本当にありがとうございました。また一回り大きくなったような気がします、胴回りが。アー、よう飲んだ。腹一杯や、満足感が。胸一杯や、充実感が。そして個人的にページさん、英語が上手で驚きました。と同時に私にとってカウンセラーの一つのあり方を教えてもらいました。thank you very much。

最後にもう一回、今回出会った全ての方々に「ありがとうございました」。

A班カウンセラー　有　光　洋　子

私はこの度初めてカウンセラーとして参加させていただきました。

大変不安でしたが、受講生たちが、暖かく母親のように、接してくれて初日はホッとしました。

前日にカウンセラーの心得を今井先生からお聞きし、とても感動しました。その時私は、カウンセラーは若い人たちの話を聞いて、共に学ぶことだと思い、カウンセリングするのではなく、自分の勉強をするのだと思うと、とても気が楽になり、あとの４日間は

アッという間に過ぎました。

今年は留学生が参加しておりましたが、彼らは、自国の政治や経済のこと、又、世界の政治、経済のことをしっかりと見つめていますが、日本人の参加者（特に女子）は今の日本の豊かさにあぐらをかいて、安心しきっているのでしょうか、あまり関心を持っているように思われません。もう少し、考えてほしいと思いました。

でも彼らは、会ってすぐ旧知の友のようにすぐにうちとけ、楽しく語りあっている姿は、ほほえましく思いました。毎夜、話の内容はたいした事ありませんが、３時～４時まで語っても語りつくせない無限の物を持っています。その中から、何かを見つけて、それぞれの地域に帰って何かをしてくれるのではないかと期待しています。

私自身、若い人達から素晴らしいエネルギーをいただいて、明日からの生活の糧としたいと思います。

どうも、ありがとうございました。

小　西　秀　和

十五分で感想を書け、という。そんな無茶な、正直こう思う。それだけ考えることがあったし、これからも考えてゆかねばならないことが多く得られた。

三泊四日の、ゆったりとしたスケジュールの中で、何が印象に残ったか。今はまだ全く自分にはわからない。おそらくそれは時間の経過とともに心の中に浮かび上がってくるものであろう。それでもとりあえず、今頭の中に浮かんできたことだけでも綴ることにしよう。

今回のセミナーで自分にとり貴重なものとなったのは、対話であったように思う。年齢も、出身も、そして社会的な立場も異なる人たちと意見をとり交わすことができたのは大変刺激的なことであったし、その必要性を感じる良い機会になった。人それぞれ思想、モノの見方が異なっている、と頭ではわかっていてもつい自分の先入観や思い込みでその人となりを判断してしまう。わかっちゃいるんだけど、話もせずについそうしてしまう。食わず嫌い、といおうか。つい安逸な方向へと自分が流されてしまうことの何と多いことか。相互理解には努力が必要であるのにそれを怠ることの何と多いことか。人を理解するにはとにかく徹底した意見交換が必要である、という当り前のことを再認識することができた。

こうして考えると、このセミナーの意義は、人との交流を基にしたうえで、至極当り前のことを改めて見つけ出す、ということにあるのではないか、と思う。当り前のことを見つけて帰ることができればそれでいいじゃないか。何も難しく考える必要はないのではないか。ごく普通のことが当り前にできる者こそリーダーたるにふさわしいのではないか。このようなことを、今、思った。

この感想を書いたあとでもまた思うことはあるだろう。それをどう生かすかは私に与え

られた課題となる。とにかく、今からも、ずっとこの余島での体験を考えてゆくことにしようと思っている。

最後に。一期一会をありがとう。

松　尾　尚　吾

私がセミナーに参加したのは、なかばむりやりに強要されての参加でしたので、内容もよく知らずにやってきたのですが、高レベルの講義、熱のこもった討論、そして他の受講生との出会いなど感動しきりでした。

特にまったくちがう個性を持った人との出会いから、多くの考え方、またちがう国の文化を吸収できたことがなによりの収穫でした。

上　通　一　師

どんなことをするのか、“アジアの一員としての私達はどうするべきか？”というテーマも知らずに、ＲＹＬＡセミナーの行われる余島にやってきたので、最初はやはり不安だった。しかしそれも時間がたつにつれ、なくなっていった。

ＲＹＬＡセミナーで知り合えた人達はしっかりとした自分の考えを持つ人ばかりで、それを持たない自分に気付かされた。これを機会にもう少し問題意識を持って毎日過ごしてみようという気にさせられた。

とにかく、楽しくもあり、いろいろ気付かされることもあった、充実した４日間を過ごすことができた。

このような機会を下さったローターアクトクラブのみなさん、本当にありがとうございました。

林　　漸

私がライラ・セミナーに参加した理由は、父がロータリーに所属していまして、何気ない気持ちで参加いたしました。そして終った感想が「人との出会いは楽しい」という事でした。

その中でも夜、キャビンタイムで時間を忘れて友と話し合った事で、物事の基本的な事であり「思いやり」とは何かという事を改めて考えさせられたのが一番の思い出であり、うれしかった事でもあります。

「今持っているこの気持ちを忘れる事なく、誰とでも同じ気持ちで接していきたい。」

これが今の私の素直な気持ちであり、この大切な物をいつまでも持っている人になりたいと思っています。

寺林　顕

今回のセミナーのテーマは「アジアの一員として私達はどうあるべきか」というものであった。アジアの一員として日本人はリーダーとなって、アジアをひっぱっていくという意見が多かったように思える。多くの人々がアジアの中で日本がリーダーになるということを前提としてはなしていた。しかしわれわれ日本人がアジアのリーダーとなるにふさわしい人間なのか？　そこから考えていく必要があるのではないか？　日本という国は昔から地形上、島国ということもあり、比較的他の国との交流がなかった。特に江戸時代には鎖国をおこない、他の国の文化をうけいれようとはしなかった。そういうような日本の歴史からみても日本という国はどうであろうか？　現在でも輸入規制の問題あり、国際貢献をはかるためのＯＤＡであっても実際にはなにをやっているのか顔がみえていないのである。

私達がアジアの一員としてどうすればよいかと考えて、日本はリーダーとなるべきだなんていう発言は、日本人の専制的なひとりよがりな発言である。アジアの一員として日本は草の根的運動を数多く展開し、アジアの人々に認めてもらい、はじめてリーダーとしてのリーダーシップをとれるのです

アジアは急スピードで進化しています。しかしアジアの国々が一つの国となった時にスピードの進化が大きな発展となるでしょう。

※余談　アジアの一員として考えさせるのであれば、数多くの留学生をあつめ、そして食事などもタイ米などを使ってみたらどうだろうか？　余島は大変きれいな島で施設もすばらしい所である。しかし汚れたきたない施設、もっと不便な所を使用した方が、アジアの貧しい人々の生活に近づけた方がアジアがわかるのではないか。

縄手伸幸

このライラのセミナーに来て最初に感じたのは、外国の方がかなりたくさん参加していることだった。そして実際に話をしてみると日本語は上手いし、笑いをとれるしびっくりした。正直言ってこのセミナーに来る前は、異国の人と言うだけで一歩ひいていた気がしてたが、この４日間で国境を越えた何かが得られたように思う。キャビンタイムでは自分を飾らないで正直な（そのままの）自分が出せたように思えるし、今までにこんな思いをしたことはあまりないので自分にとってとても内容の濃いセミナーであり、職場に戻ってもこの新鮮な気持ちを忘れず、人の心の痛みを理解できるような人間になりたい。

最後に、ロータリーのみなさん、このような場を作っていただけたことに感謝すると共に、ありがとうと言いたい。

参加者感想文

吉　兼　隆　士

世界市民という概念について、私は多少の疑問をいだきつつ討論にいどんだ。私の世界市民のとらえ方は、世界というひとつの統合された世界がまずあり、その中のひとりひとりが世界市民であるといったものだった。この私の考えで非現実的な点は統合された世界の存在である。文化、習慣、宗教等思想の違う国々の集合である世界の統合など実にナンセンスだと思うからである。

しかし議論が深まる中で市民ひとりひとりが国家、習慣、宗教等の壁をとりはらい他を認めることができれば、意識の上での世界共通の思想が生れるのではないかと考えるようになった。

それが世界市民という概念ならば、ひとりひとりが心がけることによって、自分の住む社会も本当の意味で良くなるのではないかと思う。

木　原　浩　一

私は会社からの指示で、このセミナーに参加することになりましたが、この余島に来た時、これからどんな事が起こるのだろうかと思い、不安でした。しかし、いろいろな人々と出会い話し、講義を受け、少しだけですが、このＲＹＬＡの主旨が理解出来たと思います。

私は会社員であり、他の受講生達とちがい、将来、他の国の為に活動する事ができるかどうかに疑問が残りますが、これから会社に帰り、他の人々にロータリークラブの様な組織が数多くあり、「世界の人々の為にがんばっているんだよ」という事を一人でも多くの人に広めたいと思っています。短い時間の中での感想文で内容の無いものとなってしまいましたが、国又個性のちがう人々と出会い、話し合えた事に感謝しております。これからもこの様な活動を続けてほしいと願っております。

高　橋　哲　也

私は教育委員会という仕事柄、青少年団体と接することが多いので、今回この青少年リーダー育成を目的とするＲＹＬＡセミナーに参加させて頂きました。

余島を訪れた時の印象は、まず、その施設の充実ぶりに驚かされました。食事、講義、レクレーション……とても快適に過ごせました。また、セミナースケジュールにも驚かされました。とてもゆったりとしたタイムテーブルで、しかしながら、自分達で規律を作るといった、経験したことのないものでした。

この４日間を通して学んだことですが、正直言って、午前中３回に亘った講座については、あまり記憶に残っていません。決して寝ていたわけではないのですが……。一番の収穫は、やはり、バズセッションで皆と意見を出し合ったこと、キャビンタイムで、ふざけ

ファミリーキャビン
野外集会場
小集会室
アーチェリー
図書室

第16回 RYLAセミナー
94'3.31-4.3 YOSHIMA

ながらも真剣に語り合ったことでした。それぞれ異なった生活や経験、考え方を持った皆々が発する言葉はとても新鮮で、世代の違いを感じながらも、驚き、感動し、たくさんのことを吸収させて頂きました。

本研修で学んだことを、実際にどうこれから生かしていくのか、自分でもまだはっきりとしたビジョンは描けませんが、地域の青年達のとりまとめ役として、国際色豊かな感覚、ボランティアの精神を植えつけていきたいと思っております。

3泊4日の間お世話になりました。ロータリーの方々、カウンセラーの方々、スタッフの方々、講師の先生方、どうもありがとうございました。

曽我部健次

当初参加を決めた時には、ロータリーの活動内容や目的をほとんど知らない状態であったけれども、3泊4日のセミナーを通じて、実に多くの知識や友人を得ることができ、ロータリーの何たるかの一端が身をもって分かった。

日頃の多忙さを言い訳にして考えようともしなかった、しかし人間として、社会で働く者として最も大切なことを、講義や討論、受講生との語らいの中で教えられた。周りの人々を変えるにはまず自分が変わらねばならないこと。自分のささやかな、しかしながら真心から出た行為がどれ程周囲の人々に次第に大きな輪となって広がり、やがては又自分を更に高めてくれる力となって返ってくるか。そしてリーダーシップをどうとって行くべきなのか等、学んだことはその数が尽きない。余島に到着した時の自分とは違った自分を確かに感じ取ることができる。自らがろうそくの小さな一つの炎となって生きるすばらしさ、それを隣の人に伝えられる喜びで一杯である。

再び参加する機会を持つことはまずないだろうけれども、このセミナーで得た宝物は終生我が身から失われることはないものと確信している。

講師の先生方、セミナー開講の準備に当たられた多くの委員の方々、そして初めて出会った他の受講生の方々に心から感謝したい、と思います。本当にありがとうございました。

張　昌聖

After I came to Japan, it has been almost one year and ten months. Until now, the most difficult thing for a foreigner is how to make a friend with the Japanese people. Most of the Japanese people I have met, especially in Tokushima (maybe I should say only in Tokushima) they close their minds as possible as they can and avoid making any contact with the foreigner. Therefore, owing to this kind of self-closed thought, the culture shock to the foreigner in Japan is much more serious How in other

country. I had really worried about that till I came here. During the three-day seminar, I met lots of different kinds of Japanese people, they have the great open-mind generosity to consider how to make Japan a new standing point in the world. More over, they would like to take the responsibility for helping other country because of the great economic power. As I thanks, that's the real purpose that we came here. I deeply hope that they can spread it over to the ordinary Japanese people and devote themselves to the whole world.

竹　本　麻里子

私は、今回のＲＹＬＡセミナーに、自主的に参加希望して来たわけではなかったですが、終わりをむかえて、この４日間を振りかえってみて、本当に良い体験をさせて頂いたなあと思いました。このセミナーに参加しなければ、一生知り会えなかっただろう人達に出会え、みんなそれぞれに自分の主張というようなものをもっていて、感心し、共鳴し、また、自分のいいかげんさを痛感することになり、良い反省の機会にもなりました。また、三人の講義の先生方の、（特に、私は、梶浦先生のお話、身のこなしを気に入ったのですが。）貴重なお話、そしてそれに対する受講生たちの共鳴、批判、疑問の声も聞けて良かったと思います。他にも、余島の自然そして、食事のおいしさは印象に残りました。今後も、このＲＹＬＡセミナーが、何十年も続いていくことを期待しています。意を新たにした次第であります。

このＲＹＬＡでの出会いを大切にしたい。今後もできる限り連絡をとりあってゆきたいと思っています。そして、私の後輩たちに、「ＲＹＬＡに行ってよかった」ということを伝えたい。

同じ班の皆さん、カウンセラーの御二方、そしてロータリアンの方々、本当にお世話になりました。どうもありがとうございました。また会える日を楽しみにしています。

三　輪　陽　子

今回このＲＹＬＡセミナーに参加し、普段なかなか交流することのできない、幅広い年齢層の人々、またアジアからの留学生のみなさんとすばらしい余島の自然の中で過ごせたことを大変うれしく思っています。ディスカッションをしている中で、自分の無知さを思い知ったり、考えがまとまらずにはがゆい思いをしたり、また他の受講生の意見に感銘や、時には反発を感じながら多くの事を考え、刺激を受けたということは、これからの私の生き方への大きな糧になりました。これから世界市民の一員として広い視野を持ち、なすべきことを常に学びながら、自分を磨き、今井先生の言われた本当の喜びは他の人のために

何かをすることであるという事を心の中においていきたいと思います。心温まる、また刺激的なセミナーを受け、新しい分野にも、もっと挑戦してみたくなりました。

みなさんに感謝しています。

重　森　とも子

このセミナーに参加することができてよかったです。

１つのテーマがあり、その事について、こんなに考えて、みんなで討論という形をとったのは初めての経験でした。みんなで意見をいう場面で、知識の不足という点で、すごく考えさせられる点が多かったです。

普段は、子供と一緒にキャンプリーダーをしているけれども、今回はリーダーとしてではなく、参加者として、周りを見ていくことができてよかったです。

様々な人がきていて、今までの自分の考えの甘さなども指摘されたけれども、そういう人達に会えたのも初めてでした。

最後に１つ思ったのは、やはり時間を大切にしたり、物を大切に扱う、他人に迷惑をかけないなど、最低限のルールが本当に守られていたのかが疑問であり、それが残念でした。

吉　田　恵　理

３泊４日は、あまりにも短すぎたと思います。初めて出会った仲間達の生き方というものをもっと見つめたかったと思うのです。

講演やキャビンタイムなどでは、自分にとってプラスになったであろうことがいくつもありました。普段は地域社会にしか目をひらくことができていない私も、少しだけですが視野を広げることができたのではないかと思えるのです。生涯学習や生きがいづくりをよく耳にする今、私は何をすべきか、どのように青少年育成などへ反映させていくかはまだよくわかりません。しかしどんなふうに反映、貢献ができるかというよりも、今の活動を自発的に続けていき、自分に、そして他の人へ、どんどん「働きかけ」をしていきたいと思います。自分だけが何かを頑張るというのではなく、まわりの人すべてと共に頑張っていきたいと思います。

セミナーに参加して、自分の視野のせまさを思い知らされたのはいうまでもありません。それを再認識できたのはうれしいことであり、またそれを気付かせてくれた人々に出会えたことはそれ以上の喜びでした。私にはこれからの課題がまだ明確ではありませんが、「！」「？」の気持ちを忘れずに、自分なりに精一杯活動していきたいと思います。

西　谷　暁　子

私は香川医科大学ＲＡＣに所属している。今年からクラブの幹部になる新４年生がＲＹＬＡに参加することがクラブの慣例であるが、本当に参加できたことを嬉しく思った。

私たちの大学は単科大学であり、学生数も少ないため、ともすれば“井の中の蛙”になってしまいがちである。しかし、ここに来て実にさまざまな種類の人々と知りあうことができ、また、多種多様な考え方を知ることができたと思う。特に昨日のバズセッションおよびフォーラムは新鮮に感じられた。さらに連日のキャビンタイムのおかげで、班の人たちとより深く知りあうことができたと思う。

私は今日、梶浦先生がおっしゃっていたのと同じく、何か人の役に立つために医師を志している。将来私が向かいあうであろう患者の中にはきっとさまざまな人たちがいることだろう。その人たちの考え方を理解し、共に苦しみ、共に喜べる医師になりたいという決意を新たにした次第である。

このＲＹＬＡでの出会いを大切にしたい。今後もできる限り連絡をとりあってゆきたいと思っている。そして、私の後輩たちに、「ＲＹＬＡに行ってよかった」ということを伝えたい。

同じ班の皆さん、カウンセラーの御二方、そしてロータリアンの方々、本当にお世話になりました。どうもありがとうございました。また会える日を楽しみにしています。

萩　山　真理代

初めてセミナーに参加して、社会人の私には、久しぶりの学校の合宿のようで、忘れていた大切な事を思い出せたような気がします。

３泊４日とは、決して短い期間ではありませんでした。でも今は、なごりおしい気持ちでいっぱいです。年齢も、職業も、育った環境も、考え方も違う人間が、共に寝起きし、うちとけ、話し合い、それがアジアへ、世界へ広がっていかないとは思いません。多少の時間は必要だと思いますが、なし得ない事ではないと思います。

命の連鎖、私もそのひとつの輪です。私は長い鎖の途中のひとつでいたいと願います。

池にきれいなはすの花を咲かせ続けたいと思います。百年目はいつかわかりませんが、少しずつでも池のまわりを掘り広げていきたい、セミナーに参加でき、考える機会を持てたことを感謝します。

B 班

B班カウンセラー　有　光　和　雄

私は初めて今年余島へ来て、カウンセラーを務めさせて頂いた訳ですが、この余島の自然にめぐまれた、海山の景色は想像以上に美しく自然の中に過ごしたキャビンでの生活は、平素私達仕事にいつもうつつをぬかしているものにとっては、正に心が洗われるような心持になって、命の洗たくが出来ました。

またカウンセラーとしての初めての体験の中で、受講生の諸君と三泊四日の中で生活を共にしましたが、彼等は私が平素現代の若者を想像していたよりも大変真面目なものへの見方、考え方、行動の仕方等、非常にスマートで私自身勉強をさせてもらうことが多かったと思います。彼等のひたむきなまでの相手に対する思いやりは、すでに10年くらい前より知り合っていたように早くお互いを理解し、うちとけて友達になれることは、本当に現代の若者の特権でありすばらしいことだと思います。

これからの21世紀における世界理解は一人一人の友達から無限の輪になって行くことが前提とされてるならば、今日のようなセミナーが毎回開催されることは誠にすばらしいことであると思います。

また青少年奉仕の一貫としてここで一クラス下の少年少女キャンプが行われておりますが、これも非常にすがすがしく思いました。

昨日のバズセッションへの４時間という発表への資料づくりの共同作業を通じてのお互いの真剣なとり組みのなかで、つちかわれた友情。

毎朝、夜明けまでの寝ずの彼等の語り合いは、彼等が将来社会に出てから、どこかでこ

の４日間のことが潜在観念として残っていたら……、必ずとっさ的に役立つこととして、ここという局面で出てくるだろうと思いました。今回のセミナーに対して準備等お世話賜りました神戸地区、四国地区のロータリーの皆様方に厚く感謝とお礼を申し上げ、今後ともこのセミナーが永く青少年の育成に役立つことをお祈り申し上げたいと思います。

ありがとうございました。

B班カウンセラー　水　谷　淑　子

今年も余島の春は暖かでした。

若い人達のキラキラした瞳、元気な声に又出逢え、幸福な気分になっております。

そして共に学んだ４日間は、私の生活にもきっと変化があることでしょう。

今年の受講生は本当に素晴らしかったです。一人一人に「ありがとう」。

戸　田　健　一

あっと言う間の４日間でした。この余島に来るまでは、ロータリークラブの活動そのものもわからないままの参加でした。

しかし、今回このセミナーのテーマである「アジアの一員として私たちはどうあるべきか」という問題を通して、ロータリークラブの精神、また日常会社中心の生活の中で、何か忘れたもの、そして自分を見つめなおす機会を得ました。

私たち個々が、地域社会にそして世界に大きな視野を向け、寛大な気持ちで奉仕できることは奉仕し、助け合って生きていくことの素晴らしさ、喜び、充実感など、ここに集まった多くの方々と共に私なりに少しでも身につけられたと思っております。

このような貴重な体験をさせていただけた事に、ロータリークラブの皆様にお礼申し上げます。また、４日間と短い期間でしたが、その中で、学生さん、留学生の方、そして様々な職種の人々とめぐりあえ、話をし、生活できた事は大きな収穫でした。

明日からは、また、日常の生活に戻ります。この４日間の思い出を心にとめて、新たな気持ちで、明日から頑張りたいと思います。本当にありがとうございました。

森　崎　訓　明

ＲＹＬＡセミナーに参加して、普段では得られないような貴重な体験をたくさんしたと思う。新たな友達が増えたということがまず第一の収穫だった。

３月31日に初めてこの島を訪れた時にはまったく知らなかった人達と、たった４日間でこれだけ仲良くなれるのだなあとつくづく感じた。いっしょに遊び、そしていっしょに討

論したりする中で深まってゆく、きずなみたいなものさえ感じた。

午前中にあった講義も自分にとって得るものが大きかったと思う。講義を通じて感じたことは、自分の国際協力に対する認識がまったくちがっていたということである。援助と言われれば、とにかく金や物をたりないところに送ればいいじゃないかというふうに思っていたが、そうじゃなくて、技術を援助するというのが大切だということがわかった。相手国の米を作る技術が不足していたら、実際にそこに行って米を作る手助けをするなどの、相手の立場に立ってなにをすれば一番良いのかということをよく考えた上で協力を行うということが大切だということがわかった。

この４日間のすばらしい経験を生かしてゆかなければならないと思う。

徳永　督

このセミナーの話を頂いたとき、ロータリークラブのことをほとんど知らなかった私は断わろうかと思ったが、一人で何も知らない所に飛びこんでいくことは良い経験になることだろうと考え直し、参加することに決めた。最終日を迎えた今日、「参加して良かった」などとは言うまでもないことで、３泊４日分以上の思い出ができ、とても満足している。

大学生である私もこのセミナーで受けたような講義は、聞く機会がなく、今となっては寝不足のため居眠りしていたことが悔やまれる。自分のことすらきちんとできていない私には、このセミナーのテーマはとても大きく感じられ、「今の自分に何が……」なんてことはいくら考えても、答は見つからなかったが、そのことについて考え、仲間と話し合ったことそのものが、とても大切なことで一歩を踏み出すきっかけとなるのではないかと思う。

このセミナーで出会った仲間たちはみんないい人ばかりで、毎晩夜ふかししたことは、とても楽しかった。また最後の晩の砂浜でのことは、戸田さん、犬賀さん、森崎さん、黒岩さん、一生忘れません。

明神亮博

ライラセミナーの何たるかなどほとんど知らぬままに余島にやってきて、狭いロッジの一室の補助ベッドに寝所を決められ、知らない人々と顔を合わせたとき、正直帰りたいと思った。しかしそんな気持は夕食前にはなくなった。これが始まりだった。

ライラの精神を理解することは未だできているとは思えないが、パーティーの晩の今井先生の言葉が少々重くのしかかってきた。我々は期待されているのだ。何かを知り、何をすべきかを知るために、そして行動の心をおこすために、このライラに来たのだなあと漠然とだが感じ始めた。僕は何かをつかまねばならないのだという思いは、少々のプレッシ

ャーだった。

班のみんなとの交流はとても楽しかった。一人一人といっしょにキャビンで時を過ごすのは、最初は合コンの乗りだった。しかし、毎朝の講義から、その社会への貢献などという、いつもの僕ならてれてしまってあまりしない議論を交えることができたことが、非常に嬉しかった。特に同年代にして既に社会に出ておられる人々、芸術の場におられる人、そして、台湾、韓国からのアジアの留学生の方々の意見は、いつもなら聞けない貴重なものだったし、とても狭かった自分の物の見方を開けてくれたことが、このライラを有意義なものにしてくれた。

このライラで僕の最も感じたのは、やはり他者との交わり方だった。対外援助のあり方にせよ、将来自分と患者とのあり方にせよ、基本はいかにして相手の身になれるかどうかだと思う。そして相手を真に理解し得たとき、初めてその人に何をしてやれるかがわかるのである。ここで学んだ精神をもって、社会に真に貢献できる医師とはどんなものかを考えながら、これからの生活を送っていこうと思う。

中　島　貞　久

このセミナーについては事前の知識はほとんどありませんでした。もし事前になんらかの知識があったなら参加をためらったかも知れません。なぜなら参加者の年齢層が若いという事もありますが、本セミナーの目ざしているものがすばらしいことですが、私にとっては大き過ぎると感じられたからです。狭い地域でのボランティアについては少し経験があるつもりでしたが、グローバルな考え方を現実の自分において出来ようはずがないと思っていたからです。でもその考え方はまちがっていたことが、先生方の講義、仲間との語らいの中で少しずつわかって来たような気がします。

＝タイムアウト……略＝

スポンサーの皆様方にはお礼申し上げます。

池　田　安　男

ぼくの人生にいへんがおきた。

心がないた気がした。1994年３月31日～４月３日までで福祉について１年も３年もかかることを、この４日間で学んだ気がした。

又日本人はみずから心を白色し、対する人の色に合せる心の持ちぬしとして生きることが出来ることの外に、私は考えました。自分色を主張し、相手もみとめ合うこと!!　もしかしてそれが光の三原色ではないかと……。

天地宇宙の法則に従って、生きているかぎりとなりには人がいて、木と花そして、大き

な波もあることに感謝して、ガバナーの石井さん、ディーンの谷口さん、オイスカの渡辺さん、塩月教授、そして梶浦パストガバナー、そして各スタッフのかたがた（ここまでくるまでのうんてん手さんも含む）へ、一言「ありがとう」。

思索の時間、カニとあそんだとき、ぼくの人生にいへんがおきた。

永井雅人

このＲＹＬＡセミナーで全く知らない人達と３泊４日の日々を過ごしたが、今まで知らなかったと思えないほど皆さんと仲良くなり、大変たのしい時を過ごせた。

キャビンタイムやバズセッション、フォーラムの中では、いろんな人のいろんな考え、意見があり、社会人、大学生問わず、皆さんしっかりした人が多いのに大変おどろき、自分のたよりなさやしっかりとした意見や考え方をもっていない自分になさけなさを感じた。そして、アジアの一員として私達はどうあるべきか、おぼろげながらわかったような気がする。

最後に、このようなセミナーに参加させて頂いたロータリーの皆さんには、大変感謝し、これからの生活に役立てていくよう努力していきたいと思います。

竹田英司

ライラセミナーに参加して本当によかったです。たくさんの友人に出会い、いろいろな事項について話しあえ、また留学生の人とも話が出来、非常にうれしかったですし、勉強にもなりました。

日常の生活では、ただ周りに流されていくことが多く、いろいろな問題に対し深く考える時を造り出すこともままならずいましたが、こうして４日間という有意義な時間を与えられたことに対して深く感謝をしたいと思います。

このライラセミナーに参加し、明日から日常生活にもどりますが、その時にいったい自分は何が出来るのだろうか、と考えた時に今の勇気、気持ちがなくなりそうで少しこわいです。いきなり大きなことは出来ないでしょうが、今のこの小さな火は消さないよう、問題意識を持ち、自問自答しながら、また数多くの人々と会って自分を高めていきたいと思います。

犬賀貴夫

このセミナーに参加させて頂き、一番自分の為になった事は、いろいろなすばらしい先生方や様々な外国人の方に出会えた事、少しではありますが、お話ができた事であったと

思います。そして、今まで、近くに住んでいながら、お会いする事さえ無かった方々に出会い、話せた事だと思います。

そして、その中で、自分がどれだけ世界の事について知らないか、どれだけ世界の中において、ちっぽけな存在でしかないかということを認識できたと思います。また、少しではありますが、自分にしか出来ない事もあることを発見できたと思います。

これから死ぬまでの間、立派な生き方が出来る人間として努力してゆきたいと思います。

最後に、こんなすばらしい機会を与えて下さった方々に感謝いたします。ありがとうございました。

黒　岩　和　宏

この余島でのセミナーを受けるにあたって、僕はけっこう軽い気持ちでここに来ました。でも来てみてその気持ちはがらっと変わりました。

僕は班の中では一番若かったのですが、リーダーとなり、そしてみなさんは年下の僕のいうことを聞いてくれ、そしてアドバイスして下さいました。

キャビンタイムではみなさん年齢の差など関係なくいろいろな話が出来ました。講義では３人の先生方の大変ためになるお話を聞け、そしていろいろと考えさせられました。レクレーションやバズセッションでは、班一団となって取り組めたことはとてもよい思い出です。

僕はこのＲＹＬＡのことはあまり知りませんでしたが、また機会があれば、ぜひ参加したいと思います。

崔　　光　炫

留学生の一人としてこんどの研修に参加して、日本の青少年と幅広くはなしを展開しました。こんどの研修は私にとっても日本の青少年にとっても、大きな勉強になったと思います。今回のように留学生が日本の青少年とはなしをして、アジアについて、世界についてふかく、熱心にそのテーマに対して論議をしたことはまだないです。こんどのきかいで今の日本のわかい人の心に何をもっているかを多少わかることができました。次にもこんどのような研修をたくさん開いてもっと多くの日本の青少年が、またもっと多くの留学生とお互いにつきあって、世界についてアジアについて、なおどんなテーマでもいいからとにかくはなしあって、おたがいの心を開くことができれば、それこそほんとの世界への平和のみちであると私は思います。

参加者感想文

加藤知子

今まで何の関わりをも持たなかった、このライラセミナーの受講生の皆さんと４日間のプログラムを通して、共に学ぶ事が出来、ここに少なからず、同志として心のつながりを持てた事を大変幸せに思います。

９年間、社会人として福祉の現場で働いてきた私にとって、様々な生活環境、年齢、職業の違う方々と接し、ディスカッション、班やいろいろな形でのグループを形成するプロセスを経験できたということは、大きな刺激でありました。その中で人とつきあうむつかしさ、楽しさ、自分のあり方、姿勢というものを再認識できたのではないかと思います。

又、３日間の講義で感じた、実践と知識、認識の重要性を今後、何らかの形で表現していかねばならない自分の責任を可能な限り実行していきたいと思います。

４日間、様々な事を感じ、経験できる場を与えて下さいました事を心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

原田雅代

このセミナーに参加させて頂き、たくさんの人々と出会え、たくさんの価値観を知り、又、私の知らない社会を見ることができたことを、大変嬉しく思っています。

３泊４日の間に諸先生方からお聞きしたお話、キャビンタイムでの意見交換、そしてバズセッション・フォーラムでの意見は、どれもこれもとても新鮮で、大変興味深いものがありました。全く知らない人々が、一つの所に集い、同じ方向に向かうということのすばらしさを体験でき、又、その中で本当に一人一人を大切に受け入れて下さった仲間に出会えたことを宝物にしたい気持ちでいっぱいです。

このセミナーで学んだことを無駄にしないよう、私なりにできることから、一歩一歩、歩んで行きたいと思います。

本当にありがとうございました。

内野佳奈

ライラセミナーに参加して、仲間を通して学び得た事、それは人との会話の中から、行動の中からいろいろあったと思います。

先生方の講義の中からも新しい見方、考え方、私たちでは思いつかない言葉で表わし、むずかしすぎて理解になやむ時もありましたが、まわりの人たちに気がるに聞き直せる、一人の方に一つといかける事で一つ二つと答えが返り、それを聞いていた人もその会話に参加するというコミュニケーションも生まれ、今までの生活の中では、考えつかないような事がありました。

幅広い年齢層、自分を持ち、人の意見を聴き、今リーダーとなるのに一番近い人たちの中での生活は、とても考えさせられる事ばかりでしたが、私にとって限られた今という時間をもっとも良い形でのこせたと思います。まわりの人たちにも、参加させて頂く事のできた事を感謝し、その気持はこれからの私の行動であらわしたいと思います。

田　所　弥　生

とても有意義な４日間を過ごすことができ、ロータリアンの方々をはじめ、余島ＹＭＣＡの職員さん、そしてここで出会った皆さんに大変感謝しております。ここ余島の美しい自然、皆様方の善意にふれることによって、日頃忘れかけていた何かを思い出し、取り戻すことができた様に思います。

“アジアの一員として……”とかなりシリアスなテーマでしたが、普段気には止めているもののその糸口が見あたらなかった私は、突破口を見付けた気がします。ここで思った事、感じた事を地域に持ち帰り、身近な人まずはローターアクターに伝え、そして今後のボランティア活動に役立てていきたいです。

宇都宮　千　香

３泊４日を終えて、自分がいかに小さな世界しか知らなかったのか、もっといろんな所へ出向いて、もっと実際の活動をしなければならないんだという思いでいっぱいです。

今までも何か自分以外のためにやりたいという気持ちはあって、ボランティアや海外援助のことを調べたりしていても、日常生活で精一杯で具体的な活動は、このセミナーで出会った人たちのようにはしていませんでした。

私は昨日フォーラムで発表させていただきましたが、本来大勢の人の前で発言するのは苦手で原稿を班の方々に書いていただき、読むという形をとらせていただきました。数を重ねれば慣れるからと皆さんに励ましていただき、他に立候補者がいなくて、推薦されて仕方なくではありましたが、やってみてよかったと思っています。自信のない私にもやればできるんじゃないかという気持が生まれましたし、他の人の手助けとほんの少しの勇気があれば、なんとかこなせるのではないかとも思いました。

それでもまだ他の方々を見ていて、私はやるべきことが、学ばなくてはいけないことがたくさんありそうだと感じ、帰ってから、何かやってみたいと強く思っています。

あと一つ感じたのは、リーダーとは、皆を引っ張っていくだけでなく、うしろにまわって背中を押してあげることも必要だなと思いました。

とりとめもなくなってしまいましたが、このセミナーに参加できたことはとても良かったと思っています。これからもう少しがんばりたいと思います。

参加者感想文

三　木　めぐみ

今度、ＲＹＬＡセミナーに参加することが出来、大変良かったと思います。実を申しますと、セミナー参加に応募はしましたものの、「アジアの一員としての私達はどうあるべきか？」などいう、すごいテーマにどう対処できるか心配でした。そのために、３月31日が近づいてくるのを感じると気が重かったのです。ところが、いざきてみて、現在４月３日になってみますと、「ああ、もう終わりか」と思うようになっていました。

私は、「知識不足だし、他の人のレベルが高くて、話があわなかったらどうしょう」などと心配していましたが、いざ、班に分かれてみると、そんな心配は全く無駄でした。午前中の講義についての話し合いの中でもみんなが、自由に思ったように表現しているように思えましたし、他の人の意見を聞いていると、自分では思いつかないようなことがあったりして、その度に首を縦に振ることの繰り返しでした。本当のところこの４日間は遊んでいたと言っても過言ではないと思います。とても楽しかったです。

最初ロータリアンの方々が、「このセミナーですばらしい友を……」のようなことをおっしゃった（少し違っているかもしれない？）と思いますが、私は本気にしていませんでした。４日間一緒に生活するだけで友情なんか、と半分思っていました。が、今となっては、本当に不思議な気がしますが、この仲間たちとお別れするのがものすごく名残惜しく思えます。

自分が、このセミナーで何を得たのかは未だはっきりとはわかりませんが、このセミナーに来る前には何だかうじうじしていた心の中が、晴ればれとしているのは確かです。本当にこのような楽しい思いをさせていただいて、感謝しています。これから、何か、自分が役に立てる人間になれればうれしいと思います。本当にありがとうございました。

浦　田　亜紀子

私がこのセミナーに参加したのは、兵庫県の青少年本部からさそっていただいたからでした。この余島で行なわれるというところに魅かれてでした。リーダーシップアワードセミナーで、テーマが「アジアの一員として私達はどう生きるべきか」というものであることを知って、このようなことを普段考えたこともなかったので、その内容に自分がついていけるのかどうか、不安でした。

でもこの４日間で、私にとって大きな収穫がありました。それは、リーダーシップ、メンバーにとってのリーダーの存在について深く考えることができたことです。日頃ガールスカウトのリーダーとして活動していますが、いつも大変とまどいを感じていました。活動の内容について考えることはあっても、リーダーということについて考えることはありませんでした。奉仕をしてきたつもりでしたが、慣れるにしたがって、その心がこもらなくなっていました。それが、このセミナーに参加して、リーダーをする責任と新たな意欲

がでてきました。それと、アジア、世界と日本について素晴らしい講演をうかがい、自分で感じる部分があったこと。このことは、必ず、他の人に伝え、このセミナーに参加させていいだいたことに感謝したいと思います。

渡　辺　久美子

最初は、初めて知り合った人々と４日間うまくいくのか大変不安だったが、すぐに班の人々ともうちとけてとても楽しかった。またそれ以上に、知識面だけでなく、自分の精神面についてたくさん知ることができ、驚きと共にこれからの生活への気力が生まれた。同じ年頃の人々なのに、自分よりも多くのことを知っているし、多くのことを考えているのを目の当たりにして、最初は劣等感ばかり感じていたが、いつのまにか自分も考えることが大分できるようになった。

学校の合宿との違いは、自由の時間が多いこと、先生やロータリアンは陰から手を少しさしのべているだけで、責任は私たちにあるということだ。だからその分、自分のこと、相手のことを思いやる心を持つことができた。日本が他のアジアの国々にしてきたことについて私はあまり知らなくてとても恥ずかしく思ったので、その辺りをもう一度家で調べたい。

黄　　愛　玲

３泊４日という時間がとても短く感じたセミナーでした。最初はまったく知らない人ばかりでとても不安だったが、キャビンタイムを通じ、グループの人だけに限ってはいるが、前々からの知りあいみたいな雰囲気になり、互いに意見が言いやすい仲間となった。

授業とセッション等を通じ、一人一人の考え方が違う事を身にしみて感じとれ、また、ふだん学校の友人以外のつきあいがほとんどないため、セミナーに参加されたいろいろな学校、職業を持つ人達の意見が学べて本当によかった。そして学校の友人とは論じにくい日本人観についても、このセミナーにきている人達は人の意見を聞いた上でそれぞれに各自がしっかりした観念、意見を持っているためとても話し合いが楽しかった。そして、台湾、私の母国に対して、じっくり私の話を聞いてくれて理解しようとした点もすごくうれしかったです。

このセミナーで台湾人として、一人でも多くの日本人に台湾のことを知ってもらえたことと、私自身も異なった生活環境を持つ様々な人達の事が聞けて、自分の反省にもなり成長へとつながっていきたいと考えました。

そして一番大きい収穫としては、多くの学校では知りあえない友人を得られたことじゃないかと思います。

C 班

C班カウンセラー Graham Page

Rotary does many things, from very small projects to extremely large ones like Polioplus. In my opinion, the RYLA project is one of the best.

Because:

a) Rotary's main function must be education.

b) It's easy to get a quick sense of satisfaction from donating money to some faraway cause but it is harder to devote time and effort to people near you.
RYLA involves us with our own young generation

c) The younger generation (so quickly criticized by the older generation at times) in fact become the teachers of the older generation.

I personally gain much more from RYLA than I can give. It's my belief that more 'Rotary club members' could make the step to being full 'Rotarians' if they exposed themselves to the RYLA spirit. Thanks.

C班カウンセラー 林　眞紀

心やさしい若者たちと共に４日間をすごすことが出来、感謝の気持で一杯です。有難うございました。日々のくらしでは、自分の生活するほんの狭い地域のことしか考えない私

でしたが、自分もアジアの仲間であること、そして、どうあるべきか考えることが出来ました。

一人一人が、自分の今あることを深く知り、日本、アジアそして全世界の一員であることを知り、手をつないでいくことが出来たら、どんなにすてきでしょう。ライラに参加した皆様が世界市民のリーダーとなられ、永続可能な社会の発展を支えていかれることを願っています。

――でも楽しいキャビンタイムでしたね。皆様の楽しそうな声、笑顔、忘れることないでしょう。皆様のお幸せ心より祈っています。さいごにPageさん、色々ありがとうございました。ロータリアンの皆様ありがとうございました。

久　保　幸　司

まず第一に海外へ出て、アジアを始めとする外国の文化に触れてみたいという思いが強くなりました。

今までの自分は閉鎖的であり、異国との壁を取りさることはできませんでした。自分は日本人であり、高知県人である。これだけしか思えない人間でした。しかし、「世界市民」という言葉を聞き、日本人という小さな島国だけの人間というわくからはみ出し、世界を見つめていける人間になりたくなりました。ならないといけないという思いより、なりたいという思いの方が強い感じがします。

また、いろんな考え方の若者達とのキャビンタイムが何ともいえない程有意義であり、これからの自分の人生にとって大変勉強になりました。

こんな機会をあたえてくれたことを、大変感謝しております。

本　田　正　治

上司に命令されたような形で参加する事になり、非常に高レベルな研修である事も聞かされて不安な気持ちでした。しかし、今まで経験した研修とは違い、仲間の研修生皆んなが大変親しみ易く、ふれあう機会も非常に多く、初対面の人なのに一日目から打ち解け合うことができました。

テーマ『アジアの一員として私達はどうあるべきか』の講演からも多くの事を学ぶ事ができました。市職員である私は地域に閉じ込もっているようなものであり、世界の事を知らなすぎると感じました。外国に行くなりして、他国の人々とふれあう機会を少しでも多くして、みんなが世界市民として平和に生きていける地域作りに努力したいと思います。

参加者感想文

浜内恵一

二度目のＲＹＬＡセミナーに参加して初めて感じたことは、久しぶりに母校に帰ったようななつかしさと、うまく研修できるだろうかという少しの不安でした。というのも、現在私は31歳、前回の参加は、確か、12年前の20歳の時だったと思う。もう一度、あの時のようにいろんなことを素直に吸収することができるのだろうか。前回参加した時の自分のように若い人達とうまく交流することができるのだろうか。そんなことを考えながら小豆島に着き、余島に着き、なつかしいキャビンに入り、同じ班の人達に自己紹介をするうちに不安は消えてしまい、わずかな短い期間でしたが前回とは又、異なった視点に立った研修、時流に沿った有意義な研修が行えたことには、ロータリアンをはじめ、講師の方々、カウンセラーの方、同じ班の仲間に心から感謝いたします。

吉牟田　剛

３月31日、ライラという聞き慣れない言葉に興味と、不安を覚えながら私は小豆島に降り立ちました。私は大学のローターアクトクラブに所属していますが、恥ずかしながら、ほとんど活動もやっておらず、ロータリーの活動がどのようなものか知りませんでした。それでこのセミナーに参加することで、どのような活動をしているかを知り得ると思い、この余島に来た次第です。

このセミナーでの生活は、初めて会った人たちと共同生活をし、先生方の講義を聞いたり、レクレーションをしたりといったものでした。この一見、皆を不安におとし込むこのキャンプ状態でありましたが、これこそが私がこのセミナーを通じての一番の収穫でした。というのも、これが自主性を生み、そして日ごろ体験できないことを体験できた。また「日ごろ講義で発表しないのに発表して自主性が生まれた」など、自分の違った面を発見できたと思います。このセミナーを通じて、自己発見ができたということと、人と人との協和が大切だということが分かりました。私はこのセミナーで過ごした４日間をこれからの人生の糧として歩んでいきたいと思います。

センターの皆様、ロータリーの皆様、そして、このセミナーで過ごしたみんなに感謝したいと思います。ありがとうございました。

植田拓也

日頃考えていないことをこのセミナーに参加して考えることができた。私は、常に人に言われたことに対してのみ行動することが多く、自分で考え、また他の人にその考えを述べるという努力を怠ってきていたことを改めて感じました。

セミナーにおいては、渡辺先生と深く討論することができ、オイスカの活動を知ること

ができました。また、バズセッション、その後のフォーラムにおいて、自分の意見を持ち、それを表現することの難しさと大切さを痛感することができました。いろいろな経験ができたことに感謝しています。

このセミナーでの収穫は、新しい仲間を得られたということです。班の人達との話し合いで自分の小ささを、視野の狭さを痛感しました。このセミナーに参加したことをこれからの自分の成長の糧にしたいと思っています。ありがとうございました。

小田垣　憲司

とても刺激のある４日間でした。就職してから海外事情をあまり知ろうとしなかった。大学時代にアジアのことをゼミで取り上げたことがあり、本当にアジアにはまっている人もいた。そんなことを思い出しながら、昨日まで全く知らない同世代の人達と出会える機会をつくっていただいたことにとても感謝しています。激動の時代を生きているんだという戒めができました。仕事に追い回されて、何もしていない自分がとてもくやしく思いました。

この期間中に、社会教育主事という肩書付になりました。今後は、このキャビンタイムが身近にできるようなchance(機会) をつくり、challenge(挑戦) し、change(変革) できる青少年指導にあたってゆきたいです。知識だけでなく、自分の経験がいかせるよう、アジア各国に足を運びこれからを担ってゆきたいと思います。

本当にありがとうございました。

赤　枝　康　隆

Ｃ班での最高のメンバーに感謝!!

これから違った場所で働き、又、勉学に励み各自の地元へもどるわけですが、目標は皆同じ、心と心が離れてもお互いに通じ合っていると僕は考えます。ここでの新たな自分の発見に、これからの活動が益々楽しくなりそうな気がしています。

岡　本　一　大

このＲＹＬＡセミナーに参加する前には、ローターアクトの活動と同じようなものというイメージを持っていた。指導者育成セミナーや、新入会員研修セミナーといったセミナーが、ローターアクトにはあるからだ。

しかし、このＲＹＬＡセミナーは、ちょっとちがった。構成されているメンバー、受講生は、ローターアクトもＲＹＬＡも同じようなところから集まっているのに、キャビンタ

イムの時や、バズセッション、フォーラムの時などの、みんなの積極性はすごい。自然に役割がきまり、いつのまにか、リーダーがあらわれ、みんながまとまっていく。ローターアクトでは、なかなか出会えない場面だ。

このようなところを、今後ローターアクトの活動に取り入れていけば、活性化を望めるのではないか。

ただ、少し残念なのは、キャビンタイムでがんばりすぎて、講義の時、ねむたくなってしまうことだ。２時間半の講義の途中に休みを入れられないものだろうか。

最後になりましたが、このセミナーに参加するにあたり、両地区ガバナーをはじめ、多くのパストガバナー、ロータリアン、ＹＭＣＡの方、そして今井先生に大変感謝し、お礼申し上げます。

吉　田　勇　二

このセミナーには５つの特色がありましたが、中でも親睦の熟成が私にとってはかけがえのない財産になったように思います。何をするにしても人間には仲間が必要です。仲間をつくることによって自分を高め、また相手を高めていける。そしてそれが集団を高めることを痛感しました。

百聞は一見にしかず、とはよく言ったもので、私はこのライラセミナーに参加するまでは頭の中は不安でいっぱいでした。しかし、実際終わってみて、あの不安は何だったんだろうなんて思ったりしています。これも、このセミナーでお世話になった先生方、仲間のおかげです。また、自分に自信を持って地域に帰れることを誇りに思います。

折　尾　博　文

セミナーに参加して、今まであまり会話をしたことのない国の方々と、日本についての感想やその方の今の国の情報などを豊富に知ることができ、大変ためになったと思います。多くの人々とふれあうことによって、自分が今まで考えたこともないような事柄も考えてみようという気がおこりました。

３泊４日の中で自分の考え方や知識に新しいものを与えてくれたので感謝しております。個人、班、全体と、それぞれの単位で行ったもの一つ一つの中に、自分自身の足りないところが見えたので、これから先の課題にしていきます。貴重な物をくださりありがとうございました。

五　味　芳　恵

自分の卒業した専門学校で、外の世界を知らないままにその専門学校に就職して、教員をしている私は、同世代の人たちに逢えて、たくさんの話のできたこのセミナーは大変意義深いものでありました。講演では、今、私が何をすべきなのか、ということを勉強できました。また、バズセッション、フォーラムでは、リーダーという点で、本当にいろいろと考えさせられました。

現在、さして年の違わない、もうすぐ社会に出るべき人に教えています。今まで３年間、私が実践してきたことは、間違ってないとは思いますが、今度入学してくる学生には、違う面からも指導ができるのでは、と思っています。ただ、バズセッションの時には活発に議論できましたが、フォーラムの時は、自分の考えがよくまとまらず、あまり意見が出せなかったことが本当に残念です。

初めて出逢って、仲良くなった頃にお別れがきてしまうのはとても寂しいです。４日間なんて本当に短いものです。ですが、この４日間は、これからの私達にそしてその周りの人にもどんどん影響を与えていくことでしょう。これからも「積極的に行動する」ということを実践していきます。

私にいろいろな影響を与えてくださった皆様、本当にありがどうございました。

野　村　美　穂

すべて初めての経験でした。この余島についた時まず、美しい自然と出合いました。すみきった海水にふれた時、風を感じた時、３泊４日のこのセミナーで絶対何かを吸収して帰ろう、思いきり自然に溶けこんでみようと素直な気持ちになれました。それから友達の輪が広がりました。同じ部屋の子、同じ班の子お互いのいろんな思いを語り合いました。そして新しい私の世界が広がりました。「アジアの一員として私達はどうあるべきか？」について考えたわけですが、とりあえず私がここで見て聞いて学んだ事を地域に帰って家族、友達、仕事場で伝えてみようと、私のできる範囲で何か始めてみようと思います。ボランティア精神、グローバル精神、平等な精神を忘れずに、あともう一つ“フロンティアスピリット”をつねに開拓していく心を持って、一度は日本以外の国も見てみたいです。すばらしい思い出となりました。

城　島　よしみ

３泊４日と、あっという間でしたが、大変充実したセミナーでした。全く知らなかった人たちと出会い、寝食を共にし、語り合い、たくさんの事を学びました。自己を振り返るにも、良い機会となりました。自分の視野の狭さを思い知らされたと同時に、限りない可

能性があることを実感し、自然に囲まれながら、自分にも何かができるのでないかという気にさせられました。

アジアに目を向けるということで、テーマが大きすぎるように思っていましたが、この４日間で、なにもいきなり外国へ行って大きなことをするのではなく、身近な、ささいな事から何かをしていくというのでいいのだという事を学びました。一人では何もできないから何もしないのでは、何にも始まりません。何かしようという心を大切にして、小さな事から、取り組んで行こうと思います。

素敵な出会いをありがとうございました。

後　藤　江里子

貴重な４日間でした。様々な考えを持った友が出来、大変有意義に過ごしました。

私は高校の家庭科の先生になりたくて勉強しています。教師もリーダーの一人だと思いますので、３日目のバズセッション、フォーラムはとても参考になりました。「カリスマ性を持つ人がリーダーの条件」ということには、とても不安になりましたが、終わった後「リーダーとしての心構え」を認識して、行動すれば、こんな私でも立派な教師になれそうな気がしてきます。

又、中国やインドの留学生の方達と交流を持ち、私がいかにぬくぬくと育ち、狭い日本の国の中で世界への関心が薄いことに気付きました。

４日間の短いセミナーでしたが、私自身の考え方はずいぶん変わったように思います。

有難うございました。

大　槻　佐和子

私にとってこのライラセミナーやロータリーっていうのは今まで全く知らなかったことで、最初かなりの不安がありました。

けれど、この余島で過ごした４日間は私にとってすごく有意義だったと思います。

「アジアの一員として……」というテーマはすごく難しくて、最初のうちはキャビンタイムで話し合った時など、自分の意見を持ってる人を「すごいなぁー」って思ってました。

講義の内容もかなりレベルの高いもので、本当にじっと聞いてないと何の話かすぐわからなくなって、自分の理解力の無さに驚いてしまいました。

集団生活の方の面では、兵庫と四国っていうことで私にとっては全く未知の土地に住んでる人達とも知り合えてよかったです。

キャビンタイムでも、時には雑談会、時にはお互いの意見を言い合うという内容の濃い時がすごせてよかったです。

また、余島の自然もすてきだと思いました。必要以外のものが全くなくて、だからこそ一瞬一瞬が、大切に過ごせたと思います。

これから、自分の職場（役場）へ帰って、またいつもの生活に戻りますが、ここで学んだこと、お互いの議論をたたかわせたことを忘れないで、いつか生かしたいと思います。

セミナーに参加できたこと、C班のみんなに出会えた偶然に心から感謝します。

石　原　美　和

『アジアの一員として、私たちはどうあるべきか』今回のセミナーに参加するにあたって、事前にこの議題を聞くと、とてもむずかしく感じていました。実際に講義を聞き、思索の時間をもうけてもらい改めてもう一度考え、それをもっと深くほりさげてみんなで考え、世界市民という大きな事も、私達自身の問題である事を痛感しました。

４日間という短い時間に、たくさんの人に出会い話ができ、その人達が私にとってとても大切な人になった事も、セミナーでの大きな収穫です。今井先生が最後におっしゃった、日本の福祉は中に入れてしまう事だという話は福祉の現場で働く私にとって印象的な話であり、これから、現場にかえって、伝え、みんなで共に生きて行ける社会を作って行く事が、私のこれからの仕事だと思っています。１人では無理な事もみんなでやればできるをモットーにがんばって行きたいと思います。

松　本　佳　子

３泊４日という長いようで短い日を過ごしふり返って見れば、本当に来てよかったと思います。日常の生活から離れ、小さな島で、見知らぬ人と過ごすのは、なんだか不安でもありましたが、過ごしていると以前から知ってた様な感じで、今日お別れするのは本当に残念に思います。いつか又どこかで会えたらとも思っています。

この４日間、この余島の自然と親しみ、朝も家とは違ってどうしてか遅く寝ても６時30分にはきちんと目覚める生活で、朝海岸を歩き瀬戸のきもちいい風をあびながら、とってもいい１日の始まりの体験もしました。又夜は星がきれいで、このまま星を見て寝てしまいたい気分にもなりました。なんといっても、海がきれいな事、もう少し暖かかったら足をつけたりもしたいと思い、できなかったのが、今思えば残念です。他にもいろんな自然とたわむれ、自分にもっと休みがあればずーと過ごしたいとも思いました。

先日（３日目）のバズセッション、フォーラムといったのには、最初自分でもイヤだなーと思っていましたが、（こんな話をする機会が今までなかったので）なんか話している内に自然と意見も出てき、発表の時には、圧倒されっぱなしでした。でもあの中で、自分の心で自問自答しながら過ごした日でもあり、貴重な体験をしたと思います。他にも、私

たちの班には、いろんな国の方が参加されていて、今まで接した事が少なかった自分にとって、これも又いい体験でもありました。

みなさんいろんな考えを持ち、本当にこれから私たちが生きて社会に出ていく人にとってもいい話を聞くことができたし、自分の世間のせまさも思い知らされ、少し違った考えを持って、帰ってこれからの自分の生き方というのに少しでも役に立ったと思います。

ここに来られた方々は、社会人の方もあり貴重な時間をつぶして参加し、それに自分が来れた事に、本当によかったと思います。ありがとうございました。

（自分の思った事を、思いつくままに書いたので話がつながっていないと思います。）

浦　田　知香子

『アジアの一員として』というテーマが掲げられ、講演を聴き、バズセッションで自分の意見を言う。そんな難しそうなセミナーにこんな私が参加させていただいて、本当にいいのだろうかと恐れながら、余島に来て、４日間があっという間に過ぎてしまいました。

テーマについて、何か指針を見つけたとまではなりませんでしたが、３回の講義の他にも折にふれてロータリアンの方々からすばらしいお話をうかがい、「立派な方というのはこんなにたくさんいるんだ、私もいつかはこんな大人になりたい。」と思うことしきりでした。それらの方々から自分たちが次代の担い手として期待されているということもひしひしと感じました。

ここで感じたすべてのことを忘れたくありません。

このような機会を与えて下さった、ロータリークラブに心より感謝します。

D 班

D班カウンセラー　秦　紳一郎

今回、D班という偶然できた20名の受講生たちとの出あい、そして、共に過ごした４日間でしたが、あらかじめ人選をしてあったような、すばらしいチームワークのとれた班でした。最後のキャビンタイムで、みんなに感想を聞いた時、この４日間の熱い想いを、私たちに語ってくれた。

受講生のみんなに、私自身が、１まわり、２まわり、成長させてもらいました。本当にありがとう。

D班カウンセラー　関　淑子

第16回ＲＹＬＡセミナーにカウンセラーとして参加させていただきまして、ありがとうございました。講師の先生を始めロータリーの方々の含蓄あるお話、又、若者達のエネルギーにも心洗われて、私自身多くを学ばせていただきました。余島の自然の中での、４日間に感謝の気持でいっぱいです。

みなさまありがとうございました。この出会いの中から、何かを見つけ、新しく歩みゆく若者達の未来に願いをこめて……。

田　中　耕　司

４月１日を日程に含むこのライラセミナーには、教員である立場からは両手を挙げて参加するには、心に引っ掛かるものがありました。それは年度で動く私たちにとって、異動（別れ）の時期だからです。しかし、その貴重な別れを犠牲にした分素晴らしい出会いを経験することができました。

Ｄ班の仲間との出会い、余島の自然との出会い、そして、日常の生活から離れたいつもと違う自分との出会いです。そのどれもがいい出会いであったと思います。プログラムも工夫がされていて出会いを大切にすることができました。バズセッションは、他の班と比較することはできませんが、とてもいい話し合いをすることができたように思います。キャビンタイムは、１日目、２日目、３日目と日を追うにしたがって、互いの関係を深めていくことができたように思います。ほぼ70時間にわたっての共同生活は、普段の生活１ヶ月ぐらいに匹敵したのではないかと思います。

最後に苦言をいくつか……。

１つ目、午前中のセミナー（講義）の運営方法に一考を……２時間30分ぶっつづけというのは緊張が続かない。（休憩をはさむか、少し短くするか）

２つ目、フォーラムの運営方法？　確かまとめはしないということだったはずでは？進行役は話し合いのかじ取りをするのであって、私見を交えるのはどうかと思う。今井先生の話も翌日にまわすべきであって、当日は参加者が苦しみながらも一筋の光明を見い出せたらよかったのではないか。

３つ目、４／２の朝の質疑中“大虐殺etc”のことを若い人は知らない、教えてない……とか、バズセッション知ってますか？　知らないと思います……とかいう、決めつけたような発言があったのは残念。若者の自由な発想を奪いかねないと思います。

豊　田　英　男

第16回ライラセミナーを受講し、多くの友、多くの知識、色々な経験、そして日常生活では体験できないスケジュールにそって、自分という１人の人間をみつめ直す事ができ、希望と存在、心豊かに行動しよう!!　という考えが出来、命の洗濯とともに活力溢れるエネルギッシュな自分へと変化できそうであり、大変喜ばしく思い、実行していこうと思っております。

その中でもＤ班においては、男女10名ずつ、王さんという中国の方も交え、みんなが自分を飾らず、自然な自分で接し、特にキャビンタイム、バズセッション等を通じ、お互いを認識、理解しあえ、明日への希望、又、これから私達は何の為に、きばらず努力精進していけばいいのか等、ディスカッションを通じ得たものは、私の中、そしてグループの皆様の心の中にも刻まれた事と思っております。

次に、この余島についてですが、小さな島ではあるが、私のような四国から参加すると、四国も島というものが身にしみているが、兵庫県2680地区よりの参加者は、四国の皆様と同じ、そして、同じ舞台にたちスタートできた事がよかったと思います。

最後に、これから西条へ帰り、ここで学んだ大きな夢、多くの事をあせらず、じっくりと実行し、ＲＹＬＡ精神を１人でも増やし、世界市民が平等に、幸せに生活できるよう努力していきたいと思っております。

出席でき、幸せでした。ありがとうございました。

皆様、本当にありがとう。

本　山　政　幸

このセミナーに参加して思ったのは、昨日の講義終了後、フォーラムは、主催者側が型にはめよう、「時間・時間」と参加者の意見を一番聞かなくてはいけないと思われるプログラムの時の進行方法に、強く疑問を感じました。昨日は、３日目ということもあり、グループ内、又、個人の中でのムードの高まりもあったのだから、その辺に対する気配りをしていただきたかったと思う。しかし、３泊４日全体を通して見てみると、プログラムとプログラムの間がゆっくりととってあることもあって、グループ内での親睦もはかれ、プログラムとしては、良かったのではないかなと考えます。

若い青年層が集まるこのような研修を開催して、続けていくことは、大変な、御苦労だとは思いますが、あまり型にはめよう、はめようとしたり、強引に、フォーラム等をまとめてしまうのは、青少年育成という観点からも絶対に良くはないと思います。参加者の率直な意見に耳を傾けて、今後、17回、18回とより良いライラセミナーを実施していただきたいと思います。後、講義は少し長すぎたのでは、と思います。長々と、辛口な事を書きましたが、３泊４日で、バイタリティーを持ち、熱き心を持った方々と知り会えて、感動に胸ふくらませて帰ることは、大変、幸せであります。末尾になりましたが、このＲＹＬＡセミナーを開催、実施されました、ロータリークラブ関係各位の皆様に厚くお礼申し上げたいと思います。

本当にありがとうございました。

山　本　昌　彦

内容も何も分からずに参加しましたが、しだいに主旨も理解できてきて、自分の中で小さく萎んでいたもの・自分の中で漠然としたものが、次第に心に広がっていくのを感じました。

自分のために、自分のことに精一杯だった自分が、今後は、自分の隣人達や社会の人々

の中の一員として、自らリーダーだという自覚をもって生きて行けるのではないかと思います。

また、そんな自分を発見した今を、とても幸せに感じています。仕事や日常生活の言動の指針を発見したようで、これから新しい人生を楽しんでいこうと思っております。

吉　田　正　弘

まず、このセミナーを開催されたみなさんに感謝します。

このセミナーで感じたことは、バズセッション・フォーラム等あまり経験のないことに参加し、いろんな考え方、発想に驚かされ、また自分の知識のなさを痛感しました。

でも、一番うれしかったことは、たった４日間のセミナーだったけど、20名のＤ班が、一つになりキャビンタイムで、飾ることなく語り合えたことです。

104・Ｄ班のみなさん、それぞれ、また今までの生活に戻りますけど、お互いがんばりましょう。そして、また会える日を楽しみに。ありがとう。

上　宮　章　寛

不安と期待の入り混じった複雑な気持ちで始まったＲＹＬＡセミナーも今日で最後となりました。自分を見つめなおす良い機会だと思い参加し、思いがけない発見や、多くの友人を得ることができ、充実したセミナーであったと思います。

今回のセミナーで得た事、感じた事を、これからの長い人生の糧となるよう、また自分達の住む地域のリーダー的存在となれるよう、心がけたいと思います。

吉　田　竜　二

正直な話、このセミナーに参加するのはあまり乗り気ではなかった。時期が時期であったし、親やロータリーの方に勧められて仕方なくという感じであった。しかし、３泊４日のプログラムを終えて今、勧めてくれた人々に本当に感謝している。

私は人との縁というのは人生において最たる財産だと考えているので、このセミナーで、多くの人々と知り合い、語らい合えたことにうれしく思う。

講演も、非常に内容の濃いものであったと思うが、自分の知識量が少ないために消化不良に終わったことが非常に残念であった。

全体としては充実していたセミナーだったが、あえて不満を言うとすれば、もう少し受講生主体でもよかったのではないか。例えば、時間を気にするあまり、討議不十分のまま結論づけたり、また、フォーラムでは受講生主体とする質疑応答の時間が多くとられても

よかったのではないだろうか。

最後になりましたが、我々の為にいろいろとしていただいたロータリークラブの皆様に心より感謝しています。ありがとうございました。

本杉邦夫

３泊４日のプログラムも、終わってみれば、アッという間でした。ＲＹＬＡセミナーの主旨もあまり理解せずに参加しましたが、一番の収穫は、今までまったく知らなかった様々な人々と、話しをしたということでしょう。受講生の年齢にも幅がありましたが、「同世代」と大きくくくることができると思います。私は大学生ですが、大学という一つの閉ざされたコミュニティの中では、なかなか出会うことのない人々と、様々なことを話し合い、生活をしたということは勉強になりました。３泊４日間を長いとみるか、短いとみるか人によると思いますが、大変密度の高い時間であったように思います。

このセミナーで、何を感じ、何を受け取ったかは、各人各様であると思います。これが一つのきっかけとなって、何かが少しずつでも、変わっていくことでしょう。

細田英樹

まず、最初に残念だと思ったのは、講義の時間がやけに長かった割りには、質疑応答の時間が短かったことです。農業、産業の面からアジアのことについていろいろな事を教わって、さあ、何か考えようと思っても時間がたてばたつほど忘れてしまいます。

Buzz Sessionはもう少し時間がほしかったような気がします。テーマがかなり大きなものだったので話しきれませんでした。

フォーラムにおいて、まず第一に公平さの精神が足りないような気がしました。各班の発表した内容はやはり前にはって全てがどこからでも見えるようにしておくべきではないでしょうか。

僕自身、発表のすぐ後に質問は、といわれても、10秒やそこらで考えられません。

今回、時間と、個人の意見のどちらを尊重しているのだろうということに深い疑問をいだきました。

司会というものは話題がそれた時に流れをもどすのが仕事だと思います。必ずしも結論を出すことはないというのは感じました。

ところで、一番、腹立ちをおさえきれなかったのは、司会の人が、２つの意見（リーダーの定義）に分かれた時、僕達の方の意見に片寄ってＡ班の発表した人とかがいうリーダーの定義を否定しようというように思えたことです。

彼は、かなり失望したように思えました。

とはいうものの、このようにいろいろと考える機会にめぐまれ、本当にすばらしい人達と出会えたことは、一生忘れないと思います。

これからも、すばらしいセミナーを続けていきましょう。

山　田　高　義

これだけの短期間に、これだけ多くの仲間と出会えたことをうれしく思う。また会いましょう。

福　江　恵　美

何といっても楽しかった。おそらく、勉強を一生懸命やってきた人達であろう若者が、ここでの語らいや討論などから様々なことに刺激を受けたり感動している様子を見て私もうれしくなってしまいました。そしてこの時を与えてくれた方達、おいしい料理をつくってくれたＹＭＣＡの方達に感謝しています。お料理の中に愛を感じました。

実は私はゴミ拾いをしていません。これから海岸のゴミを拾いに行くのだと思い、カン違いして黒板の前に出て並んだ私は、もう席に戻るのが恥ずかしくって、そのままプレゼントをもらった私を許してね！　みなさん。

ロータリーの方達、講師の先生、ＹＭＣＡのスタッフの方達、みなさんありがとうございました。

中　村　礼　子

わずか、３泊４日のライラセミナーでしたが、本当に貴重な体験をさせてもらったと思います。最初はロータリークラブに関する知識も少なく、４日間で理解を深められるか不安でしたが、連日の講義、レクリエーション、バズセッション等を通して、頭で定義を理解するのではなく、心と体で感じられるようになってきたと思います。

特にバズセッションと、フォーラムの場は日頃漠然と考えてきた問題を意見としてまとめ、発表できた事は大変有意義でした。

今後もこのような機会を、積極的に設け、今、自分が自分の為でなく、世界市民として行動できることを一つでも増やしていきたいと思っています。

参加者感想文

前田千恵

今回のセミナーで、様々な新しい事が体験できて大変よかったと思います。普段の生活では出来ない事をすることで、少しでも、広い視野がもてたんじゃないかと思います。また、ここで出会った人たちと、たくさんの話をする事で、相手の事がわかったり、そしてまた、自分を再確認する事ができました。

これからは、ここで得た物を何らかの形で役に立てていきたいと思います。そして、この出会いを、ここで終わらせないようにしたいと思います。

廣野徳子

私がこのＲＹＬＡセミナーに参加して学んだ事はたくさんあるけど、その中でも強く思ったのは「小さなネットワークの力」です。

日頃、私は大きなネットワーク、つまり世界規模で考えることこそ平和につながると信じ、本や新聞を読み、又世界へ飛び出そうとしていました。

私の班には中国からの留学生の方がいて、色々と話していくうちに、ここにも世界へつながる糸口があるんだなと思いました。それは本などでは得ることのできないことでした。

アジアや地球レベルで物事を見つめてゆくことも大切ですが、基本的な人とのつながり、足元を見直す必要が、私にはまず必要だと感じました。

そして、このセミナーで得ることのできた、もう一つのことは「やさしい心」です。参加できて本当によかったです。ありがとうございました。

竹中佳絵

私が、このＲＹＬＡセミナーに参加したのは、自主的にという訳ではありませんでした。実際色々な人達と話しをしてみるとそういう方もいたし、前回のこのセミナーがよかったからという方もいて、それで職業もみなさんちがっていたりして、まあよく考えたら不思議だなと思いました。

この余島の３泊４日の間、同じ部屋で同じ時を過ごし顔を合わせお喋りをした人達とは、裏表なくお互い自分らしく過ごせていけました。ローターアクトとしての勉強やそういったことも私が知らなかったことやあやふやだったことも色々わかってとてもよかったです。

そしてどういう形にしてもこの会に集まった方々は、みんな素直に前向きに将来を考えている人達だなと思いました。充実した４日間だったと思います。

向　田　恭　子

今回第16回ＲＹＬＡ・ＳＥＭＩＮＡＲに参加できた事を光栄に思いました。私は、このＳＥＭＩＮＡＲが終わると留学をします。その前に良い思い出が作れたらと、一年ぶりに会うことになった友達に誘われて、ここ余島へやってきました。

最初着いた時、見渡すかぎり、自然、自然という感じだったので、おもわず、深呼吸をしてしまいました。そしてキャビンへ向かってあるいていると足元にすみれの花が咲いていたので１輪摘んで押し花にしました。又、部屋からは海が見え、波の音も気持ちよく聞こえてきました。そういったたくさんの自然の中で、心のお勉強をすることが出来た事を光栄に思えますし、明るくやさしい友人達とめぐり逢えた事もとてもうれしかったです。あと、留学生として来ていた中国の王さんと出逢い話しをした事で、私も、留学でつらくなる時があっても、がんばろうと、強く思いました。

石　井　久　美

ライラセミナーに参加して、同年代の人や年代の違う人と意見を交換する機会に恵まれたこと、嬉しく思います。他の人の知識の豊富さに感心すると共に、自分の知識の乏しさを痛感しました。もっと学ばなければいけないと、非常によい刺激を受けました。自分自身を見つめ直すよい機会になりました。一生の中で、出会える人は限られているので、このセミナーで出会えた人を大切にしていきたいです。

王　霄　兵

青い海と豊かな緑にかこまれた余島で、大勢の日本人の若者たちとともに、楽しい４日間を経て、とても幸せと感じていました。そして、ロータリーということについても、よく勉強になりました。本当に素晴らしいことだと思います。私は、これから、日本で日本のことを勉強しながら、できれば、ロータリーのいろいろな活動に参加したいと思います。将来、中国に帰っても、日本と中国の文化と経済交流のかけ橋のような仕事をしたいと思います。

参加者感想文

小松島ロータリークラブ　井　内　直　行

３月31日より４月３日まで第16回ライラセミナーにロータリアンとして参加させていただき驚きと感動の心の満ちる有意義なる３泊４日でした。ＲＹＬＡ、即ちロータリー青少年指導者養成プログラムは、ロータリー活動の大切な部門である“青少年への奉仕”の一環として1949年米国で設立された、指導者キャンプが発端となったと聞いております。この余島の恵まれた設備と自然環境の中で本日から４日間の研修が始まると期待に胸ふくらませております。桜はここ数日来の寒さで蕾はかたく花開かずでした。

開講式オリエンテーション、オープニングパーティーから、すでにライラ熱は高まり、今井鎮雄パストガバナーの御挨拶に感動しました。キャビンタイムは谷口修平ディーン、菊澤建明元ディーン、篠原成行ライラ委員長、森恒弘ライラ委員、林和敏宇和島ＲＣの素晴らしいメンバーと502号で同室させていただき、深夜２時までライラのこと、ロータリーのことを語り合い、ロータリアンとしてのエネルギーが感じられる充実した時間でした。

メインプログラムの体験を通じて熱の入った、各講師の授業、プログラムが進むにつれて、ロータリーが目ざすライラセミナーに対する理解と感動を覚えた次第です。21世紀を目前に控え、人間としての「思いやり、愛の心」をもって心豊かに健やかにアジアの一員として共に生きて行こうではありませんか。縁あって共に過ごした素晴らしいキャビンタイムを過ごした、502号の皆さん、この出合いを大切に地域社会で頑張って下さい。

４月１日は「アジアの一員としての私達はどうあるべきか」のテーマでオイスカ（ＯＩＳＣＡ）理事渡辺忠氏の素晴らしい講義があり、夕方よりあいにくの雨となり、キャンプファイヤーは大集会室であった。今井鎮雄パストガバナーの国際ロータリー世界理解賞を受けたマザーテレサの話があり、感激しました。

人と出あい、神と交わり、愛の灯の燃える余島でいつ迄も心の交流が出来ますように、心から願っています。

このライラの実践にあたって、ロータリアンスタッフの皆様の御努力こそ真の奉仕の実践のように感じさせていただきました。青年リーダー、ロータリアンの皆様、深く深くこの機会を与えて下さいました事に感謝申し上げます。ほんとうに有難うございました。

第16回ＲＹＬＡ委員会

ガバナー	第2680地区	石井　澄（明石ＲＣ）
	第2670地区	田村俊久（高知東ＲＣ）
顧問	第2680地区パストガバナー	今井鎮雄（神戸西ＲＣ）
	第2670地区パストガバナー	梶浦暲一（松山ＲＣ）
ディーン	第2670地区	谷口修平（松山西ＲＣ）
副ディーン	第2680地区	井奥寛泰（姫路南ＲＣ）
アドバイザー	第2680地区パストガバナー	内藤尚武（尼崎北ＲＣ）
	第2670地区パストガバナー	松野　明（松山東ＲＣ）
	第2680地区パストガバナー	深川純一（伊丹ＲＣ）
ライラセミナーアドバイザー	第2680地区元ディーン	安平和彦（姫路ＲＣ）
	第2670地区元ディーン	菊澤建明（伊予ＲＣ）

第2680地区

青少年奉仕委員長
大島秀夫（加古川中央ＲＣ）

青少年奉仕副委員長
三木　明（姫路ＲＣ）

ライラ委員長
井奥寛泰（姫路南ＲＣ）

ライラ委員
小池弘三（神戸須磨北ＲＣ）
三木且視（龍野ＲＣ）
美田和茂（神戸東灘ＲＣ）
米澤淑介（明石北ＲＣ）
吉田直彦（三木ＲＣ）
秦　紳一郎（洲本ＲＣ）

第2670地区

青少年奉仕委員長
有光和雄（松山南ＲＣ）

ライラ委員長
篠原成行（北条ＲＣ）

ライラ委員
森　恒弘（高松南ＲＣ）
元廣武志（徳島北ＲＣ）
井上昌俊（松山西ＲＣ）
白川了一（西条ＲＣ）
浜田英宏（中芸ＲＣ）
平地保治（小豆島ＲＣ）

カウンセラー

小池弘三（神戸須磨北ＲＣ）
秦　紳一郎（洲本ＲＣ）
水谷淑子（神戸垂水ＲＣ会員夫人）
山路喜代子（芦屋川ＲＣ会員夫人）
林　真紀（神戸須磨ＲＣ会員夫人）
有光和雄（松山南ＲＣ）
Page.Graham J.（高松ＲＣ）
関　淑子（高知ＲＣ会員夫人）
有光洋子（松山南ＲＣ会員夫人）
橋本知詠子（高知ＲＣ会員夫人）

1994年3月31日～4月3日

主　催　国際ロータリー第2680地区
国際ロータリー第2670地区
RYLA運営委員会

開催地　神戸YMCA余島野外活動センター